
EYES

蛇豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EYES

【Nコード】

N6322P

【作者名】

蛇豆

【あらすじ】

たった八人の人間が、化物と化した六十五億人と人類の存亡を懸けて死闘を繰り広げる。人間達の前に蠢くのはゾンビよりも性質の悪い「ノーアイズ」…。それは日々高速進化していくアンデッドだった！貴方が目にするのは、絶叫と絶望のバイオショックと、嗚咽と酸鼻のグロテスク。そして腐敗と崩壊のニューヨーク…。

とまあ堅い挨拶は置いて、だ。俺の名前はジョンってんだ。レジスタンスのリーダーをやってる。よろしくな。おっと、そのの

君。スクロールせずに俺の話を聞くんだ。さてと、画面の前の君に
単刀直入に言う。俺らの仲間に入ってくれないか？お前の目はそこ
いらのぬるま湯話を聞き飽きたような目だ。画面越しでもわかる。
もしお前がこの世界に入ったら狂乱地獄へのトリップできつと満足
させてやる。さあ、さつさと化け物共のどてっ腹に鉛玉をぶち込も
うじゃないか。L e t ' s P U N K ! !

序章1（前書き）

もう少しで2011年？
早っっ！！

という訳で始めましたEYES。
一つ一つ超短いので3日に一回更新できるといいな
ではごゆるりと。

序章 1

ガンシヨップの自動ドアがせわしなく叩かれる。

客？そんないいもんじゃない。

人間は俺達以外誰もいないのだから・・・。

ジョンは手に握っていたマグナムを一発、二発とドアにぶち込んだ。

直後、ドアのガラスが砕け散り、そのすぐ向こうで大きく黒い血溜まりができた。

その中で肉塊になっているモノはガンシヨップに潜む八人には見ずとも容易に想像できた。

「ノーアイズか・・・！」

怪物だ・・・。

アメリカ ボストン 12月25日午後6時

世界が怪物に喰い潰されて2ヶ月が経った・・・。

序章 2（前書き）

今回も相変わらず短いです。はい。まあ見てっ
てね

序章 2

2ヶ月前、ニューヨークの街が一夜で壊滅した。ノーアイズという怪物によってだ。

その後、ノーアイズはニューヨークから、ボストン、フィラデルフィア、ワシントンと次々に壊滅していき、やがてはアメリカ全土を支配してしまった。

そして、その破滅の波紋はカナダ、メキシコにまで広がる。人々はノーアイズの驚異の生命力と繁殖力に為す術もなく倒れていった。パンデミックから8日目。南アメリカ、侵略。

ここでようやくパンデミックが止まった。何故か。大海という城壁がノーアイズの侵攻を妨げたからだ。

そう。ノーアイズは海を渡ることは出来ず、水の中を泳ぐことも出来なかった。当時は。

12日目。城壁は越えられた。

ロシア、イギリス侵攻。

ノーアイズはたった4日で進化し、海を渡れるようになってしまったのだ。

南北アメリカだけと安堵していた人間が束の間、奈落へと突き落とされた。

最初は抵抗する者が現れたが、除々に勢力が無くなっていった。

その闘いで瀕死の重傷を負ったある男が死に際にこう言った。

「ゾンビの方がまだ良かった・・・。」

31日目。世界がノーアイズで埋め尽くされ、地球の暗黒時代の幕が開いた・・・。

序章 2（後書き）

後に有名になれたらいいな。

なるんだったら本当に「後々」になりそうだけどね。
短いから。

塵が積もれどやっぱ塵 になりそう

序章3（前書き）

今日もやりますよ、えっへん。
えっ、偉くないの！？

序章 3

ノーアイズ。

ぬめぬめとした粘着質の白い肌、長い紫の舌、鼻が曲がる程の腐敗臭。そして、顔に並んだふたつの黒い窪み。攻撃、威嚇時はそこから黒い体液が涙のように流れ落ちる。

ノーアイズの餌は哺乳類の目。発生当時は目を2つ食べると5日動けたらしいが、今なおされ続けている進化で程度は明らかになっていない。

ノーアイズは目の補食と共に繁殖も行う。目を抜き取り窪みになったところに体液を注入する。すると、まず視神経が破壊され、そのまま中枢神経、脊椎を蝕み、脳に至る。次に内臓、筋肉を腐らせ、最後に肌質、血液、さらに内臓構造までもが変化してしまう。

人によって時間の個人差はあるものの、致死率は100%。ワクチンも開発されていない（あまりの猛威に開発の時間さえなかった）。

しかし、ノーアイズは元々とはいえ人間なのである。

よって最初、アメリカはノーアイズを殺す事は人間を殺す事とみなされ犯罪として扱われた。ワクチンの希望に掛けた行為だったのだろうが、前述した通り、失敗に終わった。

そしてノーアイズへの対応が遅れ、人間定義の甘さが人間を殺す結果となってしまった・・・。

序章 3（後書き）

関係ないけど最近ニコ動の空耳ピングーにハマってます。
マーグナーム！！

序章4（前書き）

昨日事故ってパンクしてあーだこーだして結局書けませんでした！

めっちゃメンゴ

序章 4

ノーアイズは更に性質が悪い事に、人為的な研究、統率がされているのだ。

研究とは、補食対象の拡大、進化の効率化などといった、悪のノーアイズの研究。ワクチン開発は善に当たる。

統率とは餌場（猟場の確保と言った方が適切か）の確保、進化タイミングの調整などの行為だ。

それら研究と統率を行っているの人間がニューヨークに存在する。通称ダークネス。

ダークネスはコア・ビルという特殊に建築されたビルでたった一人でノーアイズの統率を行っている。研究はビルの地下で、アメリカ中から集められダークネスに洗脳された研究者達が日々、奴隷のような生活の中で研究している。

では、このダークネスを殺害したらどうなるか。ノーアイズは統率を失い、餌場を失い餓死するだろう。研究者も同様だ。

今、ノーアイズは何億、何十億と数を増やしている。これらとまともに戦って全滅させるのは物量的に無理だ。ならどうする？

答えは一つ。主の抹殺。ダークネスの殺害。

そしてそれがレジスタンスの使命だ・・・。

序章 4（後書き）

最近ポテチ、コンソメ飽きてきました。
口にまとわりつく味がうっとうしい！

序章 5（前書き）

メリークリスマス！
祝福に一曲歌います！

恋のメガラバ。

序章 5

今朝、ガンシヨップを確保できたのは幸いだった。手に余るほどの銃器が手に入ったからだ。

ジョンはふと、シヨップの割れた窓から臨める景色を見た。

ヨーロッパ調の寂れた家々が立ち並び、誰もいないその中を、12月の凍てついた風が1人駆けていた。

茜色をした西の空が、闇に浸食された東の空に蹂躪されている。

…雪だ…。クリスマス祝福か…

「ああ、今夜は冷えそうですね…。」ミシエルが冷えた手を吐息で暖めながら、ジョンに近づいてきた。

ミシエル。レジスタンスのシェフ。端正な顔つきをしたイギリス人だ。

「そうだな…。皆にシヨウガたつぷりの飲み物を作ってくれ…」ジョンの手も悴んでいた。

「了解。ではジンジャー・チャイでも作りましょうか」ミシエルはそう言つと、小走りでシヨップの調理室へと向かっていった。

「手早くな。日が沈んじまう。」

昨晩は5人死んだ。

序章 5 (後書き)

モンハン3 楽しー ♪

序章 6（前書き）

妹が夜中に不気味な叫び声が聞こえるらしい。

正体は歌のシャウトでした。^{バンク}ワタクシの。

序章 6

「皆さんジンジャー・チャイが出来上がりましたよ、どうぞ召し上がって下さい。」銃のショーケースの上に湯気の立ったコップが八つ並べられた。このコップの数は昨日の方が多かった。一昨日の方はもっと多かった…。まだ窓には辛うじて陽が差し込んでいる。

8人は一人一つずつそのコップを取っていく。

コップは暖かった。チャイを飲みこむとその暖かさが体の内部に染みていった。

その後、

げぶ。嫌な音が店内に響いた。ムードブレイカー少年、マックスのげつぶだ。

「あのすみません。貴方、もつと美しく振る舞えないのですか？」ミシエルが軽蔑の目でマックスを見る。

「あー、すみませんでした。げぶっ。」

ミシエルはため息をつき、「呆れた…。」そう言い残して身支度に入った

その時。

ぬちゃ。くちゃ。ぬちゃ。

突如、粘質の音がジョンの耳に入った。

序章 7（前書き）

モンハン 3

プレイヤー名を^{ジョーン}JOHN、オトモは全員レジスタンスメンバーの名前にしてるんだニャ。

序章 7

…ノーアイズだ…近いぞ…。

この不快音は他の7人にも聞こえているらしく、皆最寄りにあつた銃器を手に取り、身構えている。一気に空気が張りつめていく…。そんな中、音は徐々に近づいて来る。ジョンも飲みかけのチャイを足元に置き、愛用のコルトパイソンを腰から抜いた。

「こんな日くらい休日って事にしてくれよ…頭が痛え…」南部訛りの愚痴が聞こえてきた。黒人の大男、ボブだ。

「そんなに頭痛かつたら外行って空気でも吸ってこいよ。」ジョンは割れた自動ドアを指さした。不快音の方向だ。

「…俺が偵察…ってか…」連れを求めたが、協力者はいない。

「二日酔いしたお前が悪い。昨日俺の分を飲んだツケだ。」ジョンが一蹴すると、ボブはスキンヘッドの頭を掻いてから、レミントンのショットガンを握り、自動ドア…この店の出口へ向かった。

しかし、ボブは自動ドアの半歩前で立ち止まった。

そして、笑った。

序章 7（後書き）

菌「あのアンパン野郎…回を追う毎に元気が100倍になりやがる……………戦闘力53万だと…?!」

くだらんっスよね。はい。

序章 8（前書き）

これで事故の分チャラね。

序章 8

「ははは……！」

「……？」 ジョンはその不審な笑いに眉をひそめる。

するとボブは突然振り返ってこちらへ向かって猛ダッシュした。

その直後、鼓膜を切り裂かんばかりの大音量の狂った叫び声と共に、店の出口から大量のノーアイズが大津波の様に溢れ出てきた。

「俺が行くまでもなかつたな！」

「黙れ！！迎撃しろ！！」

一斉射撃が始まった。ノーアイズの叫びを掻き消す銃声の嵐の前に、大量のプリン状の肉塊が転がっていく。薬莢と腐った血肉が混じった臭気が強烈に鼻をつく。沸き上がる肉飛沫の間からも次々とノーアイズが現れる。上半身だけになったノーアイズが悶絶しながら這いずりだす。

「埒が開かねえ！アッシュー！！」

「サーー！！」 ジョンに呼ばれた男、アッシュ。彼はグレネードのエキスパート。アッシュはとっさに懷からグレネードを取り出し、栓を抜くと、ノーアイズの群の遙か後方目がけてそれを投げた。

ノーアイズの頭部と自動ドアの枠の間を、投げたグレネードは滑らかな軌道を描いて抜けていく…。

序章 8（後書き）

モンハン3

クエストそっちのけでネコとプーギー相手にムツゴロウ化してま
す

序章9（前書き）

迫りくる運命の日。期待に胸を膨らませるものの、心の何処か一片で不安が立ち上っていく…。未来の行方を支配するその日…。
d
o
m
s
d
a
y
.

それはそう…元旦のお年玉の事サー！！
いくらかな ワクワク♪

序章 9

「伏せろ！」

そしてそれはノーアイズの群れの後ろに着弾した瞬間、轟音を立てて爆発した。

ノーアイズ達の肉体が木っ端微塵に吹き飛ばされる。身をかめたジョンの体にバラバラにされた死骸の手足が当たる。

直後爆風はボブの鼻先数十センチで消えてなくなった。この爆風範囲ギリギリを、アツシュは計算していた。前を見る。先ほどまで大拳いたノーアイズが消えている。壁にへばりついたおびただしい量の黒い血液が糸を引いて異臭を放つ。

「ジャスト。」アツシュは嬉しそうにガッツポーズして見せた。響いていた爆音が今ようやく収まった。

その収まりを見てジョンは「…いつ新手が来てもおかしくない…さっさとここから出るぞ。」。コルトパイソンをホルダーに入れ、長旅ですっかりボロになってしまったシューズで肉塊を踏み越えながら、血の海の上を歩きだした。

序章9（後書き）

ジョン「…いつ新手が来てもおかしくない…。40秒で支度しな
ー」

一同「ばかじゃねえの」

序章 10（前書き）

忘年会、逝つて来ます

序章 10

クリスマスで賑わうはずの住宅街には人っ子一人見つからず、この上なく閑散としている。凍てつく風が吹きすさぶ。

お洒落に飾られるはずの街灯は真つ二つに折られ、電灯の破片が冷たいコンクリートの上に散らばっている。ほのかな光に包まれる筈の家々の中は廃屋と呼ぶにふさわしい程の悲惨な散らかりようになっている。明るく染まるはずの空は闇に閉ざされ、下弦の月がその中で孤独に佇んでいた。何も聞こえない静寂の中で唯一自分達の足音だけが響いている。道路では人々に乗り捨てられた車が群を成し、遠い虚空を見つめていた。

荒れ果てた街の闇の中を一步步、車の群を縫いながら進んでいく。

その途中、珍しく人間がいた。
腐乱死体になっていたが。

序章10（後書き）

ようやく序章が終わった！

次からがようやく本番、第一章「月光」に入ります。

乞うご期待！

第一章「月光」 1（前書き）

明日で2010年終わり…？

俺今年何してたんだっけ…？

クソして寝るの繰り返しだったな…

あああああああ！！（自己嫌悪中）

第一章「月光」 1

レジスタンスはパンデミックが起こって間もなくに結成されたものではなく、メンバー全員、凄絶な過去を経て今に至っている。

現在のレジスタンスのメンバーにはレイという少年がいる。

年は僅かに15。しかし彼が一番ノーアイズの恐ろしさを知っている。

ノーアイズとなった両親に襲われ、自分の手でその両親を肉塊に変えた。

そして…

「うう…う…」

「どうした！？レイ…」呟いたレイにジョンは立ち止まった。

同時にレイの額に銃口を向けた。

するとレイは一呼吸おいて「いえ…まだ大丈夫です…。」囁くよ

うなか細い声で応えた。

「我慢できなくなったら言え…」ジョンは再び前を向いて歩きだした。

レイの顔には左目がない。

常人では有り得ないほど肌が蒼白としている。

吐く吐息には腐敗臭…。

そう、彼は感染者だ。

第一章「月光」 1（後書き）

ドラえもん助けてええ

哀れなボクにタイムマシンを

第一章「月光」 2（前書き）

2010 終結。

俺の2010年の一年の無駄なこと無駄なこと。

第一章「月光」 2

しかし、彼の場合、特異の部類に入る。

通常の人間が感染すると、2、3時間でノーアイズと化してしまうが、彼は感染してから約2ヶ月、おおよそパンデミックが始まってすぐに感染したのだ。

遺伝子、体質的なものなのか、誰も判らない。

今、レイはレジスタンスとして行動しているが、もしノーアイズと化す時が来たら、その前にジョンが彼を銃殺する。レイを人間として死なせる為だ。一同は皆承知している。もちろん、レイ自身もだ。

レジスタンスは結成当時は100人強はいた。が、現在は8人。

リーダー、ジョン・ターウィルガー

黒人、ボブ・コーフイ

調子者、マックス・ドーラン

英国出身のミシェル・ドラクロア

爆弾狂アッシュ・スタントン

半ノーアイズ、レイ・ハウエル

そして脱獄囚のロバート・エッジコム、

紅一点のジャニス・ターウィルガー

皆、血と肉の噴霧を切り抜け、作り上げ、浴びてきた。

第一章「月光」 2（後書き）

もう勘づいたとは思いますが、最後のジャニスはジョンの妻です。

わーい。

よいお年を。

第一章「月光」 3（前書き）

こんな小説を読んでくれる物好き様方、あけおめ。

新年早々ボクは走ってきました。空手道場から神社まで。除夜の鐘が鳴らされた瞬間から。3人の小童どもを引き連れて。

第一章「月光」 3

ボストンの街並みは美しかった。

歴史を刻んだヨーロツパ風の住居を、代を次いで使っていた様子はまるで異国のようだった。2ヶ月前までは。

だがそれは今、死都と呼ぶにふさわしい、凄惨なものへと変貌し果てている。

ジョン達が歩みを進め、やがて車の群の中の少し開けたところに出ると、突如脱獄囚のロバートが歯ぎしりを立てる。眼前にある一台の黒い普通自動車の中を覗いていた。

「クソが……！」

車内にあったのはロバートが所属していたマフィアの仲間の死体だった。

切断された四肢が細切れになって血の海に散乱し、裂かれた横腹から飛び出た腸がとぐろを巻いている。

しかし、ロバートは仲間の死に歯ぎしりしたわけではなかった。

その死体が新しいものだったからだ。

車内の血痕が乾いていない。

そして、死体の口元が突然痙攣したように動き出した。

「……死に……た……くな……死……に……」哀れな事に死体と思っていたそれはまだ生きていた。

無意味な悲惨な掠れた小さな叫び声だった。そいつの目が、ロバートの方をギロリと向いた。片目だった。

「ろ……ロバ……アト……ロバ……ア……」

第一章「月光」 3（後書き）

というワケで今年も宜しくウ

第一章「月光」 4（前書き）

諸君、福本漫画の「最強伝説 黒沢」は絶対見たまへ。

私がわんわん泣きそうになったのは久しぶりだ。二年前のアンビリーバボー以来だ

第一章「月光」 4

「五月蠅えよ」それを見たロバートは懷からハンドガンを抜くと発砲した。車窓を割った弾は標的の眉間に命中し、一瞬血柱をあげた。直後達磨はぴくりとも動かなくなった。

「ケツ…」銃声が周りを取り囲む住居に反響して未だ幾重にもこだましている。

「…近いな…」ロバートの様子を横で見ていたジョンは呟いた。するとロバートは舌打ちして「…またバケモンの相手かよ畜生…久しぶりに女の相手もしたいぜ…」ちょうど真後ろにいたジャニスを猛禽の様な目で睨んだ。

「…何よ…」ジャニスは誰からにでも認められるような美人だ。しかし、

「おいコラ、俺の女に手を出すなって何回も言っただろうが…！」ジョンがジャニスに近寄るロバートの肩を強く掴んだ。ジャニスはジョンの妻だ。ロバートが振り返ると、そこには鬼のような形相のジョンの顔があつた。

「2年遅かったわね。」ジャニスが微笑すると、ロバートはまた舌打ちをしてその場から離れた。その離れたところにミシエルが待ち構えていた。

「分別をつけろと過去何回も申し上げたつもりですが…？」

「黙れクソキザ」

ロバートがそう吐き捨てた直後、ミシエルの鼻が異常な匂いを嗅ぎ付けた。

腐敗臭だ。

第一章「月光」 4（後書き）

カイジもアカギもそうだが、福本作品は素晴らしい。ホント、マジで。

鳥肌立つ。

第一章「月光」 5（前書き）

一日一膳。いい言葉です。

一日一EYESという言葉ができる事を祈っています

第一章「月光」 5

「この匂い…来ますね…」ミシエルが小さく呟くと、皆の元にも匂いが届いたらしく、各自武器をゆつくりと抜いていった。

「あーこの匂い嗅いでるとさっきのチャイ吐きそうだ…」ボブが肥満気味の腹をさすった。

「止めて下さい、汚らしい…」

「なんだその言い方。アメリカンジョークがわからん奴はイヤになるね」

「貴方南米出身なのは…？」

ボブは黙ってしまった。それに全く面白くない…、とミシエルが付け加えると、突如

シッ…！ ジョンが口元で人差し指を立てた。「静かに…！」

ざわめきが消えた。

静寂の中駆け巡る、荒んだ風の音。暗闇の中、先ほどより勢いが増した雪が月の光を浴びて銀の様に輝く。そのまま月の光は廃屋と化した石造りの住居を優しく包み込み、散らばった残骸達を抱いていく。

そしてその崩壊美の世界の中で車の群れの陰から腐敗臭と共に、粘着質の音と共に、無数のただれた頭が蠢きだした。

ノーアイズだ…。

第一章「月光」 5（後書き）

ボブ「あーこの匂い嗅いでるとさっきのチャイ吐きそうやわ…。」

ミシエル「止めて下さい、汚らわしい…。」

ボブ「なんやその言い方。…アメリカンジョーク…ちゃう…の…に…！」

ミシエル「!？」

放送禁止モード発生♪

第一章「月光」 6（前書き）

何故、ユニークユーザそこそこいるのに評価点上がらないんだア
？！

1、1 でもいいですから評価宜しくお願いします。

第一章「月光」 6

一挙に現れたノーアイズ達は眼窪から黒濁液を滴らせながら、ゆつくりとこちらへ近づいてくる。威嚇だ。

「構えろ……」ジョンの合図で各自、手にしている武器の照準を、奇怪に蠢くノーアイズ達に定めた。

1体のノーアイズの頭部に懐中電灯の光を当てる。何やらガムを食べる時の様な小さなソシャクをしている。注目していると、ぐちゃぐちゃになった眼球が一つ口の中で転がっているのが垣間見えた。多分先ほどの達磨人間のものだろう……。

直後、突然そのノーアイズが奇声を発し、跳びかかってきた。他のノーアイズもつられるようになだれ込む。

「ロバート、撃てえ！」

「あいよオ！」ジョンの叫び声と同時にロバートのウージーが唸りを上げた。見ると、片手で撃っている。ロバートにとって、ウージーの重量の3/4キロはどうという事もない様だ。9ミリウージーの弾幕は迫りくるノーアイズ達の体を次々と貫通し、横たわるトラックの車体に当たると火花を散らしていく。

すると、「ああ、説教の最中に……。」そう零したミシェルがロバートの加勢に入り、そのまま2人は戦陣を切った。

第一章「月光」 6（後書き）

「最強伝説 黒沢」を見て泣いた人、拳手。

次はスティーブン・キング小説の「グリーン・マイル」だあ。
これ読んだらEYESでちょっとわかる事あるヨ。

信じるか信じないかはアナタ次第… ってね

第一章「月光」 7（前書き）

ノアイズがNO合図。

…。

スミマセン、切腹します（嘘）

第一章「月光」 7

「足引つ張んなよ、クソキザ！」

「そちらこそ。」ミシエルは目にも留まらぬスピードで懷から抜いたのは、ベレッタ。装填数15発、反動が軽い上、重量もない、優れた米軍公式銃…。

それをミシエルはなぎ払う様に連射する。当たる訳ないだろ、とロバートは鼻で笑ったが、次の瞬間には向こう10メートル以上にいるノーアイズが、聞こえた銃声と同じ数だけ地に伏した。

「2人に遅れるな！」直後、ジョン達の援護射撃が加わってきた。

そして間もなく、襲い来るノーアイズは居なくなつた。全滅した。パトカーが黒に染まっている。

「…先を急ごうか」それを見てジョンは再び歩き出す。ボストンからニューヨークまでの道のりは長い。が、出来るだけ早く決着を着けたい。ノーアイズが、手に負えない様な進化を遂げる前に…。

ノーアイズの血糊は踏むとネバネバと靴底にくっついてくる。不快だったが、もう慣れた。

「みんな、怪我はなかったか？」振り返ってジョンは聞くと、皆期待通りの返答をした。死人、特に怪我人が出ないことは珍しかった。

「そうか、良かった。」そうしてジョンはまた前を向き直したその時、マックスが悲鳴を上げながらジョンの腕を掴んだ。

第一章「月光」 7（後書き）

呪い遊びの方法

呪い殺したい人の写真をくたくたになるまで濡らす
そしてその人の顔を埋め尽くすように大量の釘を神社境内の杉
の木に写真を打ちつける

すると

何も起きねえよバーロー！

第一章「月光」 8（前書き）

皆さん。私の家にお住まいだった蜘蛛の
蜘蛛 蜘蛛子さんが

今日の昼時、享年…一の位の四捨五入で 0歳にして亡くなりました。

皆さん、どうかご冥福を祈る必要はないですのでスルーして下さい。

第一章「月光」 8

「どうしたんだ！？急に！」

「あ…あれ…見てよ…！」マックスは震える指で後ろを指し示した。その指の方向を目で辿る。

すると闇の中、それは佇んでいた。何者かが車の陰からこちらをずっと見ている。

「なんだありやあ？」ボブが首を傾げる。距離があるから懐中電灯の光が届かない。

「…無視だ無視…行くぞ。」襲いかからないのなら特に心配はない。ジョンはまた一歩歩んだ。

その瞬間、それは動き出した。佇んでいた車の陰から出てきて、こちらへ近づいてくる。

次第に輪郭が露わになってくる。

……。やがてある程度輪郭がでてその正体がわかった。

あれは犬だ。毛並みは白。

「マルチーズだね」レイが嬉しそうにして犬に近づく。

しかし、「……?!」その足は途中で止まった。そしてゆっくりと後ずさり始めた。

「…どうした？ワン公が怖いのか？」そのレイの行動を見て、ボブは少し嘲笑した。

次の瞬間、レイは犬から逃れるように走り出した。犬もその後を突っ走って追いかけていく。

直後、止めに駆け出したジョンはレイとすれ違い様にはつきりと見えた。犬の体表の白い粘膜。眼窪には在るはずの眼球がない…。

犬もジョンの横を通り過ぎた。

第一章「月光」 8（後書き）

俺はその気になれば地球を一瞬で滅ぼせる力を持っている。
と信じてる。

第一章「月光」 9（前書き）

お詫び

第一章3で重要な部分が抜けてました。

そこ見たらわかりますがジョン達は今、ボストンの道路の車の群の中の少し開けたところです。

第一章「月光」 9

この犬はヤバイ！

そう直感した直後、ジョンはコルトパイソンを抜き、横切り様にその犬を撃った。弾が命中した頭部はその瞬間、破裂したように黒い血液と脳味噌をまき散らし、胴は国道のコンクリートの上に崩れ落ちた。

これで一同の目の前に出来上がった死体は、普通の犬のものではないことが頭部が原型をとどめていなくてもすぐにわかる事となった。懐中電灯の光がようやくまともに当たるからだ。そして、ジョンが見た犬の異常な姿は気のせいではなかったことが判明される…。犬の体表には毛はいっさい無く、代わりに粘膜質の白い体皮が懐中電灯に照らされて不気味に光っている。みるみる広がっていく血溜まりも黒だ。

「やつぱりノーアイズ…？だったね…。」レイは戻ってきて死体に近づくと、おそろおそろ足で死体を小突いた。

「ああ…。」ジョンはコルトパイソンのシリンダーに弾を詰め直し始め、少し間を空けてから言葉を続けた。

「唐突だが、困まれたみたいだ…！」

「…?!」皆騒然として辺りを見回す。すると、全方位の車の上で先程と同じ様な犬が数十匹、唸りを立ててこちらを睨んでいるではないか。

第一章「月光」 9（後書き）

モンハンやる気失せた。
なぜか。

ディアブロめんどいから。

第一章「月光」 10（前書き）

あーあ冬休みも明日で最後か…
年明けてから今まで何してたっけ…？
クソして寝てばかりだったな…。
ああああああ！！（自己嫌悪中）

ノーアイズの発生当時の餌は人間の眼球だけだったが、餌が不足したところで、ノーアイズは人間のものだけでなく哺乳類全般の眼球を食べられるように進化した。

従って、人間型以外のノーアイズも出てくる。

その中の一種、犬のノーアイズ、通称ブル…。

「おい誰だ…マルチーズとか言いやがった奴は…！」苦笑するブル。横にレイが居たが、何も答えない。背筋に走った戦慄が止まない。

ブルの群がじわりじわりと寄ってくる。

すると「…こりゃ、逃げっスね！」アッシュがその場から全速力で逃げ出した。

「あつ！おい！」制止をかけたがアッシュは聞かず、そのままブルの囲いの隙間を縫い、闇の中へ消えた。

直後、「早くしないと巻き込むっスよ！」その闇の中からアッシュの声が聞こえた。こちらへ振っている手が微かに見える。

「あの自己中野郎っ！皆、追いかけるぞ！」それを見てジョン達もアッシュに追いつこうと走り出した。

瞬間、ブルの群れもギャンギャン吠えながら、ジョン達を猛スピードで追いかけた。

第一章「月光」 10（後書き）

暇潰しに家にあつたチヨロQを横山光輝の三国志の下敷きにしてその上に乗ってサーフィンしてみた。

第一章「月光」 11（前書き）

僕つくん（ぼつくん）の説教コーナー

俺は登場人物にスキルがある話全般が嫌いだ。何故か。

登場人物の能力に際限がないからだ。

例えて言うなら、モンハンで閃光玉∞個でプレイして面白いか？
ライフが∞のスネークを敵陣突っ込ませて何が楽しい？

キング以外全駒クイーンのチェスなどもっての他。

熱くない。この感覚を持って頂けたら嬉しい。ファンタジー、特に登場人物のスキル。さっきの例と同様だと俺は感じる。

人間にはどうにもできないことが沢山ある。しかし、世の中の人間がもし特殊能力を身につけたとしたら、確実にその人間の人間としての価値が腐ると思う。何故か。

際限ないからだ。

決して越えられない限界というものがあるから人間面白いんじゃないのか。

そういう手の物語はどんなに面白いものだとしてもそれが欠けていると思う。

スキルファンタジー＝人間としての価値を失ってしまった人間による何でもありの超絶無法地帯カオスワールド。

ああ、魔法と聞いただけで反吐が出る。

「げえっ、やっぱ来やがったじゃん！」最後尾のマックスが振り向くと、30余りのブルがすぐ後ろを走っている。真っ先に襲われるのは俺?! 余りの焦燥感で涙が出てきた。

すると、ジャニスがマックスに平走してきた。「あら、ワンちゃんが怖いのか?」

「あんなのワンちゃんじゃないよ!」顔が汗と涙でぐちゃぐちゃになったマックスに対して、余裕の表情を見せるジャニス。

「だらしないわね。ちよっとボブ、手伝って。」ジャニスはため息をつく、走っているボブの太い腕を強引に引っ張った。

「な、何だつてんだ?!」ボブはバランスを崩した。その刹那に後ろのブルが視界の中に入った。「…逃げねえと!」

「早く構えて!」そう叫んでジャニスはショットガンの照準を迫り来るブルに合わせた。因みにショットガンはフランキ社のものだ。

「…殺るつてのかい。オイ。」ボブも仕方なくショットガンを構えた。全く…この強引な気性には滅入るな…という顔をして。

第一章「月光」 11（後書き）

だから俺は、もし女に生まれてドラゴンボールの中で誰と結婚したい？と聞かれたら、一糸の迷いもなく「ミスター・サタン」と叫んでやる。

第一章「月光」 12（前書き）

5000アクセスありがとうー。

これからも頑張ったり頑張らなかったりするのでもよろしく。

小さくて動きが素早いにはショットガン。

ブルの群れがすぐそこまで迫って来た。2人の眼球を狙って涎で糸を引いた大口を開ける。

と同時に、2人はショットガンのトリガーを引いた。

大きな銃声が響いた瞬間、今にも飛びかかろうとしていた先頭のブルが爆散し、残った散弾が周辺のブルを一気に吹き飛ばした。

その間に、2人はポンピングをし、もう一撃。今度は吹き飛ばしたブルへの止めの一撃となった。

再度ポンピング。トリガーを引く。すると、突如2人の目の前で銃声がかき消す程の強烈な爆発が起こった。

「！？ アツシユの野郎！」2人はとっさに屈むと、ハリケーンが通り過ぎる時のような力の爆風に襲われた。

「きゃあああああ！」爆風は凄まじい力だった。地面に伏せて、飛ばされないようふんばるのがやっとだ。

しかし、間もなくして止んだ。2人は地面に伏したままほつと息をつく。それと同時にアツシユが慌てて駆け寄ってきた。「大丈夫ですか?!」

するとボブは「今日の飯はアツシユの丸焼きに決定だな。」本気が冗談か分からない口調で首を鳴らした。

第一章「月光」 12（後書き）

暇潰しに機動戦士ガンダム the ORIGINをアムロもシャアもセイラも全キャラCVAナゴさんの若本で朗読してみた

第一章「月光」 13（前書き）

丸く収まったこの世界

作者は神乃幽也。彼は俺の友人なのだが、まあ頑張ったり頑張らなかつたりしている。

彼の作品を幾度となく見せてもらったが、この作品は彼の最高傑作に思える。

ぜひ読みたまへ。

今すぐ、小説検索へGO！

あ、いや、俺の全部見てからね。

その直後、不意に先程の生き残りのブルがボブに背後から襲いかかってきた。余りに不意だった。振り向いて銃を構えた途端、鋭い牙で噛み付かれた。

「……！」しかし、噛み付いたのはボブの体ではなく、ショットガンだった。ボブがショットガンを持った腕を持ち上げると、ブルの脚は地面から離れ、もがきだした。ショットガンから牙を離そうとしない。

「……コレどうすりやいい？」ボブは呟くと、横にいたマックスが一発かましちやえ。「そう言ってグロック19 9ミリの銃口をブルの頭部に当てた。装填数15発、600グラムの高性能銃。

「お前は信用ならないんだが……。」とボブ。ブルがより一層ばたつく。

「銃揺らさないでねー。」マックスは引き金に指を掛け一気に引こうとした、その瞬間。

ブルの激しくばたついていた右脚が、ボブの肥満気味の腹のみぞおちに直撃した。

「かはあッ！！？」ボブは痛みと驚きでショットガンから手を離してしまった。

マックスが放った銃弾が空を切る。

そして地面にきれいに着地したブルはショットガンをくわえたまま逃げるように走り出した。

第一章「月光」 13（後書き）

この小説、EYESが終わったら、EYESは一端休憩して、違うもの書きます。

『MURDER OF』（仮題）

内容はまだ教えな〜い。

ケケケケ。

第一章「月光」 14（前書き）

ユーザー10000越え有り難う。

この小説には特に主人公は決めてません。

これだと思っ好きなキャラを応援してみてはいかがでしょうか。

すぐさま逃げるブルにマックスがグロックを連発したが、弾が間に合わず、全弾地面の堅いコンクリートに弾かれた。「速え！」

すると、「どいて！！」弾の当たらないマックスに痺れを切らしたジャンスがマックスを押し退けてショットガンを構えたが、時既に遅く、ブルは車の陰へ入ってしまった。

しかしブルは尚も走り続け、やがてある店の中へ飛び込んでいった。

その店はバーガーショップ。ボブのお気に入りの店だった。パンズに挟まれたチキンの皮がとても旨かったのに、今は見る陰もないほど中は闇に支配されており、入り口の自動ドアの破片が冷たい床の白黒のタイルに散らばっていた。

「…やべえどうしましょ…」ボブはジョンに涙目で聞いた。ブルが店内に渦巻く底無しに闇に姿を消した。独りで取りに行くのは嫌だ。しかし、

「行つてこい。独りでな。」ジョンに最悪の受け答えをされた。

「ええ！？ そんな…！」

「当たり前だ！！ 自分のケツは自分で拭け！！」

ボブは渋々手に馴染みのないサブウェポンのハンドガン、スミスアンドウエソンを手に握った。装弾数15発…。

第一章「月光」 14（後書き）

暇潰しにRADを超絶キヤーキヤーシャウトで歌ってみた。

いい気分だ。実にいい気分だ。

第一章「月光」 15（前書き）

ブラクラ（BLACK LAGOON）1～3巻買いました！
むっちゃんLavy姉カッコいい！
でもヘンゼル共はファツキュ！。
ロリは嫌いだああア！！

「やべえぞコレ…」店内に踏み入ると、足下のガラス片がピシと小さな音を立てて割れた。

まずカウンターが目についた。懐中電灯で照らすと、腐った食べ物が散乱していた。ボブのお気に入りのチキンバーガーが異臭を放っている。

キッチン…。ボブはカウンターの側の扉を開け、真っ暗闇の中、懐中電灯を頼りに進んでいく。清潔が売りのキッチンは埃にまみれていた。出しっぱなしの包丁は錆び付き、パテには黒いカビが生えている。すると、奥で何かを発見した。

糞だ。多分ここに住みついているブルのものだろう…。乾燥していない。

「…早くここからトンスラしてえな…」急に孤独感が心臓にせり上げてきた。闇の中に吞まれていく自分。

キッチンを出て、連なるテーブル席の間を進む。途中にあった両目をえぐり取られた生首に目を背ける。

奥にはショットガンをくわえたブルはおらず、代わりに憂鬱なものが焦燥感に駆られたボブに追い打ちをかけるように存在していた。階段だ。そうだった。二階があった…。あのブルは比較的大型だったからここを上るのは雑作なかったのだろう…。

音が聞こえる。耳を澄ますと、カチリ、カチリとごく小さな音が響いてきた。

第一章「月光」 15（後書き）

ようやくこれで10000字越えました。

これまで読んで下さってる皆さん。ありがとうございます。あまりの短さに感涙してと思います。

第一章「月光」 16（前書き）

カイジの鼻でミカン刺せる。

ボブは確信した。ありや俺のショットガンが床を叩く音だ…。と。忍び足で階段を上っていく。踊り場に出ると、音が大きくなった。

「野郎…確実に居やがるな…。」さらに上ると二階へ着いた。周りの景色を見渡すと、殺風景になったのは一階と同じだったが、壁に張ってあったチキンバーガーの宣伝ポスターが引き裂かれていた。「ここのチキンに何の恨みがあるってんだ…。」

そう呟くと、キイコ。キイコ。次は違う音が聞こえてきた。ドアの蝶番がきしむ音だ…。見れば、正面奥のトイレのドアが割れた窓から漏れた風で不気味に揺さぶられていた。

もう居るならあそこしかない。ボブは決心して一步一步おそるおそる近づいた。

握ったスミスアンドウエソンのグリップに手汗が滲む…。

心臓の鼓動が早くなる。喉元から飛び出しそうだ。

ドアに近づくにつれ、足の震えが大きくなっていく。

と、その時、

ズダアアアアアアン!!!

突如、雷のような銃声が轟いた。

第一章「月光」 16（後書き）

ドアに近づくにつれ、足の震えが大きくなっていく。
と、その時、

ジダアアアアアアン！！

突如、雷のような頭突きの音が轟いた。

すまんネタ古いわ。出直してきます。

第一章「月光」 17（前書き）

キャラの容姿はそんなに決まってません。
ボブがスキンヘッドっていう程度です。

第一章「月光」 17

「何だ!？」急な爆音に心臓が飛び上がった。見ると、少し開いたドア下の隙間から、黒い液体が流れ出てきた。まさか…。

ドアの真正面に着いた。足元ではまだ黒の池溜まりが広がっている。

意を決してドアノブに手を掛け、勢い良く開けた。

扉の向こうにはショットガンが落ちていた。しかし、その脇にはブルの死体が横たわっていた。壁を見ると、小さい散弾の弾痕がいくつも開いていた。洗面台の鏡には、ブルのものだと思われるおびただしい量の血痕が付着して、ゆっくりと滴を垂らしている…。

暴発だ…。ブルがいじっている内に誤って引き金を引いてしまったのだろう…。腐った臓物の堪らない匂いがボブの鼻をつく。

落ちているショットガンを拾うと、その銃身に涎と傷がついているのを発見した。これはオモチャじゃねえんだぞ…。ハンカチで拭くと、唾液が糸を引いた。

弾を詰め直し、ポンピングし直した。「全く…手間かけさせやがって…!」

愚痴ってから振り返る。

すると突如、

振り返った目の前で、大きく開かれたブルの口に並ぶ無数の牙がどんよりと鈍く光った。

第一章「月光」 17（後書き）

目を閉じると、いつも脳裏で「20世紀少年」のともだちがエプロン姿で俺を追っている。

嘘だ！バツキャロ！！俺はジャンキーか！！

第一章「月光」 18（前書き）

モンハン3rd

僕は水没林に出かけると、よくあるものを目にします。

滝から落つこちて肉塊になつてゐるハンターさんの死体です。

シーブライト鉱石を採ろうと滝壺に行く度に目撃してしまうのです。

「ああ…奴のせいで足止めだよ…。」バーガーショップの外壁にもたれたジョンはケース最後のセブンスターに火を付け、空になつてしまつた煙草ケースを投げ捨てた。

「あんな下らないジョークを言つた天罰ですかねえ。」

ミシエルがため息をつくとき、「やめろ、感染る。」ジョンはボソリと呟いた。

ボブが行つてから10分が経つた。もう出てきてもいい時間だ…すると、「大丈夫かなあ、ボブさん。」レイが心配そうな顔をしてジョンへ寄つた。

ジョンは言われてしばらく考え込むとき、「…なあ…賭けでもしないか?」人差し指を立てた。「俺は 帰つてくる、に酒2杯。」

「俺も帰つてくる、に酒2杯。」ロバートは薄笑いを浮かべた。「泣きべそかきながら…な。倍率増えるか?」

「帰つてこないに、3杯です。」ミシエルにしては珍しく強い口調だった。

しかし…。

「マックスは?」ジョンが呼んだその時。

マックスがこの場から消えているのに気がついた。

「おい、マックス返事しろ!」いくら呼んでも出てこない。姿を現さない。

……。

ジョンは確信した。

「みんな、今の賭けはナシだ。マックスが行つちまつた。」

第一章「月光」 18（後書き）

つぎはBLACK LAGOONの4巻と5巻買いました。
ダッチのタラコクチビル半端ねえ。

第一章「月光」 19（前書き）

工口詩吟よ、永久に。

第一章「月光」 19

「うわあああああつ!!」突然の恐怖でショットガンを床に落としてしまったボブは悲鳴を上げて屈み、目をつむってしまった。ブルが超至近距離で襲いかかる。

諦めが、暗闇の中死へのカウントダウンを始めた。

ああ、もうすぐで俺の頭に犬っころの牙が食い込んでくる!

もうすぐ腕が足が喰いちぎられちまう!

もうすぐエサになっちまう!

嫌だ!

死にたくない!

神様!

助けて神様!

もうすぐ…!

もうすぐ…?

何故だ。5秒経った。いつまで経ってもどこも喰いちぎられない。五体満足だ。

重い脛を上げ、ボブの視界に映ったのは、

2匹の死体と1人の男だった。

マックスだった。見ると手に持つグロックが煙を微かに上げていた。

「どうしてお前も…?」

「面白そうな事には首突っ込みたくなるんだよ。立てる?」マックスはそう言って屈んだボブに手を差し伸べた。

第一章「月光」 19（後書き）

今日とあるCM見てたらペンギンが暑そうに扇風機かけてやがった。

今冬だぞ？夏のCM流すんじゃないよ。
恋しくなるだろが。

第一章「月光」 20（前書き）

俺は将来、

「ヘイ、ジャック！！買い物カゴで階段滑ろっぜ！！」
みたいなアメリカの馬鹿集団に入りたい。

「おつ、やつぱりな。」ジョンが視線を移すと、そこには破壊された店の自動ドアから出てくるマックスとボブの姿があった。

「ただいま。」

「遅い。」

するとジョンとマックスの間にロバートがずかずかと入った。「

おい、テメエ。せっかくの賭けが台無しじゃねえかよ、アホンダラ。

「ロバートは肩を落として言った。マックスの頭を軽くはたいた。

その時「ちよつと待てロバート。」とボブ。「お前さっき『賭け』
って言わなかったか？」褐色の額の眉間に皺が寄る。

「ああ。賭けてたよ。手前が戻ってくるかこないかで。」

「……ははは。絶対賭けにならんかっただろ。俺はボブ・コーヒー
様だぜ？」視線をジョンの方へ移した。

「俺は帰ってくる、に賭けてたよ。」そしてジョンは申し訳ない
という様な顔をして付け加えた。「賭けはマックスが行っちゃまった
から無しになった。だが、その前はきっちり成立したんだよ。」そ
う言ってミシエルを指さした。

「へっ、クソキザ野郎。」

「貴方もその呼び名ですか、黒達磨。」無論、黒達磨というのは
スキンヘッドのボブの事だった。

第一章「月光」 20（後書き）

暇潰しにこないだのチヨロQ粉微塵にしてみた。

第二章「腐食」 1（前書き）

僕っくんの説教コーナー2

男のステータスは惚れられた女の人数で決まるんじゃない、惚れられた男の人数で決まるんだと思う。

ホ。っていう意味じゃあない。

ヤクザの頭と下っ端の關係に近いものだ。

女から惚れられる奴は強い男。

男から惚れられる奴は強い漢。

頭は漢だ。男じゃない。

この感覚分かってくれるか？

真性の草食にはわからまい。

漢になろうぜ。

俺はどーだっついていーけど。（ホジホジ）

第二章「腐食」 1

それから4時間ほど歩いて、ボストンの都市部に出ると、その酷すぎる殺風景が一同を愕然とさせた。

立ち並ぶビルの窓ガラスの破片が幅の広い道路一体に容赦なく散りばめられている。

そして何故だろう、景色が歪んで見える。空気が淀んでいる。

「とんでもない所に来たもんだな……」ジョンの言う通りの街並み。かつての観光名所の陰を微塵も漂わせない崩壊ぶりだった。

2脚の鉄製ベンチがあった。4時間も歩き、足が疲れたので休憩を挟むことにした。

まずレイが座ると、パリパリとペンキが剥がれ落ち、尻に軽く付着した。が、皆気にせず横に座っていった。他に人間がいなくなってしまうたここでは人目を気にすることは全く無駄な行為であるからだ。ペンキが付着するなどどうでもいい。あとで払えば済む話だ。すると、マックスがポケットから非常食のクッキーの袋を出し、開けた。周囲にほのかに甘い香りが漂った。ミシエルが一日作ったものだった。

第二章「腐食」 1（後書き）

さあ、まずい。

今日買ったブラクラ6、7巻エロい。
妹に誤解されないようにしなくちゃ

第二章「腐食」 2（前書き）

今年のスローガン

不毛地帯

第二章「腐食」 2

「旨いなあ。」バターが利いたクッキーは甘かった。

ノーアイズが猛威を振るうこの世界の中で人間は本来は糞のような食材しか手に入れられず、それからできる糞のような食事しか食べられないのだが、ミシエルはその糞のような食材から旨い料理を作り出せる。

しかし1回、彼はノーアイズの屍肉を食材に使おうとし、「『死霊のはらわた』の次期主人公だな」とボブから罵られた。今でも根に持っているらしい。

「おー痛え…。」ロバートが靴を脱ぐと、足の裏に大きな血豆が出来ていた。これまででレジスタンスは数百キロを歩いてきた。ロバートに限らず、メンバー全員、血豆やらアザやらが足の裏に出来ている。

雪が止んだ。だが、辺りは一層の冷え込みを見せる。

「寒いか？」ジョンは震えるジャンスの背に毛布を羽織らせた。

するとジャンスは「ん…ありがと」ジョンに寄り添い、その腕を抱き寄せた。

しかしそれを見て、ジョン達の脇にいたボブは気分を悪くしたようだ。ぼそぼそ愚痴をこぼし始めた。「なんだってんだあの女、俺らに対しては虎なんのに、リーダーの横にくっついた途端、猫になりやがる。一体何の突然変異だ？それに…」

「聞こえてるぞ。」

第二章「腐食」 2（後書き）

今ようやく気が付いた。

人が、生きてきて必ず犯してしまう大きな過ち。

セーターの前後反対。

第二章「腐食」 3（前書き）

MURDER OF

書き始めました。

純粹な殴り合いの暴力小説です。

ただ、このEYESみたく頻繁な更新はありませんが、是非見て
ってください。

第二章「腐食」 3

「ああ、すまんすまん。」ボブが苦笑いで頭を掻く。
しかし、「聞こえてるってんだ、出て来いよ。」ジョンは尚も言
い続ける。

「俺、そんな悪いことしたか？」ボブは立ち上がった。よっぽど
悪く聞こえたんだな…

その瞬間、ボブの右腕を一発の弾丸がかすめた。

「つあつっ！！」そこから血が飛び散った。だが、幸いなことに
傷は浅かった。

「！！」一同は皆それに反応し、ベンチから飛び退いた。

それとほぼ同時にベンチの後方から銃弾の嵐が襲いかかってきた。
その嵐はすさまじく、すぐにベンチが蜂の巣になった。アスファル
ト、コンクリートがあちこちで火花を上げる。そんな中、一発の弾
丸が、前方の車両のエンジンを貫通した。途端、ロケットランチャ
ーを打ち込んだかのような衝撃と共に大きな爆発が起こった。

轟音の中、急いで車の陰に隠れる。すると、銃撃が止んだ。明ら
かに誰かがこちらを殺しに来た…

「お前ら何者だ！？姿を見せろ！！」ジョンが叫ぶ。

やがて返答が返ってきた。その声はベンチの真後ろの洋服店か
らだった。

「お宅ら…レジスタンスだろ…？」乾ききった、弱々しい声だっ
た。

第二章「腐食」 3（後書き）

今日、うちの学校に転校生がやってきました。
名前をケンシロウといいます。特技は人体マッサージです。
嘘です。

第二章「腐食」 4（前書き）

類人猿なめんな！

第二章「腐食」 4

「それがどうした!？」

「私達は今、とても空腹だな。」車の陰から除くと、老人が一人、店の割れたガラス窓から頭を出していた。私達、と言っていた…今は見えないが、他にも複数人いるに違いない…。「餓死した仲間の死体を喰っている様なのだ。口の中が苦いわい。」

「俺達に何の関係がある!？」コルトパイソンを抜いた。すると、老人は躊躇う素振りもなく言い放った。

「食料をくれ。」

誰が渡せるか。ジョンは叫んだ。「断る!」

その瞬間、老人の形相が一変した。「ならば、蜂の巣になってしまえ。」

老人はそう吠えたと、足元から何かを持ってきた。

BAR…!ふざけるな!

店内からも5、6人出てきた。再び、銃弾の嵐が襲いかかってきた。背にしている車から幾度もの激しい衝撃が伝わってきた。

俺達を殺して食料を奪い取る気だ…。

ジョンはコルトパイソンのシリンダーに1発、弾を詰めた。

そして、

「皆、あの乞食共に腹いっぱい喰わせろ。銃弾をな。」そう言つて頬肉を歪ませた。

第二章「腐食」 4（後書き）

今日転校したばかりのケンシロウ君と、学級委員のラオウ君が喧嘩してしまいました。

どうもケンシロウ君がラオウ君にした、北斗なんちゃっていうマッサージが痛すぎるとの事でした。

嘘です。

第二章「腐食」 5（前書き）

人は悟空の必殺技、かめはめ波を撃つことが可能である。

第二章「腐食」 5

「行くぞ。ロバート、戦陣を切ってくれ。」

「あいよ。」ロバートはだるそうに立ち上がると、ウージーを片手に車の陰からのそのそと出た。

対人戦は幾度となくやってきたが、あまり気分が良くなるものではない。

人間の場合、特に乞食はノーアイズより欲に対してしつこい。

しかも、意思して弾を避けようとする。

おまけに、気を許すと一瞬で裏切ってくる。

だから…

「命が惜しい奴はすつこんでろ！！」ロバートは叫んでウージーをオートで速射し始めた。

「うおおああ！！」対して、老人達は物陰に隠れた。

「奴は命が1つって事を知らないのか！？」

「命の使い方が粗末すぎる！」

銃声の合間合間にジョンの耳に老人達の叫び声が届いてきた。

老人達のBARの銃撃が止んだ。老人達は皆物陰に隠れ、ロバートの銃撃の終わりを待つ。まだウージーが五月蠅い乾いた音で唸り続ける。

その時、ウージーを腰だめにして撃つロバートが叫んだ。「おら、どうした乞食共！！命の算数タイムは終わりだぜ！！」

乞食がその言葉の意味を知ったのはその2秒後の事だった。

「アーメン。」潜む老人達の背後で少年の声が聞こえた。

第二章「腐食」 5（後書き）

さあ、みんな、かめはめ波を撃とう！

まず、振り込め詐欺に遭おう！

そして、両手で頭を抱えて叫ぶんだ！

「は〜め〜ら〜れ〜たあああ〜！！！！」

効果・近くにいた老婆が同情して100円くれるかもしれません。

第二章「腐食」 6（前書き）

なあ、輪ゴムってさあ、古くなったらすぐ切れるよな。
ならさあ、ルファイって何で体がちぎれねえの？

第二章「腐食」 6

老人達がとつさに後ろへ振り向くと、そこには全身蒼白の少年が手にタウルスを手に、立っていた。

レイだ。

次の瞬間、レイは驚愕している老人達にタウルスを容赦なく撃ち始めた。

バン。バン。バン。バン。

乾いた銃声が1つ響く度に、老人が1人ずつ血飛沫を上げながら倒れていく。

「う……うわあああ！」残った数人が、レイに弾幕を張りながら逃げ始めた。

「鼠みたい。」直後レイはそう吐いてトラックの陰に隠れた。その弾は当たらず、隠れた車体で跳弾を繰り返す。

老人達が逃げた先は彼らが出てきたブティックだった。息を切らして中に入っていく。

駄目だ、あいつら！

農らを殺す気じゃ！

戸惑いに目を見開いて老人達は叫んだ。

すると、銃撃によって割れた窓から、店内に緑の物体が入ってきた。

それはゴロゴロと木製の床を転がり、1人の老人の足元で止まった。

戦慄が走る。

その緑の物体の正体はグレネードだった。

「JESUS！」急いで投げ返す。

しかし、老人の手から離れた直後、それは起爆した。

第二章「腐食」 6（後書き）

ゴムゴムのガトリング〜！

ブチッ。

ピョ〜ン。

俺の腕があああ！！

第二章「腐食」 7（前書き）

ボク2さい。

嘘です3歳です。

嘘です。

第二章「腐食」 7

凄まじい爆発が起こった。その一瞬のうちに、稲妻のような閃光、何もかも吹き飛ばす爆風、唸る爆炎、猛る爆音、その全てが老人達を襲った。

爆風が容赦なく四肢を散切りまくり、爆炎が溢れ出た血液諸とも焼き尽くす。店内から外に向かって強烈な稲光と爆音が漏れる。

アッシュのグレネードは全て彼自身が手を加えているものだ。破壊力が異常なまでにおかしい。かつて、マフィアだったロバートからその能力を買われ、勧誘された事がある。

「すげえ花火だ。」

「どうもっス。」ロバートの歓声にアッシュは軽く礼をした。当時、彼はネットの情報を元に遊び半分でグレネードをいじっていたので、そんなことで裏社会に巻き込まれるのは御免だった。しかし、世界がパンデミックを起こし、その中で自分がこのようにして役に立つとは思ってもいなかっただろう。

冷たい風と共に煙が舞った。

爆発が起こった店内は、壁が抉られ、床に巨大な穴が開き、建物と呼ぶに値しないものと化していた。衣料品は全て灰となり、空気中を漂っている。

そんな中で眼球が一つ床を転がっていた。中に入ってそれを見つけたレイは躊躇なく足で踏み潰した。ノーアイズの餌になったらいけないからだ。

第二章「腐食」 7（後書き）

君たち、嘘ばっかついてると閻魔様に舌ひっこ抜かれるぞ！

悪い子はいねがぁー?!

俺です。

第二章「腐食」 8（前書き）

「落石注意」って

注意したら避けられるモノですか？

第二章「腐食」 8

長い夜が今、丁度半分を過ぎた。

同時に、ジョンがしていた腕時計がクリスマスの終わりを告げた。この上無く空虚なクリスマスだった。ジョンは唾を吐いた。

「あー。ただ今クリスマスが終わりました、とさ。」

こんなにもどうでもいいクリスマスは初めてだ。皆、ため息をつく。

「スクルージが羨ましいよ。」とレイ。彼にしては珍しいジョークだった。

が、笑えねえよ、とロバートに一蹴された。

冷たい雪は止んだまま降ってこない。歩道に植えられた枯れ木の根本に微かに積もっている。

しかし、身を震わせる寒さは健在だ。空気を吸い込む度に肺が冷や水を入れられたように冷たくなる。

すると、遠くで十数体のノーアイズが闇の中をさまよっているのが見えた。

遠くといつても100メートルだ。気付かれる距離だ。

しかし、その前には十字路があった。

静かに左か右どちらかに避けられたら問題はない。

第二章「腐食」 8（後書き）

俺ってさ、自転車漕ぐときは

「かもしれない運転」じゃなくて「死ぬかもしれない運転」でやってんの。

排水溝の金網で滑って死ぬかもしれない

道路何もないけど突然目にも止まらぬ音速トラックが突っ込んできて死ぬかもしれない

通り縫った野良犬にさんざ追い回されて喰い殺されるかもしれない

自転車は危ないですよ

第二章「腐食」 9（前書き）

僕っくんの説教コーナー 3

あしゝたはない♪

あしゝたはない♪

あしゝたはなゝいゝさゝ♪

つつつて自殺なんかするなよ。

つーか自殺するっちゅーのはこの糞歌独唱するのと同じだ
自殺つつてむっちゃ格好悪いぞ

日本人なら大和魂見せて格好良く死ねや

第二章「腐食」 9

「静かに。」ジョンは息を潜めるように口元で人差し指を立てた。ノーアイズは視力がない代わりに聴覚が発達している。だが、それほどといったものではなく、人間の1.3倍程度のものだという。皆口を閉ざすと、微かな不快音が耳に入ってきた。どうやら、今からやり過ごす予定の前の連中のものだけではない様だ。周囲を見渡すと、暗いビルの陰、窓からノーアイズ達の頭がちらちらと見えかくれしていた。

早く行つてしまわないとな…。

ジョンはcome on、と手を仰ぎ、音を極力立てない忍び足で、進み始めた。他もそれに追従する。

皮肉屋ボブも、この時だけは黙っていた。口を開けた途端に怪物デイナーショーだ。笑えないね。

何故かこの凍るように寒い中、脂ぎった汗が額から流れ出した。なぜだ？ジョンは思った。なぜこうも悪い予感しかない？

ただ、静かに歩くだけで。なのになぜ心臓がこんなにも跳ね上がっているんだ？

ノーアイズは未だこちらに気付いていない。順調に歩を進めている。

なのになぜ…

十字路まであと十数メートル…その時だった。

「う…う…ああ…くあ…！」突如レイが悶えだした。

第二章「腐食」 9（後書き）

今年の流行語大賞候補

「のび太さんのえっちい。」

第二章「腐食」 10（前書き）

2000ユニーク突破！

これからもよろしくお願いします。

同時進行中のMURDER OFも読んであげて。 かわいいそんなことになってるから。

「……！！」やばい！声ではれちまう！！

ジョンはとつさにレイを懷へ抱き寄せた。

しかし、遅かった。ノーアイズ達は一斉にこちらを振り向くと、ふらふらと走り寄って来た。

「ああ……あがぁ！はぁ！ああぁ！」それでも尚、レイは突然の痛みに震え続ける。動悸が激しくなる。

「おい！！大丈夫か！？おい！！」皆が必死に呼びかけるが、レイの耳には入ってない。喘ぎ苦しみ、小刻みに震える手でジョンのコートを驚掴んだ。レイの顔が苦悶に歪む。

すると突然「げえっ……があっ……げぼっ！」屈み込み、アスファルトの地面に大量の血反吐を撒き散らした。レイが撒き散らしたそれは黒かった。

再度吐く。レイの溢れ出た涙が反吐の中に混ざり込んだ。見るに耐えないものだった。レイの膝が暴れている。

ジョンはこんなところで来るとは思わなかった……レイをこの手で撃つ刻だ。

レイの掴んだ手が徐々に緩んでいく。

「ひい……ひいっ……ひい……！」喘ぎ声が断末魔に聞こえる。

残念だが……もう……終わりだ……。

ジョンは決心し、腰のホルダーからコルトパイソンを引き抜き、即座に悶えるレイの頭に狙いを定めた……。

「ああああああああ……！！！！」

第二章「腐食」 10（後書き）

某NHKというテレビ局の某みんなのうたという番組に私が作詞作曲した

「ぼく 病んじやった」が出来ます。
みんな見て下さいね。

って嘘だバーカ！！お前の母ちゃんケンシロウ！！

第二章「腐食」 11（前書き）

昨日サボってごめんち

ファンシーやってみました

ジョンが引き金を引こうとしたその時…！

突如、レイの腕がジョンのコルトパイソンを掴んだ。

「おい…！」ジョンは絶句した。

すると、俯いていたレイがゆっくりと顔を上げる。

唇の隙間から牙が覗いた。残っている片目の光が失せている。眼窪からの黒い涙が頬を伝う。

ノーアイズ…！

ジョンは再び引き金を引こうとしたが、レイが銃身を跳ね飛ばした。弾が空を切った。

間髪入れずにレイはジョンの右足に咬み付いた。

「ぐうっ！？」ジョンは呻いたが、コルトパイソンの銃口は既にレイの後頭部を捉えていた。

即座に発砲した。しかし、それを見たレイはとっさに飛び退いた。次の瞬間、弾丸は地面のアスファルトで跳弾し、火花を散らした。遅かった。レイが人間として死ねなかった。

バックステップしたレイが再びジョンに襲いかかる。

「おい、ジョン…！こっちやべえぞ…！」その時、ロバートは叫んだ。レイが呻きだしてから今までで、凄まじい数のノーアイズが、ジョン達のいる十字路の真ん中目指して前後左右、四方から迫っていたのだった。

そして、現在は目前の位置にまで達していた。

第二章「腐食」 11（後書き）

今日、転校生のケンシロウ君がラオウ君を水風船みたいに割りました。

明日、ケンシロウ君は刑務所に転校するらしいです。

やっぱり、人を北斗なんちゃでマッサージするのはいけないと思います。

第二章「腐食」 12（前書き）

PCが直りました。
執筆再開、お待たせ。

「リーダー！！」ミシエルは叫んだ。

「何だ！？」「ジョンはレイが飛びかかってきたのを皮一枚で避けた。反撃に打って出るが、やはり弾は当たらない。

「このままでは皆死んでしまいます！！あの建物に退避を！！」ミシエルは後方を指さした。十字路の角に廃墟と化した百貨店が佇んでいた。

「ふざけるな！レイはどうしろって言うんだ！！」

「諦めて下さい。」冷静な声で即座に切り返した。「1人の助かる見込みのない子供に7人が犬死にしてどうするのですか！！」攻撃をかわされたレイが再び体勢に入った。鼻息を荒げ、牙を向く。まるで動物だ。

ウージーの断続的な銃声が空を裂く。1000を越えるかというノーマイズと、たった数人のレジスタンスとの攻防が始まった。腐敗臭と硝煙の匂いが充満する。が、一方的に押され出す。数が圧倒的に違う。

このままでは一分も待たずに軍勢に囲まれ、退路を絶たれてしまう…。それはレジスタンスのDEAD ENDを意味する…。自分たちには囲みを突破する程の武器はない。

その時、「きゃああああ！！」甲高い悲鳴と共に、押し寄せるノーマイズにジャニスが押し倒された。

第二章「腐食」 12（後書き）

着信アリfinalの堀北が夜神月に見えた件について。

第二章「腐食」 13（前書き）

オレ以外全員インフルになっちまえ！！

「ジャニス！！」ジョンは叫んだ。と同時に倒れたジャニスにボブの援護射撃が加わった。

「畜生！！ピラミッドの上にいた3体のプレデターの気持ちが今なら分かるぜ！」ボブはそのまま打ち続けた。見れば右腕に大きな裂傷ができている。

「我々が壊滅するのも時間の問題です！！さあ、命令を！！」ミシエルは必死の形相で葛藤するジョンに、さらに催促をかける。

畜生……！レイはどうする……？！俺は見捨てなければいけないのか……？

糞っ垂れ……！！

「皆……！」ジョンは再び叫んだ。「逃げるんだ……！退却だ……！」それに連られ、ボブも吠えた。「ヘイ、待ち遠しかった退却命令だ……！」

皆それを聞くや否や、指図せずとも百貨店目指して一目散に走り出した。

ロバートが満身創夷のアッシュを背負って、ボブは血液が滴る右腕をだらりとぶら下げて、ジャニスは切り裂かれた横腹を懸命に押さえて、逃げ出した。

惨めな敗走だった。

その時ジョンが振り向きざまに見たものは

ノーアイズに飲み込まれていくレイの姿だった……。

そしてそれは、担がれたアッシュが煙幕弾を放ったきり見えなくなってしまうた。

第二章「腐食」 13（後書き）

その後のレイ

ノーアイズA「おっ新入りか、俺はノーアイズっていうんだ、よろしくな！」

ノーアイズB「やあ、新入り君。僕の名前はノーアイズだ。よろしく。」

レイ「初めまして先輩方。僕の名前はノーアイズと申します。よろしく。」

嘘だ！！（包丁乱舞）

第三章「廃屋」 1（前書き）

蛇豆様の英語教室

Who is he?

ワホ イズ ヘ

意味 今誰かオナラしたろ？

Does he go to Tokyo?

ドエス ヘ ゴー トウー トキオ

意味 ドSなオナラはTOKIOのどこまで飛んでくんだろ？

第三章「廃屋」 1

「ふざけんなよ…ジョン・ターウィルガー…!!」

一階フロアの床は埃だらけだった。そこに一滴一滴、ポタリポタリとアツシユの血液が滴る。

まだ日の光が差し込まない百貨店の中は不気味な闇がうずくまっていた。割れた電球を携えてぶら下がるシャンデリアの様子はまるでホーンテッド・マンシヨンだ。

煙幕弾で撒いたノーアイズの大群は店の外をさまよっている。中に入ってくるノーアイズもいたが、恐らくこちらには来ないだろう。ジョン達は一階の最深部のシューズショップに逃げ込んでいた。

ジョン達のすぐ隣にはこの店員の死体が壁にもたれ鎮座していた。自殺だろうその死体の側には血糊がこびり付いたワルサーが転がっていた。

そしてそこで、ロバートはジョンの胸倉を掴み、怒号を飛ばす。

「畜生、見ろ！アツシユを！」床に横たわるアツシユは滝のような汗を流し、必死に腹の痛みに耐えていた。酷い裂傷だった。次から次へと止めどなくドス黒い血が溢れ出す。まるで鉄鋼弾を食らったアフガンの敗残兵だ。

ロバートの掴む拳の力が強くなった。

第三章「廃屋」 1（後書き）

マイケル・ジャクソンは三面怪獣ダダの最終形態

第三章「廃屋」 2（前書き）

クラスのヲタウィルスがあああああゝ！！
エロ本読んでる暇あったら俺の小説を読みな！
最適の離乳食だ。

第三章「廃屋」 2

「手前エいつまでイエス様気取りなんだよ……!!」ロバートは怒り狂う。「前のリカルドの時もそうだった!!撤退が遅れて餌食になっちまったじゃねえか!!」リカルド。2日前、ノーアイズになっってしまった男だ。いいムードメーカーだった。

「糞が!!」ロバートはジョンを壁に叩き付けた。「仲間を見捨てないとかほざいてたが、お前が一人を救っている間は俺達を見捨ててんだよ!!」

ジョンは俯いて口を閉ざしていた。

「この偽善者が!!!!」ロバートは止めにそう吐き捨てて、もう嫌だ、と呟いた。

「もうお前についていくのは懲りごりだ。俺はこれからミシエルについていく。」

決裂。

ロバートが遠くに座ったミシエルの方に近づくと、マックス、アツシュが後を行った。

「ミシエルならお前とは違っていつも冷静にやってくれる。」

「ジョン…すみませんね」ミシエルの最後の言葉が静かに響き、徐々に余韻を残していった。

第三章「廃屋」 2（後書き）

世も末だぜ！！何年か前、ニユース見てたら外国人の観光客がア

ニ・イトの美少女フィギュアを持って

「なめてるだけで最高なんだ！！」

とか言ってたぞ。

オエッ。

第三章「廃屋」 3（前書き）

落雷注意報とかってもうどうやって注意したらいいんだよ！
注意したら避けられるのか？！

第三章「廃屋」 3

そのままロバート達は、ミシエルと一緒に去っていった。お前の元じゃ命がいくつあっても足らねえ、という捨て言葉を残して。

結局ジョンの元に残ったのは、ジャニスとボブだけだった。辺りが急に静まり返ったような気がした。

午前2時半。

ジョンは俯いて苦悩に顔を歪ませた。仲間を失ったということと仲間が死んだということは彼の中では同義のものだった。

すると「あんたは何も悪いことしてないよ……！」ジャニスは涙声でジョンを強く抱きしめた。

ジャニスの腹の裂傷がジョンのコートにこすれるが、彼女はそれでも尚、抱き締め続けた。

幾ばくか時が経った。

やはり、4人は戻ってこない。だが、それはもう承知の事だ。ジョンは立ち上がった。

「とりあえずここを出よう……」後悔と悲しみは消えない。進む3人の足取りはまるで葬儀だ。

第三章「廃屋」 3（後書き）

俺の妹くゴリラ

俺の妹〓ゴキブリ

俺の妹×2〓世界滅亡

明日テストにでるぞ〜

第三章「廃屋」 4（前書き）

あしたのジョー

アニメ化おめでとう!!

第三章「廃屋」 4

「せいせいしたぜ。あの鬼畜め。」ロバートは呟いた。
ロバート、マックス、アッシュはミシエルに率いられ、暗闇の百貨店内を固まって歩く。

全身傷だらけのアッシュはマックスに肩を貸してもらい、一歩一歩ゆっくりと歩を進めていた。

ミシエルは首を回した。ゴキンと骨の音がした。「まあ、私にまとめ役が務まるかどうかわかりませんが、あの感情屋よりは上手くやりますよ。」

「頼りにしてるぜ。クソキザさん。」

「だからそれで呼ぶのは止めて頂けますか？」

「なあなあミシエラン。」マックスが突然割り込んだ。

が、「貴方もです。私の名はミシエルです。」マックスがミシエルを呼ぶときはいつもこうだ。どうやら、ミシエルには自分の名称が他人に弄ばれる事が多いらしい。

「…で、何です？」

「アッシュがこれだし…ここらで一旦休憩しない？」見ると、アッシュの血はいつの間にか止まっていた。が大量の血液を失ったせいでか、かなり疲れているように見えた。

第三章「廃屋」 4（後書き）

あつ、次映画になるんだっけ。ジョー。

第三章「廃屋」 5（前書き）

僕っ君の説教コーナー 4

ミシェラン星3つの店のメニューにある料理、全部日・カップ
ーメン。

それが今の日本の現状であり、全てだと思う。

第三章「廃屋」 5

「だ…大丈夫っスよ…。」そう言うが、憔悴しきっていた。顔に覇氣がない。声も弱々しかった。

ーアッシュは、あの先程の戦いで、ジャニスと同じようにノーアイズによって押し倒されたのだ。

しかし、彼の場合状況が全く違った。自分勝手な行動が災いし、群れの真ん中、孤立無援の中で戦ってしまったのだ。

そしてすぐに押し倒された。しかし、彼には押し倒されて抵抗する術がなかった。なぜなら彼の武器はグレネードだったからだ。アッシュには押し倒されたその時でもグレネードを投げられる腕があったが、その腕は地面に押しつけられてしまっていた。

それから、アッシュは体の自由が何一つ利かない状態で、攻撃を受け続けた。それはまるで何人もの強姦魔から集中的に陵辱を受けているかのような様だった。壮絶なリンチだった。

まず、横っ腹に歯を立てられ、そのまま喰い千切られた。

「おおああああ！！」身のよじれるような痛みに絶叫した。

それを皮切りに、アッシュに覆い被さってきたノーアイズ達が、紫の舌から黒い唾液を滴らせて次々と爪を立ててきた。

必死にもがくが、押さえ込まれた両腕が振り解けない。

第三章「廃屋」 5（後書き）

この小説の愛読者で、小説本文より前書き後書きを見にリピートしてる人が多いのではないかと危惧してしまっ今日この頃。

第三章「廃屋」 6

そして、ノーアイズがアッシュの目玉に喰い掛かろうとしたその時。

「おおあああああああー！」ロバートが叫び狂いながら助けに入った。ウージーを連射し、そのシリンドーが尽きるまで撃ち続けた。アッシュの上に積み重なったノーアイズが吹っ飛ばされていき、最後の一体は頭を撃ち砕かれた。

するとアッシュが死体の山から自力で這って出てきた。傷だらけの腕を伸ばし、悲痛な叫び声を上げて。その姿はまるでノーアイズのようにだった。

「畜生！！Fuck！！諦めんなよ、馬鹿野郎！！」ロバートは這いずるアッシュに走り寄ると、彼を強引に背負った。

しかし、すでに一面は四面楚歌の地獄絵図と化していた。四方八方、振り返れども振り返れども、ノーアイズ、ノーアイズ。

「Shit！何やってんだ、ウチのボンクラリーダーは…?!」

語尾に自然と含み笑いが出てきた。

もうおしまいだ。

DEAD END .

第三章「廃屋」 6（後書き）

クリスマスまであと約300日!!
メリークリスマス!!
もういくつ寝るとお正月? ?

第三章「廃屋」 7（前書き）

これで丁度50話目。
いろいろあつたねえ。
しゃぶしゃぶ喰つたり、指にマメが出来たり、
ラジバンダリ（死語）

第三章「廃屋」 7

ノーアイズの円陣が狭まっていく。足が竦んで動けない。

全ては奴のせいだ！リーダー！いや、ジョン・ターウィルガー！！

突如ロバートの脳裏に、特急列車のような言葉の走馬燈がぶち込まれ始めた。

貴様の命令欠如のおかげで俺達は死ぬ！！俺らをポーンみたく扱いやがって！！捨て駒か！！そーいや俺ばかり前衛に駆り出されたな！！カミカゼか、俺は？！面白くねえ！！野郎ぶつ殺す！！糞つたれの大馬鹿野郎！！死んじまえ！！喰われ死ね！！

あの世で呪ってやる！！畜生！！

すると、ロバートのすぐ後ろで声がした。「ははははははさつき諦めんなっていったのはどこの誰っスか？」微かに笑った、ロバートが背負ったアッシュの声だった。

「喋るな馬鹿！！」

「ははん、嫌っスよ！！」アッシュが叫んだその時、遠くからジョンの叫び声が聞こえた。撤退命令だ。

「さあ、ヘルズゲートの門限はあと少しっスよ！！突っ切りましよう！！」

すると、ロバートは突然大笑いをした。豪快な笑い声だった。「俺はロマンテか！！面白えぜ！！夢想家野郎ウ！！」

第三章「廃屋」 7（後書き）

えーとね、これね、終わる気配が全くしないの。これで文庫本で30ページ位のものなの。

一体いくつ書いたら…

わひゃひゃひゃry

第三章「廃屋」 8（前書き）

自分が乗って横転させたバイクに殺されるってどうよ？！

b
y

グラセフ

第三章「廃屋」 8

「―これが、アッシュの傷だった。息絶え絶えになって、ミシエルを見つめる。」

「…分かりました。休みを取りましようか。」すると、ミシエルは近くに衣料品コーナーを見つけた。

「…ありがとうございます」アッシュは礼を言うと、衣料品コーナーの中に入っていくミシエルの後を追いかけた。

先程から衣料品コーナーとうたってはいるが、まともな衣料品は見渡す限りでは皆無だった。商品のザマは皆、千切れているか得体の知れない液体に侵されているかだった。さらに、床に散乱しているセーターは糸屑同然のゴミと言える程にズタズタにされていた。

「あつ、あれ…見て」マックスが何か見つけたようだった。指をコンクリートむき出しの柱に向けて震わせている。3人はその先を注視した。

「な…何だありやあ…!?」その瞬間、ロバートが絶句した。その光景にはミシエルまでもが驚きを隠せなかった。

その光景とは、1体のノーアイズの惨殺死体だった。柱の根本に横たわっていたその死体には大きな致命傷跡が残っていた。

だが、ただの惨殺死体ならマックスは無視して通り過ぎていたに違いなかった。

第三章「廃屋」 8（後書き）

俺のハイテンションモードトリガー

・カラオケでシャウトする ・友達と今日見た夢の話をする

・ロンドンという単語 ・美術の時間

・エロい夢見た時 ・カキピーむさぼる時

I・m a 悲しい人間

第三章「廃屋」 9（前書き）

前書き書いてたら才チたあゝ！！

その死体の致命傷：それは手跡だった。銃弾の鋤道でもなく、ナイフのレールでもない、ましてやグレネードのザク口でもなかった。ただの手の跡だった。

しかし、絞殺とは言い難かった。なぜなら、手形が巨大過ぎたからだ。死体の体全体を包み込むようにして食い込んだ手形…。死体が粘土のように見えた。これは圧殺だ。

見ると四肢が全てあさつての方向に折れ曲がっていて、ところどころがペーストの様な、凄惨なひしゃげ方をしていた。腹部からはアバラが皮膚を貫いて、そこからは腐った内蔵片が滲み出していた。何かいる。この店には巨大な何かが潜んでいる。

そんな予感が4人の脳裏によぎった。

突然、店内の闇がとても恐ろしく見えた。

引きずり込まれる…。

身震いをした。突如、闇の中から巨大な魔の手が出現し、この死体の様に圧殺されるのではないか。

先の見えない暗闇は、懐中電灯の光が殆ど届かない程強力だった。4人居るのにも関わらず、どうしようもない様な孤独感が彼らを襲った。

そして心臓の鼓動さえ聞こえそうな静寂の中、4人は再び歩き始めた。

第三章「廃屋」 9（後書き）

あのね、本文より前後書きの方が苦勞するのだ

第三章「廃屋」 10（前書き）

すみません↓済みません

ごちそうさま↓御馳走様

ありがとう↓蟻が十

べろべろばー↓べろべろ婆

いないいないばーべろべろばー↓居ない居ない婆べろべろ婆
近くのバーで飲んでる。婆だけに。

早くここから、この建物から抜け出したい。その思いが4人の足を早めた。

ミシエルもマックスもロバートも、さらには本人のアッシュも、休憩の事はとうの昔に忘れていた。

店と店との通路をひたすら歩いた。正面出口からは出られない。再びノーアイズ・パレードになる。他の出口を探すしかなかった。地図はどこだ。

4人はまず、地図を探すことにした。どこにあるかわからない出口も場所がわかればすぐに行き着ける。それに加えてどこにどう出るかというのを知っておかなければいけない。

そして、出口を探すより地図を探す方が容易だ。少し視線を高くすれば必ず見つけられるエスカレータに行けば見つけられるのだから。

4人は予想通り、すぐにエスカレータを発見した。案外近くにあった。その元へと急いだ。

ものの数十秒で行き着いた。しかし、肝心の地図は、なかった。いや、正確にはなくなっていた。その証拠に、エスカレータの柱に地図を貼る枠があった。ノーアイズか気狂いが枠から抜き取ったのだろう。

「どうすんだ糞！！無えじゃねえか糞！！」ロバートは拳を枠に思い切り叩き付けた。

第三章「廃屋」 10（後書き）

俺は3歳位の頃、

コレ飛び降りたら絶対怪我すると思いつながらも、

高さ15センチの花壇の上からジャンピングして大怪我した事がある。

第三章「廃屋」 11（前書き）

僕っくんの話を聞いてくれのコーナー 1

今晚ね、マクドナルドの近くを通り過ぎたわけなんすけど、
そこで自転車^が並列運転してたんですよ

横20列で。

うおおおおおお！！？何じゃありやあああ！！？

目を疑いながらもそいつを見てたところ全部そこに駐車してた車
のハザードランプでしたとさ

「こんままじゃさっきの連中に喰われちゃうぞ!!」ロバートは更に檄を入れる。額の真ん中で血管が脈を打っている。「これからどうすんだ!? 地獄のモーターをブギーマンにさんざ追われんのか!? 冗談も……」

「貴方馬鹿ですか。」ミシエルは檄を途中で断ち切った。「1階に無ければ2階に行けばいいじゃないですか。」その口調はまるでマリー・アントワネットを模しているかの様だった。

「ああ、成るほど」とマックスが相づちを打つ。「チミが馬鹿なのが良く解りました」

すると、この小僧、と言うにも言えなくなってしまったロバートは、一旦雲脂が溜まった頭を掻きむしってから「そうかい。」と素っ気なく答えた（彼にとつて珍しい讓歩行為だった）。

そしてミシエルは首の骨を2回左右に鳴らした後、「さて、行きましょうか」と言いながら、止まってしまい、ただの階段と変わらなくなってしまったエスカレータの段を一つ踏みしめた。

段を次々に登っていくミシエルを追っかけて3人も行く。

段の途中で1階のフロア全体を見渡せるようになっていた。

やはり、店内にもノーアイズ達是不気味に身を震わせて蠢いていた。これが蠢く様は2ヶ月経った今でも慣れることはない。

第三章「廃屋」 11（後書き）

エクソシストをTSUTAYAで借りてみました。
ドキドキ。ワクワク。バクバク。
シヨック死。

第三章「廃屋」 12（前書き）

あー学年末テストだわ。
どーでもい ノシ
更新続けますね

よく見ると、段の滑り止めの隙間に、小さな肉片が幾つもこびり付いていた。そのせいで、足元に少しぬめりがあった。だが、4人の内、誰もこの原因を考えようとはしなかった。

カツリ、カツリと物悲しい音を立てながら登っていくと、やがてエスカレータの半分の所に至った。

すると突然、強烈な唸り声が1階の方から聞こえてきた。それは明らかに人間のものとは思えない、狂った叫び声だった。ノーアイズだ。

数匹のノーアイズが、割れ響くような奇声を発しながら、1階からエスカレータに走り寄ってきた。

「野郎、登ってくるつもりか……!?」すぐさまロバートがウーザーの照準をそれに定めた。「ぶっ殺してやる……!」

しかし、「落ち着いて下さい」ミシェルが制止に入った。

「何だよ……!登って来ちまうだろうが……!」

「まず登るのが先です。貴方も的が1方向にまとまった方が撃ち易いでしょう?」

するとロバートは一呼吸置いてから、ああわかったよ、とミシエルの得意顔が少し気に入らなかったが、そう言った。「エスコート頼むぜ、キザ……!」

「糞が無くなりましたか、良かったです……!」ミシェルはそう叫んで、2階目指して突っ走り始めた。

だが、甘かった。

第三章「廃屋」 12（後書き）

この世の全てを諦めてしまった男、蛇豆

第三章「廃屋」 13（前書き）

昨日書店で、幼児向け英語教育本の「apple」と「banana」の音声ボタンを大股開きで連打している少女を見かけた。

apple banana apple banana apple banana…！！

！

4人は前を、1階の方を注視し過ぎた。ミシエルが振り向くまで後ろの惨事に誰も気付かなかったのだ。

ミシエルが段を登ろうとした時には既に彼の目の前でノーアイズが唾液にまみれた牙を向けて襲いかかっていた。

「……！！」ミシエルはノーアイズの不意な出現にたじろぎながらも、すぐさま腰からベレッタを抜いた。

次の瞬間、眼前で黒い花火が舞い散った。そのドローテクニクはジョンよりも数段上だった。腰からベレッタを抜くと、即座にその腰の位置で標的に銃口を向け、撃つ。その直後、ノーアイズの額に肉の鉦道が開けた。まず、銃弾は柔らかい皮膚を突き破り、皮下脂肪の中を血管を引き千切りながら掘り下げていく。そしてそれは頭蓋骨に収まっている脳髓を掻き乱し、そのまま頭部を貫通した。

ノーアイズの体は脊椎反射で一瞬引きつった様な動きを見せるとエスカレータの手すりから身を踊らせた。

しかし、まだ終わってはいなかった。身を踊らせたノーアイズの後には数匹のノーアイズ達がこちらへ押し寄せていた。そのノーアイズ達は暗闇の中、不気味に体をくねらせて（関節がまるで無いような動きだった）、黒い血の涙を眼窪から垂れ流していた。腐臭が立ちこめた。

第三章「廃屋」 13（後書き）

世のバレンタイン不毛諸君、俺の懐へダイブしろ！
全てを諦めた俺が慰めてやる！

第三章「廃屋」 14（前書き）

友が毎日、俺に自作宗教の洗脳メールを送ってくる。
やめてくれ。

「済みません。貴方がた、出来るだけ早く下を片づけて下さいね。」

「一体どうしたんだよ、キザ!？」ロバートは一旦はそう切り返したが、その直後、ふと振り向いて背後の状況を確認することになった。このままではエスカレータの真ん中で挟み撃ちだ。「頑張れよ、俺はクリーチャーバーガーになんぞなりたくねえぞ。」

そしてロバートは改めてウージーを片手に取って構えた。「行くぞマックス。腐ったパンズに穴を開けてやれ。」

「了解!」マックスはアッシュの体をロバートの方に預けると、ベルトから2挺のグロックを抜いた。不格好にペイントされた赤のボディが一瞬、懐中電灯の光で照った。

「アッシュ、ライト頼むね。」

「了解っス」アッシュがそう答えたと同時に、マックスは2挺のグロックを手に、突然エスカレータを一気に飛び降りた。

15段はあったが、何の物怖じもせず、飛んだ。中に浮かんだマックスの姿は、瞬く間に放物線を描いて1階のフロアへ落下していた。

第三章「廃屋」 14（後書き）

ラーメン、つけ麺、俺イエメン
はーいOK？

死語。

第三章「廃屋」 15（前書き）

はい、またオチた〜

マックスが一階の床に前転し、受け身を取って着地した。途端、床に溜まった埃が粉塵の様に舞い散った。ロバートが援護射撃の体勢に入った。

着地したマックスをノーアイズ達が、挟むようにして襲いかかった。しかし、マックスは前転して立ち上がると、すかさずその左右のノーアイズに向けて、2挺のベレッタを乱射し始めた。小刻みに響く発砲音の度、的になったノーアイズが不細工なダンスを見せた。足、胴、頭、と次々と筋肉やら内蔵やら脳味噌やらの体の内容物を床に撒き散らしながら事切れていく。

「やるじゃあないか、ええ!？」するとロバートもエスカレータの上から参戦してきた。ウージーの銃身からの轟音がノーアイズを処構わず斬り裂いた。怪物の四肢や頭部が胴から切り離されていく。アッシュのライトが死屍累々の世界が築き上げられていく様を照らし出していった。ノーアイズにとっては地獄絵図の様だった。狙いを正確につけない2人の弾丸は転がった死体にさえも鞭を打ち、何もかもを抉り取られ、蜂の巣にされたノーアイズなんかは、まるで爆殺でもされたかの様に床に黒い体液のシミだけを残して、一切合切を吹き飛ばされ跡形も無く消されていた。

第三章「廃屋」 15（後書き）

明日テストだ。

…。

はあ…

第三章「廃屋」 16（前書き）

諸君達へのミッション

明日、世界一になれ。

一日に「赤坂サカス」と一番多く唱えた人間になれ。

明日、君は世界一になるんだ。素晴らしい偉業だ。

「もうちょつとで席が空くぜ、キザ！」撃ちながら、ロバートは言う。ウージーを持つ、太い腕は全く反動によるブレを見せない。

「ああ、そうですか。」ロバートの背後で答える、ミシエル。その口調はいつもの事にしても、妙に冷静だった。「遅いですね」

すると、けたたましい銃声と共に、ロバートの背後からベレッタの弾幕が張られた。その弾は全て寸分狂わず1階のノーアイズ達の額にぶち込まれていった。銃器と怪物の絶叫パレードが始まった。銃声が断末魔を、断末魔が銃声を互いに揉み消し合う。リオ・デ・ジャネイロも驚く程の盛り上がり様だ。花火も上がった。硝煙と血の花火だ。腐敗臭の醜悪な臭いと硝煙の突き刺す様な臭いが絡まった、史上最悪の芳香が立ちこめていく。

ウージーの歓声が上がった。祭りはさらに過激になっていく。4人以外、もう誰もまともに立ってはいられなかった。まるでブルド―ザーに薙ぎ倒されるかのように、ノーアイズは次々とそれぞれの内蔵をさらけ出して倒れていった。その手の精肉屋は大喜びだ。未曾有と言えるほどの大量の肉塊が血溜まりの中に陳列されているのだから。

第三章「廃屋」 16（後書き）

なあ、最近子供の名前で変なの多いじゃない

あれってさ、じいちゃんばあちゃんになった時どうすんだろね

「やあ、レオさんや。ええお天気やのう」

「おう、テンシさんよ。今日は畑で大根が採れたわい」

わお、名前だけ若々しくて浮く。

その内マリオさんとか生まれてくるかもしれない。

第三章「廃屋」 17（前書き）

キモいつてさ

気持ち悪いの略？

気持ち良いの略？

「Great」雷のような銃声が鳴り止むと、代わりに手を叩く音が響いた。ミシエルの拍手の音だった。彼の眼下には、粘り気のある血糊のまどろみの中ではたつく、下半身を失った、一体のノーアイズがいた。この血の海の中で動くものといえば、もうこれしかいなかった。ぎゃあぎゃああと赤ん坊のように呻き声を上げながら、細く青白い二本の腕を意味もなく振り回していた。

「もうこいつで最後だ。さつさと終わりにするぞ」ロバートがそれに銃口を向けた。「俺も早く休憩したいんだよな、腹も空いてきたし」

すると突然、ミシエルは思いついたような素振りを見せてから、足元で蠢くその頭部を思い切り踏みつけた。靴底からその頭蓋骨が割れる感触が伝わった。

「おい、何やってんだ？」ロバートが聞くも、ミシエルは何も答えなかった。

ミシエルは次に踏みつけた足をそのままにしてノーアイズの動きを封じ、そいつの千切れた断面に手をつ込んだ。その瞬間、ノーアイズの体が一瞬、びくんと痙攣を起こした。

するとミシエルは突っ込んだ手でその腑の中を掻き回し始めた。

第三章「廃屋」 17（後書き）

日本人辞めたい

第三章「廃屋」 18（前書き）

豆知識

俺とカラオケ行った奴のリアクションは60%以上が「引く」

すると、ノーアイズが自らの鼓膜を裂くかと思う勢いで喚き立てた。体内に腕が入ってくる。絶叫必至の激痛が体全体を駆け巡った。この痛みに耐えようと、歪に変形した長い爪で床を引っ掻き回した。しかし、その爪はすぐに剥がれ落ちた。爪と爪との間の肉が一瞬間間見えた途端、ベリリ、と嫌な音を立てて爪が根こそぎ取れたのだ。その露出した肉から、大粒の血液が溢れだした。指からこぼれたドス黒い血が床に水玉模様を描く。

ミシエルはその時、腸を掴んでいた。握力で圧迫する度にノーアイズが喘ぎまくるのだった。面白い玩具だ。

次の瞬間、ミシエルは渾身の力を入れて掴んでいたそれを一気に引き抜いた。半分しかないノーアイズの体が反り返った。腸が腎臓やら肝臓やらと一緒に体内から体外へひっこ抜かれた。そこから大量の血と腐臭が勢い良く噴き出した。ノーアイズは一度大絶叫し、爪の剥がれた手を意味なく左右に何度か揺らした後、事切れた。引き出されていく腸はまるで消火ホースのようだった。細く長い筒の先端から出てくるのだ。垂れた糞便が。ノーアイズはもう指先をピクリとも動かしていない。

しかしミシエルはそれでも尚、革袋を作るかのように死体から内蔵を引きずり出す

第三章「廃屋」 18（後書き）

最近の曲は知らん！
パンクばっか聞いている。

第三章「廃屋」 19（前書き）

あなたの未来を占ってあげましょう。

…。

あなたはいつか…死ぬ！

「おい、キザ！？」ロバートの制止も効かない。ミシエルはただ黙々と死体から内臓を抜き取っては自分の横に陳列し続ける。ミシエルのコートは血の洗濯機で洗ったみたいに返り血でずぶ濡れになっており、体内に突っ込ませていた腕の見た目はそこらに転がっている肉塊と大差なかった。

彼は狂ってしまったのか。

いや、違う。

彼は狂ってなんかいない。

マックスは閃いた。

「ミシエル。」案の定、返事は来なかったが、マックスは続けた。「お腹空いてるけどミートスパゲッティは要らないよ。」

すると、ミシエルは手を止めた。と同時にマックスの方に振り返った。

「バレましたか。」残念そうにミシエルは呟いた。「まあ冗談でやりましたが。」

「おい、クソキザ。」とロバート。「これが冗談のつもりか？」

「ボブ曰くアメリカンジョークですが。」

「これのどこがジョークなんだ馬鹿。お前ネジがどっかにトんでんじゃないか？お前のはアメリカンジョークじゃなくてエイリアンジョークだ。」

すると、マックスに肩を借りている瀕死のアッシュが吹き出した。そして声高らかに笑った。

アッシュの笑顔を見るのはこれで最後となった。

第三章「廃屋」 19（後書き）

そんなに疑うのならあなたの過去も暴いてみせましょう。

…。

あなたは過去に風邪を引いたことがある！

当たってるだろ…怖いだろ…ケケケ

第三章「廃屋」 20（前書き）

近所の暴走族がヤバいくらいウザい。
夜な夜なブーンブーンシャカブブンブーン。
参ります。

「さて、ここらで休憩としますか。」ミシエルがそう言つて座つたのは、2階のエスカレータ近くのベンチだった。しかしもちろん、そのベンチにも埃が被つていたので、多少潔癖のあるミシエルは座る前にそれを念入りに払い除けた。

目当ての物は見つかった。地図だ。2階の方にはあるべき場所にちゃんとあつたのだ。今思えば一階の件はとんだ不運だった。

地図によると、この建物は12階までであるらしく、夜の屋上からはボストンの摩天楼が堪能できると書いていた（それは遠い昔話で現在は四六時中灰暗い地獄しか見られなくなつたのだろう。そして今はそんなことはどうでもいい）。

1階には合計3つの出入口があつた。が同時に、極力これらを避けなければならぬ事が明白となつた。なんと、それら3つの出入口、違う方角にあるにも関わらず全てがレイが死んだ死の街道の近くに位置していたのだ。

外に出た途端に、中断したパレードの続きを押しつけられるのは本当に洒落にならない。

第三章「廃屋」 20（後書き）

呪いの呪文伝授

知りたい方は下記のURLで検索

[http://usoda@baka.o-ma-enokacha
n.huriza.co.jp](http://usoda@baka.o-ma-enokacha
n.huriza.co.jp)

お前マジで検索すんなよ

第三章「廃屋」 21（前書き）

テストでの俺のモットー
「ありのままの自分」

だが、もうひとつ経路があった。地下駐車場だ。

出口入り口合計して2つあり、その内1つの方角が死の街道と真逆だった。

「決まりですね」ミシェルは呟いた。地下一階駐車場北出口。だがそこまで降りるのには目の前のエスカレータを降りていくだけでは駄目だった。このエスカレータ、下は一階までしか通じてなかったのだ。

ここからの最短ルートはまずこのエスカレータで1階まで降りてから30メートル程離れたところにある階段で地下1階まで降りる。だがこれが通常の世界だったら、例えば祝日の人混みの中で満員電車のようにもがいていたとしても、この30メートルはそう遠くないと感じるだろう。だが、この非現実な世界では例えば30メートルという距離でも敏感に危険を感知できるように神経をとき済まさないといけない。

油断が即、人を殺す。

しかし、ミシェルの中では、いや、レジスタンスの中ではもはやノーアイズが闊歩するこの世界はもう「通常の世界」だ。前に述べたこともそうなのだ。2ヶ月経つとノーアイズそれ自体に対して全く恐怖を抱かなくなってしまうのだ。家の隣人がノーアイズでも平気でいられるだろう。

ならば、ここで言う「非現実」とは何か…？

第三章「廃屋」 21（後書き）

ジョン・タワーウィルガー CV のはらひろし

ロバート・エッジコム CV 鷹村 守

声優の名前全くわかんねえ

第三章「廃屋」 22（前書き）

ヘルズエクスプレス超特急列車の車窓から
僕は今この小説を書いている。

テストだ。

学年末テスト。

次の駅は「レッドポイント」です。

それは何か。

1階の衣類コーナーのノーアイズ。奴を圧殺したアレだ。得体の知れない怪物。どんな体躯か、どんな生態なのか、そしてそれはどんな恐怖なのか。未だ誰も知らない。

次の瞬間、闇の中からそいつの巨大な手が伸びてくるかもしれない。エスカレータを降りていく途中で急に姿を現すかもしれない。

「まるで巨大なプレデターに追われてるみてえだな……」

ロバートの言い分が的のど真ん中を射た。

神出鬼没の巨大な闇の殺戮者……。

「さあ、そろそろ行きましょうか。」ミシエルは立ち上がった。しかし、そんな言葉とは裏腹にミシエルの心臓ははち切れんばかりに暴れ狂っていた。

第三章「廃屋」 22（後書き）

でも俺はめげない腐らない。
なぜなら俺は

全てを諦めた男 だから。

第三章「廃屋」 23（前書き）

これは不幸の小説です。

3日以内に友達千人にこれを紹介しないと…

ケケケケケ

嘘です。

ここから駐車場までを時間にすれば1分だ。全力で走ったならそれ以下になるだろう。

とにかく早く、この薄気味悪い百貨店の中から抜け出すのだ。今もどこからかこちらの様子を見られているような気分だ。

「早く行きましょう。気味が悪い……」ミシエルはそう言ってからふと背後を振り向くと、遠くから床に散乱したサンダルなどのものを踏みつけながらノーアイズがこちらにゆっくりと寄ってきているのがはつきりと目に映った。「ここの住人達もお怒りの様ですしね。」

「ああ。もうとつとと行っちゃまおうぜ。」そして、ロバートの言葉をきっかけにして皆（アッシュはマックスに背負われて）動き出した。

まずエレスカレータ目指して一斉に走り出した。ベンチとエスカレータの距離はごく僅かな物だったので、ここは難なく走り抜けられた。

次、エスカレータを降りる。しかし、またしてもそこでノーアイズ共が群がり、進行の妨害する壁となっていた。

しかし、爆音と共にそれらは一瞬にして烈火の炎に呑み込まれた。

第三章「廃屋」 23（後書き）

昨日お家にコウモリさんが遊びに来ました
バサバサバサバサバサバサバサバサバサゴカツ（天井にぶつかる）

…。

バサバサバ r y つるせえええええ！！！！

第三章「廃屋」 24（前書き）

エクソシスト見ましたよ。あの幼女凄い演技でしたね。

F u x k m e ! F u x k m e !

うるせええええ!!!

その爆炎の正体はアッシュの改造グレネードだった。不気味な白い艶を持ったノーアイズの肉片と一緒に鮮やかな金属光沢を持ったエスカレータの金属片が飛び散る。足元からエスカレータが南極の氷壁のように崩れる感触が伝わった。黒煙が目の中の暗闇を駆け抜けて突き刺すような匂いで4人の鼻孔を刺激した。

しかしその轟音のせい、多数の小さな黒い影が声を上げながら崩壊するエスカレータの下に集まってきた。ブルだった。ギヤインギヤインと吠えたてながら、縄張りを荒らされた怒りを露わにしながら突っ走ってきた。目の前の黒煙が消え去るとグレネードに挟まれたエスカレータの全貌と喚くそいつらの姿が一斉に視界に現れた。しかし、そのブル達の鳴き声は一瞬にしてウージーの金切り声によって掻き消された。

「邪魔だ、腐ったチワワ共めが！」ロバートは叫びながらウージーの引き金を引き絞って崩落したエスカレータの方へと前進した。まず1匹のブルに7発の9ミリ弾が襲いかかった。始めに最初の3発が前脚、横腹、頭部へとぶち込まれ、ブルの命を絶った。だが、それだけでは収まらず、残りの4発がまるで解体ショーを悦しむかの様に腹へと命中した。

第三章「廃屋」 24（後書き）

ヒラケンってさあれ、マイク飲み込めるんじゃない？

第三章「廃屋」 25（前書き）

最近の口癖

「難儀やお〜」

途端、死体になったブルの腹から腐りきったキムチが無理矢理引きずり出された。ボロのカーテンの様になってしまったその体からはその後も肋骨や心臓やらが流れ出てくる。

そいつを皮切りに残ったブルも次々とロバートのウージー9ミリ弾の餌食になっていく。首を撃たれたものは傷口から血の大噴水を上げてから数秒後に息絶え、肺を貫かれたものは喘息の常備薬のような不可思議な呼吸を数回繰り返した後死んだ。

ブルの鳴き声が悲鳴に変わるのに3秒もかからなかった。そして、悲鳴が沈黙に変わるのも3秒とかからなかった。ものの数秒で、群がったブルが全て屍になった。かのジョン・ランボーもびっくりだ。

「とつとと行け！」「ロバートはウージーのリロードをしながらエスカレータを駆け降りた。ミシエル達3人も後に続く。段の途中で横の手すりから飛び降りて、前方の崩落部分を避けた。

「ぐうっ！？」だが、1階の床はエスカレータのガラスの破片だらけになっていた。ロバートは着地した瞬間、鋭い痛みを感じた。見ると、床についてしまった右手の平に無数のガラス片が突き刺さっていた。

第三章「廃屋」 25（後書き）

自分の口癖が「くなのら」の人。
貴方は多分、特別天然記念物です。

第三章「廃屋」 26（前書き）

生きた心地がしない

だが、今はそんな事はどうでもいい。前へ進むことが先決だ。

ロバートは掌に突き刺さったガラス片を、ウージーの引き金を絞るのに差し支えない、最小限の数を抜くとすぐに走った。傷口からは肉が血塗れの掌の皮膚から覗いており、そこから滴る血液が彼が走った軌道通りに床に一本道を作っていく。

「大丈夫ですか、止血しなくて？」

「ああ、大丈夫さ。ガキの頃のスラムで慣れた」走りながらミシエルとロバートが喋る。遙か前方に見えるエレベータの脇の扉が地下駐車場へと続く階段の入り口だった。あと25メートルといったところか。5秒もあれば行き着ける。

すると、通路の脇の靴販売店からまたしてもノーアイズが現れた。しかし、そいつらを相手にする気など全く無かった4人はそれを無視して走り続ける。マックスが後ろを振り返ると、先程出てきたノーアイズとは早くも10メートルの距離が出来ていた。

残り15メートル。あと数秒でゴールだ。皆、全力で扉へと駆ける。

第三章「廃屋」 26（後書き）

この世で一番好きな言葉
「どう足掻いても、絶望。」

b
y
サイレン

第三章「廃屋」 27（前書き）

卒業式

寝るためにあるものなのです

第三章「廢屋」

しかし、次の瞬間！

ズン！

地響きが鳴った。床が揺れた。天井にぶら下がっていた埃が一気に舞い降りた。

「何です?!」 ミシエルが叫んだ。その直後。

[illegible]

謎の凄まじいホウコウがさらに床を揺らした。

「おい、マックス。お前凄え虎のモノマネ上手いじゃんかよ……」

「…違うよ…俺じゃないよ…」

「頼むからうん、と言ってくれ……!!」 ロバートの額から脂ぎった汗が噴火した様に滲み出てきた。

「まずいっすね……」

アッシュが呟いたその時、再び地鳴りが響いた。

ズン。ズン！ズン！！ズン！！！！

まずい！！こちらに向かってきている！！

「逃げてください!!」 ミシエルの命令は、半ば要らなかった。

言う直前、既に全員が動き出していたのだから。

第三章「廃屋」 27（後書き）

寝る

「起立、礼」で起きる

座る

寝る

の繰り返しで卒業式はあっという間ですよ

第三章「廃屋」

28（前書き）

花粉症氏ねお

「うおおおおおおお！！」全力で足を動かすが、後ろの地鳴りは大きくなっていくばかりだ。

「畜生！！何だつてんだ畜生！！」疲労で肺が焼け付いてきた。あと10メートル。

もうすぐ扉に手が届く。だがもう体力が持たない。これ以上ない焦燥感が4人のスタミナを大幅に削っていた。扉が一瞬、地平線の彼方にあるように見えた。

あと5メートル。

ここでミシエルは愛用銃のベレッタを懷から抜いた。そして、即座に扉のドアノブ目がけてそれを連射した。直後、ノブとその部品が一斉に弾け飛んだ。ようやく辿り付いて鍵がかかっていたのでは、為す術もなく後ろの奴に皆殺しだ。

もう扉は目の前だ。

それから数歩地を蹴ると、ミシエルはドアにタックルを仕掛けた。その瞬間、ドアは蝶番を支点に勢い良く開いた。4人はそこへ一斉になだれこんだ。ただ、それはダイブに近かったので、宙に舞った体は階段の踊り場の床を転がった。

「危ない…所でしたね…」ミシエルは息を絶え絶えにして言った。

第三章「廃屋」 28（後書き）

俺の目ん玉、切原赤也状態
やばい。

第三章「廃屋」 29（前書き）

花粉症対策伊達メガネ購入。
装着。
変人。

「ああ…こんなに怖え鬼ごっこしたのは…初めてだな…ランボーも…泣いて逃げるんじゃ…ねえのか…？」ロバートも目一杯肩を下させて肺に空気を入れ込んでいた。大きく見開かれた目からは恐怖の色が伺える。

すると突如、マックスがとんでもない言葉を口にした。

「アッシュは…?!」

「!!」とつさに見渡すが、踊り場には彼の姿がなかった。

その時、ミシエルの脳裏を一本の黒い閃光が貫いた。

ならば…!!?

ミシエルは先程入ってきた扉を思い切り蹴った。扉は支点の蝶番が外れ、そのまま床に叩き付けられた。

次の瞬間、史上最悪の光景が3人の目に飛び込んできた。

扉の向こうにいたのは、身長5メートルの酷く巨大なノーアイズだった。しかし、そいつの腕からは、ノーアイズでは考えられない程の筋肉が隆々と浮き出ており、真つ赤な歯茎に植えられた牙も鋭さを増していた。その中でも特に掌が巨大で、あの圧殺死体の手形と丁度合いそうなサイズだった（手形は死体の体を包み込むように付いていた）。

そしてその手の握られた中に…アッシュがいた。

第三章「廃屋」 29（後書き）

今日久しぶりに空手やりました。

えい。

たあ。

腕痛いよ（泣）

第三章「廃屋」 30（前書き）

ただ今アメリカンジョークの勉強中。
ボブとロバートの台詞に困る。

「離せこの野郎、馬鹿野郎！」アッシュは懸命にもがいていたが、巨大すぎるその手はびくともしていない。

「がつっ！」その時、アッシュの骨の軽快に折れる音がこちらまで届いてきた。アッシュはその瞬間口から大量の血を噴いた。折れた骨が内臓をズタズタに引き裂く。

「うあああああああ！！！」ミシエルは叫び、ベレッタを抜いた。「アッシュ！！」そう吠えながらマックスとロバートも各々、銃を構えた。

しかし、引き金が引けない。どれだけ力を込めようと、発射点まで絞れない。

無駄だ。

今、3人の脳の組織全てがその言葉で侵されていた。訳の分からない強力な力が人差し指を止めていた。

その力の正体は、死への恐怖だった。

邪魔をすれば俺達も喰われるかもしれないー！。

嫌だ。

死にたくない。

死にたくない。

「あああああああああ！！！！」アッシュの体がきしみを上げてさらに醜く歪んでいく。それに応じて、彼の顔がメロンみたくパンパンに、赤く膨らんでいく。握り潰されている下半身は腕も足も胴体も判別がつかない程の凄惨な状態になっていた。

第三章「廃屋」 30（後書き）

爪爪爪

これを歌える人は俺の友達だ！！

第三章「廃屋」 31（前書き）

3月23日

マキシマムザホルモンNEWシングル発売。
凶器乱舞。

数秒後、彼の頭部が膨らんでちょうど飴玉のようになる。胴の中の全ての血液、骨、臓物が今、頭の中へ凝縮されているのだ。アッシュ、いやその奇形な物体はびくんびくんと無意味に体を震わせて今にも破裂しそうなその頭部を不気味に揺さぶる。

次の瞬間、ついに頭の天辺の頭皮が裂け、体の内容物を噴水の如く勢い良く撒き散らした。頭蓋骨の破片を皮切りに、蛆のような脳髄、血と溶け込んだ内臓や皮下脂肪が、尋常ではない量のドス黒い血液と共にドライの噴水ショーを再現する。

次に頭部自体が破裂した。眼球が弾丸のように弾け飛んでから、それと同じように内臓達も弾け飛ぶ。まるで人間火山だ。

「あああああああ！！！！」ミシエルは突如叫び狂い、その光景に背を向けて地下駐車場への階段を駆け降り始めた。

「あつ、おいミシエル！！」ロバートが制止をかけたが、彼は止まらなかった。彼が踊り場で折れるとすぐに姿が見えなくなってしまった。

第三章「廃屋」 31（後書き）

書店はエロ本コーナーをカイズの横に設けるべきではないと思う

第三章「廃屋」 32（前書き）

ようやく物語の序曲が終わりそうです。
よかったですよかったです。

「やべえぞ……!!」ロバートは呟いた。「2人だけでも応戦するぞ……あの野郎トチ狂いやがって……!!」マックスの耳元から歯ぎしりが聞こえてきた。

しかし、ロバート達に気づいていないのか、その怪物は原型を留めていないアツシユの死体をずつといじり回している。巨大な掌を開閉する度に手の内にある肉塊から血液が絞られ、指の間から溢れ出す。

「どういっつもりだ……?」生殖活動をする素振りがない。ただ遊んでいるだけのように見える。

すると、その肉塊を投げ飛ばした。投げた肉塊は腰を入れてないのにも関わらず、滅茶苦茶なスピードで吹っ飛んでいった。そしてそれが遙か向こうの支柱に激突すると、飛沫となって飛散した。

「クレイトス呼ばなきゃな……」マックスはそれをジョークとして楽しむ余裕なんて微塵もなかった。言った本人もそうだった。

しかしその直後、突然怪物がロバート達から背を向けた。そしてやはりロバート達には気付いていなかったのか、そのまま歩きだした。地鳴りを響かせるその足音がどんどん小さくなっていく。

第三章「廃屋」 32（後書き）

ゴキブリと俺の妹の名前は同義語

第三章「廃屋」 33（前書き）

俺の一番好きな芸人
ピース

地下駐車場。その後、ロバートとマックスは怪物が去ったことを念入りに確認した上で、階段へ向かった。その階段を降りていき、駐車場へのドアを開けたすぐのところ、独り佇むミシエルを見つけたのだった。

駐車場の出口から見える空が光を帯びてきた。もうすぐ朝だ。

「一体全体どうした？ マーダーピエロみてえに叫んで逃げやがって。」ロバートは俯くミシエルの顔をのぞき込んだ。「ええ？ クソキザ」

しかし、ミシエルは何も言わないままだ黙りこくる。

「運が悪かったら俺達握り潰されてたんだぜ」マックスも加わった。言うまでもなくロバート側だ。

「おい、何とか言えよ。」

それでもミシエルは黙ったままだ。

「おい、テメエ……！ 何とか言えよ！！俺達を置いて逃げたんだぞお前は！！」ついにロバートがしびれを切らし激昂した。ミシエルの胸倉を掴み、さらに続けた。「おまけにテメエはアッシュを見殺しにした！！何故だ！！何故撃たなかったんだ？！この人殺しが！！！！」

ロバートがそれを言い終えた次の瞬間、ミシエルは自らの胸倉を掴むロバートの腕を強引に力任せに払いのけ、その勢いでロバートの体を全力で押し倒した。

第三章「廃屋」 33（後書き）

俺の一番嫌いな人間
俺の妹

第三章「廃屋」 34（前書き）

今までこれを愛読してくれた皆さん、おめでとつございます。
あと4ヶ月で僕の誕生日です。

「何だこれは……」ミシエルはロバートと折り重なった体勢のまま
 呟いた。「何だこの心臓にのしかかってくる、鉛みたいなモノは……」

「おい退けよ……！」ロバートはもぐがミシエルの体は離れない。
 「アツシユの残像が頭ん中から離れねえんだよ……！」突如、ミシ
 エルは吠えた。目尻に涙が現れた。「畜生……畜生……！」

すると突如、「仲間の死に様なんぞ幾度となく見てきただろうが
 ……」ロバートが握った拳でミシエルの頬を殴りつけた。ミシエルは
 一瞬たじろいだ、それでも尚ロバートから離れない。「それも飽
 きる程にな……！今更何だこの野郎……！人殺し……！」

さらにロバートは殴打を続けた。殴る度に鈍い音が響き、鮮血が
 ロバートの顔に降りかかった。

8 発目でミシエルの体が吹っ飛んだ。その体はゴロゴロと駐車場
 の床を転がり、太いコンクリートの支柱にぶつかって止まった。

「目エ覚ましたか、人殺し、人殺し、人殺し……！」

第三章「廃屋」 34（後書き）

ヘドバンしながら歩いてたら警察につかまるかな？

第三章「廃屋」 35（前書き）

すみません。前書き後書きのネタが本当に尽きました。
よって次回からは前書き後書きは気まぐれでやっています。

「俺が殺したんだ…俺が…」ミシエルが仰向けになった。涙が頬を伝っている。

「そうさ、お前が殺したんだ。」嘲笑を浮かべるロバートの拳は血塗られていた。「見殺しさ。」

「そうだ…」ミシエルはふらつきながらも服に付着した砂利を払いながら立ち上がった。「俺は人殺しだ。俺がアッシュを見殺したんだ」

「ようやくわかったか」ロバートはなおも笑い続ける。

「ああ、ようやくわかったさ…ジョン・ターウィルガーはあの時人間として当然のことをやっただけだったことを」

ロバートの笑いが止まった。その一瞬、何も聞こえない完全な静寂が地下駐車場の3人の前を通り過ぎ去った。

「…………お前、とうとうイカれちゃったんだな…」ロバートが背負ったバッグに挿したウージーに手を掛けた。マックスの心臓が凍り付いた。「じゃあ死んじゃえ」

ロバートはそう言うと、ミシエルにウージーの銃口を向け、構えた。

第三章「廃屋」 35（後書き）

真顔でふとんがふつとんだ言ってみ？
案外ウケるから

「おい、止めろよ!!」

「五月蠅え!!」マックスがウージーを奪いに掛かるも来たところで鳩尾にロバートの強烈な蹴りが突き刺さった。マックスは絶息してその場に崩れ落ちた。

「…こいつはレイの陰気野郎と一緒にさ。イカれたら殺す。」ロバートがウージーを構え直す。「『イカれたら殺す』…いい言葉だな…ハハハ…元の世界でもそうだったっけな……死刑囚、言い残すことはないな?」

ウージーの引き金が徐々に絞られていく。あとほんの数秒でミシエルの体が穴だらけになるだろう。いや、数秒もかからないかも知れない。

「やめてくれよ!!」マックスが必死に叫ぶが、引き金の動きは一瞬たりとも止まらない。先程の一撃で肋が折れたのだろうか、マックスはただ地を這うばかりだ。そうしている間にもうすぐ死へのカウントダウンが終わりを告げようとしていた。

しかし次の瞬間…

「あいつは一体どれだけ溜込んでるんだろうな…」

ミシエルがそう言った直後、ロバートの手が止まった。

「どういうことだ…？」

「仲間が一人死んでその重石が今俺の胸にのしかかっている…この重石の名は『死の責任』だ…ひとつのしかかっているだけで酷く死にたい気分になる…なら…幾十幾百この重石がのしかかったジヨンは普通とづくに自殺しているんじゃないか…！！」

ミシエルの頬からこぼれた涙が一滴、コンクリートに染みた。

「糞…！！何で俺はこんな事をしちまったんだ…何故離反しちまったんだ…あいつは最高のリーダーなのに…！！気が狂っちまい…そう…だ…！！」その言葉の切れ目切れ目には呻き声が混じっていた。ミシエルは再び崩れ落ちた。悲しみに身を震わせて屈み込んだ。ウージの銃口が再びミシエルの体を捉えることはなかった。

そして冷たいコンクリートの上でミシエルは決意した。

もう誰も死なせない、と。

第四章「独房」 1

東の空が茜色に染まっていく。太陽だ。もう少しで朝だ。悪夢の夜が終わりを告げようとしている。

ノーアイズの体は朝になって太陽が昇って来るとその日光によって蒸発してしまう体なのだ。日中は廃屋などの陰で夜を待つ。

夜行性だ。

だからといって日中に歩を進める訳にはいかない。休息がなくなってしまうからだ。日中はひたすら歩き続け、夜間は目覚めた化け物たちとの闘い……3日と体が持たない。その前に精神が狂う。ターミネーターでないと無理だ。

よって日中は夜に備えてひたすら休息を取ることにしている。酒を飲み、睡眠も取る。

それには宿を取る必要があるのだが、これが夜間最後の地獄だ。宿を「取る」ではなく、「奪う」のだ。奪う相手はもちろんノーアイズ。

まず適当な廃屋を選び、中のノーアイズを掃討し、占拠する。それが完了したら、他のノーアイズを中に入れないための防衛戦だ。でないと、怪物と一緒に「お泊まり」だ。

第四章「独房」 2

地下駐車場を出て国道を歩いて行くと向こうに大きな住宅街が見えてきた。案の定、そこに見える全ての家屋がフエの王城の如くポロポロに壊されており、まるで嵐が過ぎ去ったかのようなだった。この街も死んでいる。スラムより酷い有り様だ。

「北ベトナムが攻めてきたのか？ 酷えザマだ」ロバートは首を傾げてからほくそ笑んだ。「もうすぐ糞ノーアイズ等と駄犬共がハウスの時間だ。ちゃっちゃんと宿を決めねえと俺らもマリアの元へハウスだぜ」

「…なら一番手前の家にしましょうか」

「そうだね。俺もちゃっちゃんと寝たいよ。」とマックスは言うとのんきに大欠伸をかました。

空は先程よりも一層明るみを増しており、もう懐中電灯も要らなくなつた程だ。

泊まることとなつた一番手前の家は周りと比べて少し質素な造りが目立ち、築何百年か経っているだろう煉瓦の壁は趣のある凹凸を端から端まで繰り返していた。しかし、家の前のプランターには見たことのない毒虫が湧いて出ており、その中のパンジーも老人の皮膚のように萎れてだらしなく垂れ下がっていた。

第四章「独房」 3

玄関の扉の隅には無数の蜘蛛の巣やその糸が張っており、とうの昔に息絶えて朽ち果ててしまった蝶がそこに磔にされていた。

壁に寄りかかっているノーアイズの死体は気持ちよさそうに四肢を投げ出して、ココハオレタチノスミカダと言わんばかりに眼球のない眼と鋭い歯が並んだ口を大きく開かせていた。

3人は無言で玄関の前に立った。

午前6時37分。

もう少しで朝が来る。日が昇る。

「私がドアを開けた直後に即、2人は中に突入して下さい…分かりましたか…？」ミシエルは小声で突入の最終確認を行った。

「ああ…。」

「わかってるよ、ミシエラン…。」

「…私の名前はミシエルです…。」マックスのは気に食わなかったが兎に角一応2人は首を縦に振った。

準備完了。

ミシエルはベレッタのグリップを握りしめた。

「…では行きますよ…！」

第四章「独房」 4

そう言ってミシエルはドアノブに手を掛けた。音を立てず、ゆっくりとそれを回す。60度程回すと突っかかりが現れた。完全にドアノブが回ったのだ。

耳を澄ませばドアの向こうから足音が響いてくる…。ノーアイズが蠢いているのだ。数は1か10か100か1000か…。開けてみないと分からない。3人は今まさに史上最悪のびっくり箱を開けようとしているのだ。

風見鶏の周りを翔ぶ鳥が一声鳴いた。その鳴き声は一瞬で終末の世界の夜明けに響き渡った。

そして、ミシエルはドアノブを一気に押した。しかしそれでは足りず、蹴った。扉は中の壁にぶち当たって若干跳ね返り、それと同時にマックスとロバートが共に中へ突撃した。

だが、その直後に起こった出来事はあまりにも唐突な出来事だった。銃を突きつけるはずのロバートとアッシュが逆に銃を突きつけられたのだから。

第四章「独房」 5

「誰やアンタら？」ロバートに銃を突きつけた男は言った。男の風貌は黒いアフロに攻撃的なサングラス、肌は褐色で言葉には南部訛りがある。黒人だ。銃はワルサーPPKS…。

「手前エこそ誰だ？」ロバートは聞いた。そしてロバートもウージーを男に突きつけた。互いの腕が交差する。

「ちよつと、2人とも止めなよ！」マックスが2人の間に割り込もうとするが、ロバートの剣幕に退いた。

しかし、

「止めて下さい。他人の家で。」後から入ってきたミシエルがロバートの腕を躊躇い無く払い除けた。

「……わかったよ。」すると、ロバートは渋々ながらもウージーを背負ったバッグに挿し戻した。

それを見て男もワルサーPPKSを腰のホルダーにしまった。

「…で、このカビ臭い家に何の用や？ウチにや犬の食べ物とポルノビデオしかないで？」男は腕を組んだ。

「私らを一泊、泊めてくれませんか？何もなくてもノーアイズがない事だけで十分過ぎます。」

「そうやな…。」すると男はしたり顔をした。そして、言った。

「ほなウチの防衛を手伝ってくれへんやろか？」

第四章「独房」 6

その時、玄関のドアが何者かに叩かれた。

最初、その音は一つだったが数秒後、雨音のような勢いで叩かれ始めた。

呻き声が聞こえた。明らかに人間ではない、おぞましい声ー。

ノーアイズが宿を開けるとノックしているのだ。ドアがきしみ始める。今すぐにでも破られそうだ。

「…わかりました。ロバート、マックス、行きましょう。」

「あいよ。」

「はいはい。」

すると、男は「OK・アンタがロバートで君がマックスやな。君の名前は？」と言い、ミシエルを指さした。

「ミシエル。ミシエル・ドラクロア。変わった名字でしょう?」

「『十字架』…やね。OKOK! 俺の名前はマイケル・ムーアズ。まあ、ミッキーとでも呼んでや。」

「ミッキー…ですか。………分…かりました。」ミシエルはマイケルにバレないように含み笑いをした。が、言葉に出てしまっていた。

すると、ロバートが割り込んできた。「何してんだ、やるぞクソキザ。奴等に扉越し銃ぶちかますぞ。」そう言って、蝶番が外れかけたドアにウージーの照準を合わせた。

第四章「独房」 7

次の瞬間、ウージーの怒号と共に、ドアに銃弾が撃ち込まれ始めた。ドアの向こうのノーアイズが扉を貫通した9ミリ弾で細切れにされていく。

「凄えやん！頼りになる」マイケルが感嘆の声を漏らす。

ドアが蜂の巣になったところで、蝶番が完全に外れた。支点を失ったドアの板がこちら側へ倒れると、外からノックしていた連中達が満身創夷になって這い出てきた。

「俺も頑張らなあかんわ」ここでマイケルは先程のワルサーを腰のホルダーから抜いた。その手つきはぎこちなかったが、適当に狙いを定めて撃った。

すると通常の銃からは有り得ない、凄まじい爆発音が轟いた。前方を見ると、まるで小型グレネードを投げたかのような爆発が起り、それによって先頭のノーアイズの頭蓋が木っ端微塵に吹き飛んだ。

マイケルのワルサーの弾は炸裂弾だったのだ。

途端、ロバートは腹を抱えて笑った。「おい、手前エ！俺の頭をあんなモンで吹き飛ばそうとしたのか！？エグ過ぎるぜ！！」

「俺もそっくりそんなま言い返したいわ！！」

第四章「独房」 8

これで家に侵入して来たノーアイズ全てにカタが付いた。

次は侵入を試みるノーアイズ達の排除だ。

「俺が行くよ！」マックスが叫んで家から飛び出た。

街道には立ち並ぶ家々に住み移ろうとする無数のノーアイズの姿があつた。当然、その中にもこの家に住み移ろうとする輩はいた。20か30か。太陽の光が差し込み始めたと同時に彼らの皮膚が音を立てて蒸発し始めた。

マックスの2挺のグロックが乱射される。でたらめに撃たれた弾丸が侵攻するノーアイズの動きを止める。

胸に被弾した最寄りのノーアイズが爪で腹を抉ろうと、振りかぶりながらマックスに走り寄ってきた。

それに反応したマックスはとっさにそのノーアイズの両太股を撃ち抜いた。それが悲鳴を上げながら崩れ落ちるのを見ると、マックスは足を使って動き回り始めた。

gun・runだ。

ノーアイズの攻撃に捕まらないよう、絶えず高速で短距離移動しながら相手を礫にするー。

そして、10体程が屍になった時、ミシエルが加勢に入った。

第四章「独房」 9

「マックス、出しゃ張りにも程があります。自重を。」ベレッタが火を吹いた。相変わらぬの精密射撃だ。次々と確実に正確に弾丸がノーアイズの腐った豆腐のような頭を貫いていく。重油の入った水風船があちこちで割れていく。

迫り来るノーアイズが全て地に伏すと、ミシェルはマックスが息の根を止め損ねた、死に損ないのノーアイズ達にとどめを差しにかかった。血のまどろみでもがく怪物に狙いを定め、撃つ。

ノーアイズが頭を打ち碎かれる瞬間はいつもうるさい断末魔を一瞬上げてから息耐える。発砲音とその叫びがリズムカルに入り交える。

弾倉が空になると、すぐさま別のマガジンと取り替え、再び撃つ。

撃つ。

撃つ。

ノーアイズに成り果てた者への唯一の救いは「死」だ。

ついに太陽が街全体を黄金色に染め上げた。

朝だ。午前6時52分。

悪夢の夜が一旦眠りに落ちたのだ。

しかし、凍えるような朝だ。ミシエルの吐息が白煙に変わる。

第四章「独房」 10（前書き）

これと同時進行していた小人気小説MURDER OFが完結しました！

わーい！わーい！わーい、わぁい、わ…（泣）

マイケルに連れられて入った部屋はリビングルームだった。その部屋は酷い散らかり具合で、マットレスには足の踏み場がない程だ。とはいっても、これはノーアイズが荒らしたなどと言ったものではなく、ただの不摂生なのだが。

「まあ、そのイスにかけてくれや」とマックスはダイニングテーブルの方を指したが、テーブルの上も汚く、得体の知れないシミがいつぱいにこびり付いており、イスの上も飲み水の飛沫やらコーンフレークの食べ滓やらが沢山散らばっていた。

潔癖のミシエルはマイケルに頼んで貸してもらった雑巾でイスを拭いてからイスに腰掛けた。潔癖ではないマックスとロバートも後からその動作をテープを再生したかのようにそれぞれ同じく行った。そしてしばらくすると、「すまんあ、」とマイケルが頭を下げながらこちらへ寄って来た。「メシないわ」聞くと、どうやら客に出す食料はともかく、自分の分さえも底を尽きたらしい。

すると、ミシエルは小さく溜息をついてから「分かりました。私が作りましょう」椅子から立ち上がった。

第四章「独房」 10（後書き）

次回「ミシエルの3秒クッキング」

嘘。

第四章「独房」 11（前書き）

クッキングタイムやっぱスタート。

そしてミシエルは台所（ここも汚かった）に立つと、バッグの中から何かを取り出した。

料理の材料だ。ミシエルは食事係であるが故、何処でも料理ができるようにいつも持ち歩いているのだった。

取り出したのは、コンソメケースと玉葱一個、少し傷んでしまったベーコンだった。

「さあ、始めますか。」そう呟くとミシエルは自前の包丁で玉葱を微塵切りにし始めた。

「ミツキー、水はありますか？」

「水？水やったら下に腐るほどあるで」するとマイケルはミシエルが立っているキッチンの収納スペースから1・5リットルのペットボトルを一つ寄越した。当然、中身は雨水だ。

ミシエルはそれを受け取ると、調理スペースにガラクタの様に山積みになっていた調理器具の中から厚みのある鍋を取り出した。マックスがミシエルの手元を見ると、既に玉葱は微塵切りにされていた。恐ろしい程の手際の良さだ。

第四章「独房」 12（前書き）

C R A Z Y Y Y Y S T U U U N T ! ! ! ! !

つていうのを書き始めました。

主人公以外全員キ●ガイ

是非見てっして下さい！。

鍋を手に取ると、先程マイケルが寄越した水を手の中に入れ始めた。

「ミッキー、コンロは？」

「ああ、あるで」マイケルは答えるとキッチンを一旦去った。しばらくすると、埃を被った携帯カートリッジコンロを掲げ戻ってきた。

ミシエルは渡された携帯コンロの埃を払うと、スイッチを回した。円状に一斉に出現したたくさんの小さな青い炎が僅かに揺らめいた。そのコンロの上に、先程水を入れた鍋を置く。

ミシエルがベーコンを切りながらしばらく待つと鍋に張った水に小さな泡がぷつぷつと浮かび上がり、次第にその数も大きくなってきた。沸騰したのだ。

すると、水が沸騰する前に切っておいた玉葱とベーコンをその中に放り込んだ。

ここで突然、マックスが首を傾げた。「ねえ、ミッキー」

「何や坊主？」

「一体今まで何を食べてきたの？」マックスはキッチンの埃まみれの調理器具達を見て聞いた。

「スナックしか食べへんかった。料理なんて出来へんもん」

「へえ、やつぱり…」道理でキッチンが汚い訳だ、とマックスは思った。

しかし、

「やけどな…」マイケルは続けた。

「一月前まではそうやなかった。」

「…というと…？」マックスは体を前にして耳を傾ける。

すると、ロバートがマックスを止めた。「おい、馬鹿野郎。」

「何さ。」

「察してやれ。他人のトラウマは思い出させるモノじゃねえんだよ。」

「気遣いありがとう。」マイケルは笑った。「でも、ええんや。」

一ヶ月間、俺独りぼっちやったもんな。」

沈黙。キッチンから香ばしい香りが漂ってきた。

「俺には女房がおったんやけどな、ちょうど一ヶ月前…」マイケルはここでほんの僅かに躊躇で間をとったが、また口を開いた。「自殺してしもたんや」

さらに続ける。首を吊って死んでいた事、火葬した事、エトセトラ、etc...とにかく聞いていて酷く心の痛む話だった。

そしてしばらくすると、ミシエルが完成した料理を持ってダイニングテーブルに戻ってきた。

「皆さん。今日のメニューはベーコンコンソメスープと……」

バッタの素揚げです。

「…え…？バツタ？」たじろぐマイケル。

「そうですバツタです」

「は…？食うもんちゃうやろ…？」

「バツタも大事な食料ですよ」ミシエルはそう言っただけのリュックの中からある物を取り出した。

バツタケースだ。

プラスチック容器の中にこれでもかというくらいの無数のバツタが詰められている。虫嫌いが見たら卒倒するであろう光景だ。

しかし、ロバートとマックスはそれを見ても留めずに面白そうにマイケルを見ていた。ミシエルのバツタの素揚げはレジスタンス内の定番メニューだ。その手の惨い光景には慣れてしまっているのだ。

「諦める。」

「まあ一口食べたなら慣れるよ。」そう言って、ロバートとマックスはそれぞれマイケルの肩に手を置いた。

マイケルの顔から血の気が引いた。

マイケルは震える指でバツタの素揚げを一匹つまむ。そしてそれを口の中に運んだ。

パリパリパリ。何回かソシャクをした後、黙ってコンソメスープで流し込んだ。

4人はその後少量の酒を飲んでから（未成年者であるマックスも）眠りにつくことにした。

見張り番は交代制だ。今日は2時間ごとにミシエル、マックス、ロバートの順で交代することになった。

見張り番の仕事は主にノーアイズと天候の確認だ。資材のかき集めも本来の仕事だが、今日はここに家の家主がいるので遠慮することにした。

ミシエルは3人が眠りについた後、一人眠そうに瞼を擦ってから、窓の外の景色を眺め始めた。ビートルズのナンバーを口ずさみながら、薄暗い屋内から空を見つめた。雲一つない青空の下、時を止めたボストンの町並みが切なく佇んでいた。

一秒一秒ゆっくりと腕時計が時を刻む。静寂の中の2時間というものには長いものだ。一時間はもう経っただろう、と見たけれども、まだ長針が90度回っただけだった。

第五章「地獄」 1

「がああああああああ！！何じゃこりやあああああ
ああ！！！」ロバートの絶叫でミシエルとマイケルは跳ね起きた。

「何事ですか？！」ただ事ではない、ミシエルは勘づいた。

「ロバート…ロ、ロバートの手があ…！」ミシエルの懷にマ
ックスが涙目になって飛び込んできた。

その瞬間。ミシエルはとんでもない物を見てしまった。

ロバートの右の掌が壊死している。

「糞がああああああ、痛え、痛えよおお！！畜生おお！！！」
床に転げ落ち、のたうち回るロバート。左手で押さえている右の掌
から青とも黒ともつかぬ色をした気色の悪い膿がこぼれ出ている。

昨日のエスカレータでの傷か。ミシエルは思った。

ロバートは昨日、百貨店でエスカレータを横から飛び降りた時、
着地に失敗し、床に散らばったガラス片を掌に突き刺していた。マ
ックスによると、彼は後で治療を何も施しておらず、消毒さえせず
放置していたらしい。

第五章「地獄」 2

「落ち着いて下さい!!」

「落ち着ける訳あるか!! 朝起きたら右手がゾンビになってんだぞ!!」 尚も叫び続けるロバート。

ロバートを静めるのを諦めたミシエルは無言で彼のところに寄った。

「助けてくれえ!!! 治してくれえ!!!」 悲鳴混じりの懇願。ミシエルに右手を差し出した。

「……。」 駄目だ。右手は完全に壊死してしまっている。このままでは腕全体が……いや、脳まで侵され死に至ってしまう……!すると、突然ロバートの叫びが止んだ。そしてきよんとした目で呟いた。

「……痛くない……。痛くないぜ、ほら、クソキザ。痛くなくなったぜ!!」 歓喜で声を張り上げるロバート。

「良かったじゃん!!」 ミシエルにしがみついて震えていたマックスも安堵の笑顔を見せた。しかし。

「馬鹿ですか、貴方は!？」 ミシエルはもの凄い剣幕でロバートを睨んだ。

「は……?」 戸惑うロバート。痛くないんだったらそれでいいだろうが。

次の瞬間、ミシエルの口から信じられない言葉が出てきた。

「神経がやられたんですよ……!!」

第五章「地獄」 3

「は…はは…ふざけんなよ…！」

「ふざけてなんかいません。神経がやられたから痛みを感じなくなっただけです。第一、そんな様子で大丈夫な訳無いじゃないですか…」ミシェルはロボットの右手を手を取った。

掌は大量の膿で埋め尽くされており、周囲の皮膚も黒ずんでいた。手持ちの道具ではまともには治療出来ないレベルだ。

腐食はこうしている間にもどんどん進んでいる。だと言って放置出来ないし、治療も出来ない。

ならどうする…？

答えは一つ。

「……もうこれは…腕ごと切り離すしかないですね…」

「…お前がジグソウに見えるぜ…」

己の無力さを嘆くミシェル。勘弁してくれと心の中で呟いた。

第五章「地獄」 4（前書き）

さあてと…ゴキゴキ
ケケケケ…

第五章「地獄」 4

「ミッキー」とミシエル。

「な…何や…？」

「包帯と何かしらの棒はありませんか？」

「わかった…ちょっと待っというてや」マイケルはそう言っ
て部屋を出た。

「それとマックス」

「え、俺？」

「台所の包丁をコンロで炙って来て下さい…」

「あ…うん…わかったよ…」マックスも部屋を出た。

今、部屋にはミシエルとロバート2人きりだ。部屋には昼の閑散
とした日の光が入ってくる。

「やあ、本当にやるんだな…畜生…吐き気がしてくるぜ…」ロバ
ートの額には脂でぎっとりとした大量の汗が光っていた。

「まあ貴方の自業自得なのですが、ここで貴方に死なれては困り
ますので…」

「そうかい…」

「神の御加護を」

ミシエルがそう言っ
てしばらくするとマイケルとマックスの2人
が部屋に戻ってきた。

第五章「地獄」 5（前書き）

ようやく来てしまった。

100話目。

3ヶ月の月日。

色々あったなあ。

暴走しまくってたなあ。

この節目の100話目はミシエルの手術でお送りいたします。

第五章「地獄」 5

「…では始めますか…」重々しく呟いてミシエルはマイケルから包帯と鉄のパイプ（マイケルの護身用アイテム）を受け取ると、右の上腕をその包帯できつく巻き始めた。

ある程度巻くと、結び、その結び目にパイプを差し込み、それを回し始めた。

「痛え…痛え…」ロバートが痛みに喘ぐ。目元がひきつる。

限界まで巻くとロバートの下腕はだらんとぶら下がり、そこでもう一回包帯で棒を巻き込みながら結んだ。止血だ。

「目を瞑って下さい、ロバート…」

「ああ、もうやってる。今俺の瞼はハマグリさ。」

ミシエルはそれを聞くとマックスから手渡された包丁を手にとった。

ミシエルの掌はすっかり手汗で湿っていた。心臓の高鳴りがどうしても抑えられない。

今から仲間の腕を切ろうとしているのだから。

下腕…間接から4センチほど下に包丁を軽く当てる。赤い筋がツツ…と流れ出た。震える腕。ミシエルもロバートも双方腕が震えていた。

後ろのマックスとマイケルはただ目を瞑り、耳も塞ぎ、何も見まい、何も聞かまいと、脳裏で何度も何度も繰り返し念じている。

第五章「地獄」 5（後書き）

因みに文庫本で言うところと今大体70ページとところぐらい。

第五章「地獄」 6

「腕を…床に…」

「ああ…」ロバートはそれに従った。パニックで灼かれていく脳が言葉をふるわせる。

深呼吸。しても何もならない。吸った空気が重過ぎた、熱過ぎた。余計に胸が苦しくなる。窒息死してしまいそうだ。

肺が焼け付く。脳が灼け付く。手を震わせる。心臓が狂い出す。異常なオーバーヒートを見せる身体。

何もしていないのに汗が滲む。喉が渴く。

気が狂ってしまいそうだ。

包丁を持つ手が緩む。

だが、今やらねばロバートが死ぬ。仲間が死ぬ。共に歩んできた戦友が死ぬ。

嫌だ――

包丁を再び握りしめた。痛い程に、折れる程に。

次の瞬間、ミシェルはロバートの腕にかけた包丁を、全体重をかけて押し込んだ。

第五章「地獄」 7

「ああああああああああああああああ！！！！」ロバートが痛みに絶叫した。

包丁の刃は皮膚を千切り、筋肉を切り裂いた。が、そこで止まっていた。

骨だ。堅牢な骨が腕の切断を拒む。

「まだか畜生！！！解体ショーはまだ済んでねえのかああああ？！！！！」

引きつった表情を顔に張り付けたミシエルには全く聞こえていない。ロバートが飛ばした唾がミシエルの頭部に降りかかる。

先程上腕を縛って血流はある程度止めたが、結構な量の鮮血が傷跡から湧き出ていた。

本当は早く済ましたかった。本当は一気に一刀両断してしまいたかった。だが、叶わなかった。

地獄はまだ続く。

ミシエルは再度包丁に全体重をかけた。刃先が骨にほんの少しだけ食い込んだのが手の感覚で分かった。湧き出る血液で視覚ではもはや分からない。聞くに堪えない悲鳴が耳元でつんざく。

もう一度全力を込めて押す。今度は刃先が骨から滑って代わりに脇の肉を切り裂いた。

「ああああああ！！！！ポン刀は無えのか！？畜生オオオオアアア！！！！！！」

第五章「地獄」 8

今度は包丁の切っ先で骨を削り始めた。骨の繊維が飛び散る度にロバートは悲鳴を上げる。鮮血が床に血溜まりを作る。

「マックス！！」ミシエルは叫んだ。

「何？！」

「包帯をもつとキツく！！」血の量が半端ではない。このまま行くと失血死してしまう。

「え……あ……わ……わかった……！！」マックスが瞼を開けると、血みどろの凄惨な光景が目飛び込んできた。ざっくりと割れた傷口から溢れ出す鮮血。その傷口に包丁の切っ先を狂ったように打ちつけまくるミシエル。

一瞬言葉を失いかけた。しかし彼は堪え、ロバートの腕に近づいた。

マックスは上腕の包帯のパイプに絡ませた結び目を解いた。緩む方に傾くパイプを舵の様に逆に回していく。ギチ……ギチ……と捻れた所から窮屈な音が出るが、構わず回し続ける。ミシエルと同じく全体重をかけて。

下腕の方を見る。かなり血の勢いが収まった様だ。

良かった。

だが、安堵したのも束の間。マックスはある音が聞こえない事に気付いた。

第五章「地獄」 9

ロバートの悲鳴だ。

「ああああああああああ！！！！」ミシエルが号泣しながら包丁を床に叩きつけた。

まさかー！

マックスはロバートの顔を覗いた。

ロバートの顔からは生気が失われており、瞼は深々と閉じられていた。

「あ……」ロバートの首筋に震える指で触れる。

脈がない。彼の冷たくなった体がマックスに全てを悟らせた。

死んだー

ミシエルが出目金の様に大きく眼をひん向いて、普段の様子から想像つかないような悲鳴を上げた。

「あああああああ！！！！また俺が殺したんだ！！また俺が殺したんだあああ！！！！」そう連呼して頭を押さえつけ駄々をこねる子供のようになをのたうち回る。

第五章「地獄」 10

「俺は…駄目な…駄目な人間なんだ…！！ははははは…！！駄目な人間だあああああああ111111111111！！！！！！！！！！突如、ミシエルは壁に頭を叩きつけ始めた。狂ったように何度も何度も繰り返す。額から流血しだしたがその奇行は止まらない。

「お…おい、ミシエル！！」駆け寄ったマックスとマイケル。2人がかりでミシエルを壁から引き剥がすが、

「黙れええええええええええ！！！！」逆に思い切り払いのけられた。屍餅をつく2人。

血で顔を真っ赤に染めたミシエルが薄ら笑いながらふらふらと立ち上がった。

すると言った。

「俺は死ぬことにした」見ると彼の手元には血染めのベレッタが。ベレッタの銃身から滴になった血がこぼれ落ちる。

そしてその銃口がゆっくりと…

マックスの方を向いた。

「お前は俺の仲間だった。だから俺と一緒に死ね。」

「え…ミシエル…？」後ずさるマックス。

「死ね。俺と一緒に死ね。」ベレッタの引き金が徐々に絞られていく。

「…！」このままでは殺られる…！マックスは懷のグロックにゆつくりと手をかけた。

ミシエルを正気に戻せー！

だが次の瞬間、乾いた発砲音が響いた。

ベレッタの銃声だ。

「ああああああ！！」ベレッタの銃弾はマックスのグロックに触れた方の掌を一貫した。鮮血が、出来た銃創から火花のように散った。鋭痛とも鈍痛ともつかぬ凄まじい痛みがマックスを襲った。

「何てことするんや！！」怒りで血相を変えたマイケルがミシエルにタツクルをかました。勢い良く吹っ飛んだミシエルは体をクローゼットに叩きつけ、そのままずると後退した。

「…何故邪魔をする？！」ミシエルはあまりの絶叫で声が一瞬裏返った。「死ねえええ、死ねえええ！お前も死ねえええええ！！」

今度はベレッタの銃口がマイケルの方に向いた。

再び銃声が響いた。

だが、今度の銃声はグロックのものだった。

マックスが放った銃弾はミシエルが構えたベレッタを直撃した。ミシエルの小指もと、ベレッタは宙に弾け飛んだ。

「俺は…ミシエル…あんたとは殺り合いたくない…！」マックスはミシエルの額に照準を合わせた。しかし視界が潤み、上手くいかない。目元を拭う。また溢れ出してきた。「…あんたは…正直良くやったんだ…。それも尊敬したい程にね…。だけど…」

死んだ仲間の事を想ってない。

「生きる事を諦めないのはいいけど、死んだ事を諦めないでどうするんだ…」マックスは涙ながらに続けた。「立ち止まってちゃ死んだ仲間が報われないじゃないか…！それが何…？自殺します？心中します？馬鹿じゃないか！そんな事しちゃ犬死になっちゃうじゃないか…！もう一度考えてみてよ…俺達の目的を…！」

ダークネスの打倒。

「そうだ。俺達の目的はダークネスの打倒だ。死に行く事じゃないんだ…。いい加減目を覚ましてよ！！」構えたグロックが震える。仲間に銃を向けるとはこんなにも辛い事だとは。

「頼む…！」頼むからもう終まいにしてくれ。もう嫌だ。死にたくない。殺したくない。マックスは再び引き金にかけた人差し指を絞り出した。

俺はあんたを撃ちたくない。でもこれ以上やると言うならば撃たなきゃならない。

人差し指を少し動かすだけで簡単に人の命を奪える凶器。銃。今だけはこれが恨めしく思えてきた。

あんたには使いたくない…。撃ちたくない…。頼むからあんたのその目から死に病んだ狂気を失してくれ…！！
マックスが念じたその時。

「…そう…でしたね…」ミシェルは呟いた。「…そうでしたよね…。貴方達はダークネスを倒す為に生きているんですよね…」

「え…？！」

第六章「瞑想」 1

12月27日。午前2時17分。

ニューヨーク。

寂れ廃れた街の中でジョン、ボブ、ジャニスの3人は歩いていた。離別したミシエル達との合流が叶わぬまま進んでいた。夜の暗闇の中、遙か向こうに霞んで見えるコア・ビルは自由の女神と並んで静かに佇んでいた。

タイムズスクエアの目映い光は死に絶え、都会の喧噪も無い。ここは最早ただの廃都だ。並んでそびえ立つビル群もすっかり色を失い、ただの空虚なオブジェと化している。

地面のアスファルトを踏みしめる度に足の内部から激痛が走る。もうどれくらい歩いたのだろうか。さんざん反復運動を繰り返してきた足が悲鳴を上げている。そこから中に無造作に捨て散らかした車の群が恨めしい。

暗闇の奥底から呻き声が聞こえた。これまで何百、何千、何万回と聞いてきたノーマイズの声だ。しかし、それは急激に大きくなっていく、近づいて来る。

そしてあつと言う間にそのノーマイズは闇を斬り裂いて現れた。

第六章「瞑想」 2

そう。ノーアイズはこの2日間で、走れるように進化してしまったのだ。

ノーアイズは真に夜行性であり、日中は全く動けない。しかし、その間に進化をするのだ。従って、夜行性とはうたってはいるが、四六時中油断無く動いている事になる。

実はノーアイズは発生した当時はそれ程凶悪なアンデッドではなかった。だが進化によって、生命力、聴覚、凶暴性、繁殖力などが増強し、種が増えたり、餌が多様化したり、海を渡ったりする事が可能になり、より凶悪な化物へと変貌していったのだ。

ただ、唯一の救いがあった。鈍いことだ。ブルという新種は例外として、通常種のノーアイズは足が遅かった。彼らはこれまで、動くときは身を震わせて蠢くようにゆっくりと歩を進めていたが、今はどうだ。

こちらを見つけると一直線に走り込んでくるではないか。スピードは個体差があるが大体、人が走る早さと同じだ。見つかったらそう簡単には振り切れなくなった。

第六章「瞑想」 3（前書き）

今まで長い長い前置きに付き合っ
て下さって誠に有り難う御座い
ます

EYESはここからが本番です。

第六章「瞑想」 3

レミントンのショットガンが轟音を響かせた。

目の前で今にも襲いかかるとした一体のノーアイズの頭が粉碎した。

「ああ、クソ。キリがねえ！」

ボブが叫ぶと、向こうの方でさまよっていたノーアイズがまた一体、突っ走って来た。

「任せろ！」今度はジョンのコルトパイソンが火を吹いた。大口径の弾丸がそのノーアイズの腑に巨大な風穴を作った。

その時、ジョンの背後からはブルが襲いかかっていた。ブルは車の陰から猛スピードで忍び寄り、牙を剥き出しにして飛びかかった。その瞬間、フランキのショットガンが無数に散らばる散弾を放ち、ブルの下半身をもぎとり、それをただの肉袋にして見せた。

「本当に何なの、これ?!前に進めないじゃない!!」地団太を踏みながら弾を装填するジャニス。横腹の傷はまだ癒えず、未だに血が滴り続けている。

弾を十分に込めるとジャニスは、前方に立ち塞がった高層ビルの屋上から何者かが飛び降りたのに気付いた。

第六章「瞑想」 4

それは地に降り立つと、ブルを越える風の如きスピードでこちらに向けて突っ込んできた。

闇の中から突然現れたその正体は、

レイ・ハウエルだった。

遙か遠くで一つ踏み込むと、すぐさまひとつ飛びでジョンの眼前にまで迫ってきた。

「……！」ジョンがとつさに屈むと、レイの体は彼の背中を越え、そのままの勢いで通り過ぎた。直後、レイは空中で半回転して、着地点のバンの車体に張り付いた。

最早その怪物にはレイ・ハウエルという人間だった頃の面影はほとんどない。灰がかった白濁色の粘着質の肌、口からはみ出す長い紫の舌、漆黒の液体を絶えず抽出する壊れた涙腺……。レイはすっかり「ノーアイズ」という怪物に成り果ててしまっていた。

レイは野太い奇声を上げてそこらに唾液を撒き散らすと、再びジョンに飛びかかっていった。

上体を起こしたジョンはそれに反応し、飛びかかってきたレイ目がけてコルトパイソンを撃った。

だが、引き金を引いたのより、レイの手が届く方が先だった。弾丸はあさつての方向に飛んでいき、レイの手はがっしりとジョンの頭を掴み、引き倒した。

「がっ……!!」ジョンの後頭部は地面の硬いアスファルトに酷く打ちつけられた。視界に一瞬大きな火花が散った。そして次の瞬間にはレイが仰向けになったジョンの腹の上に跨り乗っていた。馬乗りだ。

酷い臭いの唾液がジョンの顔に降り懸かる。吐き気がこみ上げたが、堪えた。紫色をしたレイの長い舌が不規則に揺れている。

だがジョンには今、抗う術はなかった。いくら振り解こうとしてもがいてもレイの体はびくともせず、手に持っていたコルトパイソンも先程の衝撃で2メートル先まで弾き飛ばされていた。

何も出来ない。動けない。

万事休す。

ジョンの目の前で大量の唾液を引きながらレイは大きく口を開けた。口内は鋭利な腐った牙で一面覆い尽くされ、その森の奥では奈落の様な闇が渦巻いていた。

そしてその牙はジョンの目を抉り取ろうとしていた――

「このっ！！」ならせめて、とジョンは拳を握りしめ、力一杯レイの頬を殴り付けた。

怯むレイ。だがそのパンチをもらいながらも、自身も拳を返していた。

レイのパンチがジョンの顔面に直撃した。

途端口の中に鉄の味が充満し、口から血を撒き散らした。

ジョンは口から残った血を吐き出すと、再度殴った。

が、かわされた。逆に貰ってしまった。

脳が揺れた。視界がぼやけた。頭に針を刺したような痛みが襲う。レイはついにジョンの目玉を喰いつきにかかった。ジョンの視界に鈍く艶がかった牙が迫る。

「あああああ！！！」ジョンはレイの頭を懸命に押さえた。

想像以上に凄い力だ。ジョンが徐々に押し負けていく。それに比例して頭が朦朧としていく。立て続けに脳を揺さぶられ過ぎた。それに従って、どんどん腕の押す力も弱くなっていく。

レイの腐臭がかった荒い吐息がジョンの顔面に容赦無く降り懸かる。それ程までにレイの口は近づいていた。

知も無く理性も無いそんな醜い狂った顔をレイは晒けていた。

第六章「瞑想」 7

腕も限界に近かった。

まずい。

このまま行けば、秒もかからずに喰われてしまう…！！

レイの口がさらに大きく蛇の様に開いた…

その時。

「ジョン！！」

ボブが慌てて何かをジョンの手元に投げた。

S & amp; W。ボブの予備携行していたハンドガン。それが投げ超越された。

Thank you！！恩に着るぜ！！

ジョンはとつさにそれを拾うと、すぐさまレイの頭に銃口をあてがい、撃った。

レイは大きく仰け反った。

だが、弾は脇のパトカーのドアに打ち込まれた。避けられたのだ。

なんて反射神経だ…！

…だが…。

大きく仰け反ったその体勢で次の弾はどうやって避けるんだ？

ジョンはS & amp; Wを真正面に構え、再度撃った。

レイの体がジョンの体を離れた。

宙を舞った後、無抵抗に地に落ちる。

が、直後レイはまるで何もなかったかの様に立ち上がった。

こいつ…飛び上がりやがったな…！返り血一滴浴びていない自分の体を見てジョンは思った。

何故これ程まで避けられるんだ？！

仕切直した。レイはまたゆらゆらと体を揺らし始めた。

「…ジョン！」

「何だ？」突如後ろからたくましい声が聞こえた。ジョンは振り返るとそこにはボブが立っていた。

「ジャニスのサポートをしてくれ！あんたのハンドガンやマグナムより俺のショットガンの散弾の方が当たり易いと思う！選手交代だ！」ボブはそう叫んで、強引にジョンを引っ張り、退かせると、早速ショットガンが吠えた。広域に広がっていく細かな弾丸が10メートル先のレイの体の数力所に埋め込まれた。

吹っ飛ぶレイの体はその先の宝石店のガラスを派手にぶち破り、その店の床を転がった。

コッキングするボブ。そして、サングラスをかけた。「俺に任せてくれ。絶対戻って来る。」

「…わかった。死ぬなよな。」

「おうよ！」ボブは最後に笑顔でそう答えると、レイのいる、廃墟と化した宝石店へと駆け込んでいった。

第六章「瞑想」 9

「出てこいよ、レイー！」ボブは宝石店の前に立つと、叫んだ。もちろん返事はない。しかし、物音一つもしない。

死んだのか…？いや、息を潜めているのだろう。散弾が当たったにしろ、少し距離が遠すぎた。

グリップを握り締め、深呼吸をし、ガラスの割れた所から店内へ侵入した。

強烈な闇が店内を支配していた。ショーケースのダイヤモンドのネックレス光り輝くことなく闇に吞まれてしまっている。ボブの視界はショットガンのサーチライトの小さい光の円のみ。

耳を澄まして、外にいるジョン達の銃声が微かに響いてくるだけだ。

どこだ？本当にどこから現れるか分からない。いつ襲ってくるか知れない。

ハハ、プレデターかよ。光学テクノロジーで姿眩まされてるんじゃないか？

足を一歩踏み出すと、ピチャリと液の音がした。見ると、床に重油のように真つ黒な血溜まりが出来ており、何か引きずったような跡が店の奥に続いていた。

血の跡を追い、闇の中を進む。一步進むごとに埃が舞う、心臓が跳ねる。

落ち着け。落ち着け。出て来たら撃つだけだ。引き金を引くだけだ。止めを刺すだけだ。簡単なことだ。

だが、一体何なんだ？この胸騒ぎは…？

それから何歩か進むと突然

血痕が途切れた。

一瞬、何が起こったかさっぱり分からなかった。

指標の足跡が魔法の様に消えて無くなってしまっていたのだ。

頭が機械のように熱処理を要求するほどに混乱した。

脳の炎上。膨大な数繰り返される無意味な演算が脳細胞を灼き切っていく。

背中に激痛が走り、勢い良く吹っ飛ばされるまで脳味噌がフリーズしていた。

逆に言うと、事の全てを悟れたのはそれからだった。

「止め足」だ。

クソッ！！しくじった。

ヒグマの常套作戦じゃねえかよ！！

「止め足」。

己の命を狙って追跡する獵師を殺す為のヒグマの技。茂みのある適当な所で歩を止めて、今までに作ってきた足跡をそっくりそのまま踏みつつ後退し、茂みの中に隠れる。すると、後からやってきた獵師達からは足跡が突然消えたように見えるが、ヒグマはすぐ隣の茂みの中にいる。獵師が動揺した隙を見て、ヒグマは茂みからいきなり現れ、脳天に一撃。瞬殺。という寸法だ。

それが今、再現されたのだ。

ショーケースに叩き付けられるボブの体。ショーケースのガラスが割れ、そのガラス片が体中を突き刺した。

一瞬で無数のガラス片で全身ハリネズミにされたが、一番痛烈だったのは、右足だ。靴の先が明後日の方向に向いている。その激痛は殆ど麻痺に近い、熱がこもったような痛みだった。

くそっ！！俺は何をされたんだ？！

足の方にはそんなにガラスは刺さってねえぞ…

あ、足がマリオネットみたいにひん曲がってらあ。

ハハハハハハハ！！

畜生！！

彼の右足は大胆に、極めて分かりやすく骨折していた。

関節のないところで足は有り得ない方向に折れ曲がり、骨の断面が皮膚を突き破ってむき出しになっている。そこから血が心臓の動きのリズムに合わせて、注射機から出る薬の様に噴出している。

みるみる青黒く腫れていく患部。

焦燥感と戸惑いが彼の心中を支配した。

何だこれ、本当に俺の体か？まるでオモチャじゃねえかよ。

そうこうしてる内に再びレイが眼前へと迫り始めた。

ボブはショットガンを構えようとしたが、手元にあるはずが、いつの間にか消えていた。

ショットガンは遙か3メートル先に転がっていた。

普通ならそこに手が届くのは造作無い事だが、右足が折れているボブにとってはその僅かな距離が何十キロの彼方の様に思えた。立っているのがやっとだ。もう右足は使えない。

ショットガンを諦め、予備携行のS & amp; Wを探す。確かジャンパーの内側に…！

だが、探してからすぐ気が付いた。
ジョンに貸したままだ…

まずい。

さあどうする？

何も反撃する術がない。

ならせめて避ける！！

ボブはその場にしゃがむつもりが、尻餅を付いてしまった。しかし、その直後に来たレイの拳はしっかりと、おぞましい音を立てて空を切った。

空気を斬り裂く音がボブの鼓膜にまで届いた。

あんなの当たったら即死じゃねえか…

ボブは胸震いした。

もうこいつはレイであってレイじゃない。

マジで殺られる…！

レイは尻餅をついたボブの方を向き直した。ほくそ笑み、零れた唾液がボブの胸に垂れる。

「おい、レイ。」伝わる筈がないと分かっているながらもボブの口はそう動いた。「分かるだろ？レイ。俺だよ、俺。ボブだよ。忘れちまった…のか…ッ？！」話の途中で首もとを掴まれた。

持ち上がっていく俺の体。それに息苦しさが比例して増していく。かつての戦友に喰われる…。絶望的な気分だ。

「糞つタレめ…！！」今、肺の最後の残り滓が出た。

肺が強烈に酸素をせがむ。それに伴って激痛が走る。レイの握力が完全に気道を塞いでいた。

だんだん意識が遠のいていく…。昇天まではもう秒読みだ。そしてその直後。

2発の銃声が鳴ったと思ったと同時にボブは苦しみから乱暴に解放された。

一瞬の出来事だった。先程の苦しみの解放を、この世との離別と錯覚した。だが、レイの手が離れ、床に倒れ込んだ衝撃で一気に醒めた。

倒れ込んでから激しく咳込みをするボブ。瀕死の肺がたった今蘇生した。霧がかかったみたいに朦朧としていた頭の中が次第に鮮明さを取り戻す。

見ると、ショットガンに手が届くようになっていた。

乱暴に首締めから解放され、その後二転三転床を転がったからであらう。

ラッキーだ。ジョン、Thank you!!

ボブはショットガンを拾い上げた。そして2発の銃撃で完全によりめいていたレイの腹目掛けてそれを撃った。ボブが大量の返り血を浴びると同時に、レイの体は大きく吹っ飛んだ。

レイの体は先程のガラス窓から再び弾き飛ばされた。力なく転がり、止まった。だが、まだ辛うじて立ち上がろうとする。

しかし、ボブを助けたあの銃声がそれを許さなかった。

銃弾がレイの足を挟り、腹を貫き、頭を砕くと自らの血の海のまどろみの中、彼は息絶えた。

「だらしないですねえ……」声がした。明らかに聞き馴染みのある声だったが、ジョンのような明瞭な声ではなく、何か癪に障るような、厭に抑揚がついた声だった。

ボブは声のした方を振り向いた。

そこにはミシエルが立っていた。

「貴方、怪我しているようですが、何かへマでもしでかしましたか……？」

「五月蠅えよ……クソキザ。……よく帰ってきたよ」再会。一瞬、ボブの頬が自然に綻んだ。

一方、ジョンとジャニスは店の前で、強化されたノーアイズとの攻防を行っていた。

高速接近するノーアイズを一体一体確実に殺していく。口で言うのは簡単だが、実際これはかなり神経をすり減らす作業だ。

一発で仕止め損ねたら次を撃つまでに軽く4、5メートルは距離を縮められる。もしもそこで弾切れとなったならば……

「ジャニス、代わってくれ!!」

「OK!!」ジョンはシリンダーの中の最後の一発を撃つと、ジャニスと入れ替わった。

ジャニスは答えると、ジョンをかばうようにして動きながら、近付いてくるノーアイズを撃ち始めた。正面のノーアイズの頭を西瓜の如くかち割ると、すぐ振り返って背面にいたノーアイズを撃つ。

ブルが迫ってきた。ジャニスはそれに一瞥すると、言った。「バトンタッチ。」

「任せろ!」その瞬間、コルトパイソンが火を噴き、ブルの首をその弾が貫いた。

2人は入れ替わり交互で射撃する手段に出たのだった。

一方が装填している間に一方が撃ち、装填が終わったら交代する。装填していた者が撃ち、撃っていた者が装填を行う。

これで、2人同時に弾切れを起こす心配はないが、あくまでリロードの問題を解決しただけである。

当然、撃ち方が減る。

よって一発一発、神経を切っ先まで尖らせてワンショット・キルを狙う。

今のところ上手くいっているが、じきに崩れていくだろう。数が多すぎた。

ジョンが撃つ、撃つ。

撃つ度にノーアイズの頭が爆発で爆散していく。変わった西瓜割りだ。ジョンの頬が飛んできた頭蓋骨の一片を弾いた。

やがて弾が尽きた。引き金を引くが、シリンダーが回るだけで弾は出ない。弾切れだ。

交代しなければならない。今度は俺が装填する番だ。

「ジャニス、交代だ！！撃ち込んでやれ！！」

「ちよ、ちよっと待って！！…出来た！！OK！！」

少し遅れたが、許容範囲。ジョンはそれを気にも留めず、シリンドーに弾を詰め始めた。

それと同時にジャニスが撃った。散弾がノーアイズの軀のあらゆる箇所を吹き飛ばしていくが。

「ジョン、交代！！」

「何？！」

予想外の出来事に手元が狂った。弾丸がジョンの手から滑り落ちた。

早い。弾切れが早い。装填に取りかかってからまだ僅かな時間しか経っていない。

クソっ！！

ジョンは手から滑った銃弾は無視し、五発入ったシリンドーをコルトパイソンの銃身にセットした。

銃から顔を上げ、前を見た。

すぐそこには、ノーアイズの豪雨が展開されていた。あらゆる場所、方角から猛スピードで一直線にこちらにやって来る。雨が軀を叩き付けるように。

「クソっ！！」ジョンは取り合えず、接近してくる最寄りのノーアイズ達に発砲した。

一発目。

正面のノーアイズの脳髓が大量の血液と共に飛散した。

二発目。

正面から少し右寄りから駆けてきたノーアイズ。腹部が一気に吹き飛んで、艶めいた不気味な内臓を晒す。

振り返って後ろ。

ブルが口元を皺くちやに寄せて、こちらへ向かってきているのが見えた。

間髪入れず三発目。

鎖骨の辺りを爆破して胴と頭部を切り離す。

四発目はちょうど左から迫っていたノーアイズ。かなり距離が縮まっていた。5、6メートルくらいか。

だが、すぐに首から上が肉塊と化し、残った四肢と胴は地面を何度かバウンドしてようやく止まった。

五発目は目と鼻の先の距離にまで接近したブルだ。すでに飛びかかって奈落の大口を開けていた。

とっさにジョンが体を擦ったと同時に、顔のすぐ横をブルの体が通り過ぎた。

ブルは着地するとジャンスの方を向き、長い紫の舌を揺らした。だが、そいつが駆け出したと同時にジョンはその頭をぶち抜いた。ブルは吠える間もなく息絶えた。

これで5発目。つまり今、シリンダーは空だ。

「ジャンス！！」呼んだ。交代だ。だが…

「ちよつと、早すぎよ！！まだ私、二発しか入れてない！！」

それもその筈。先程交代してから三秒たりとも経っていないのだから。

「ああ、クソ！！もついい！！そのまま撃つてくれ！！」

ジョンは心底、焦った。手汗と恐怖からの震えで手元が狂う。シリンダーに弾を入れるのに何度も失敗する。

「ジョン！！」

心臓が跳ねた。ジャンスの声が急に地下鉄の停車音の様な甲高いものに聞こえた。

「早く！！すぐそこまで来てる！！」

この間で、シリンダーに入れられたのはたった一発のみ。

ジョンはその頼りなく心細いシリンダーを銃身にセットすると、前を向き、構えた。

地獄を見た。

目の前で数えきれないほどの数のノーアイズが群を成し、狂った叫び声を喚き散らしながら、雪崩のように突っ込んでくる。ノーアイズが白濁色の壁となって押し寄せる。しかも尋常ではないスピードでだ。弾一発で何が出来るか。何も出来ない。いや、出来る。

自殺だ。今すぐこめかみでも喉元でも何でも撃つてしまえば一瞬の苦痛だけで事にけりがつく。

しかし、ジョンはそれを潔しとはしなかった。まず、彼はレジスタンスの隊長として死にたかった。自分の指揮で敵味方双方の肉塊の山を築き上げ、自分だけ自殺で簡単に死のうとは彼は毛頭思わなかった。

そして、隣にはジャニスがいる。絶望に泣き喚きながらショットガンの弾薬を一発、また一発と装填している。彼女を何としても生かしてやりたかった。

何故か。彼、ジョン・ターウィルガーは彼女、ジャニス・ターウィルガーを心の底から愛しているからだ。

突如、ジョンの脳裏で死の走馬燈が乱暴に繰り広げられた。

第六章「瞑想」 23

だが、その走馬燈は一瞬でガラス細工のように崩壊し、微塵も残らず消え去った。

いや、彼自身が打ち壊したのだ。

まだ死ねるかよ。

俺はまだ戦える。

撃った。

そして、

ブッシュナイフを片手に持って群の中に突っ込んだ。

「ジョン！！嫌アアアアアアアア！！！！！！」ジャニスは泣き崩れた。力の限り名を叫んだ。

しかし、彼は戻ってこない。

「ああああああああ！！！！！！」弾を込める手に力が入った。早くジョンを助けなければ！！

一発、二発、三発。コッキング。

無限に折り重なる悲鳴の畜生に向けてショットガンを構えた。

だが、

気が付くと、そのショットガンがいつの間にか吹っ飛んでいた。

見ると、トリガーに指を掛けていた右手に大きな風穴が開いていた。

ジャニスがそれを認識したと同時に遙か遠くから醜惡な雄叫びが轟いてきた。

「ああ、駄目ですよ。そんな事をしては……」すると、声がした。どこかで聞いた事のある声。持ち主の姿はもうわかった。だが、この声を殺意が沸く程憎らしく思えたのはこれで初めてだ。

ミシエル・ドラクロア……

「彼はここで死ななければならぬのですよ」ミシエルが頬肉を醜く引きつらせながら近づいて来た。彼の右手には銃口から煙を上げたベレッタが握られていた。

そのベレッタが貫いたジャニスの掌からは止めどなく血が溢れ、衝撃で痺れ、動かない。「貴方何のつもりよ!!」

「黙れ」

銃声が響いた。ベレッタから再び放たれた銃弾はジャニスの右肩肉を抉り飛ばした。

絶息した。掻き乱される頭の中。一体何がどうなっている？何故私は仲間に殺されないといけない？

そんな疑問を痺れるような激痛がさらに混沌とさせる。

簡略化されていく疑問。脳が狂って単純計算ばかり繰り返す。

生、死、生、死、生、死。十億字敷き詰められた巨大パノラマ。

ミシエルの頭部を一瞬で炎が包み込み、被弾の衝撃が彼の死に体を地面に叩きつけた。

「ジョーン！」ジャニスは歓喜の叫び声を上げたが、辺りには彼の姿はなかった。代わりに見知らぬ男が立っていた。

その男はワルサーPKSを持った、サングラスをかけたアフロの黒人だった。彼が着ているアロハシャツは赤い血でまみれていた。

「…ミシエル…。」黒人は呟いた。「まだ立てるんやろ…?!」生きてる筈がない。ジャニスは思った。

頭を撃ち抜かれたのよ? しかもグレネード弾で。ノーアイズでも死ぬわ。バカげている。

だが、次の瞬間、ジャニスのそれが一気に覆された。

「…マイケル…何故貴方がここにいますか?!」怒りがこもった、あの忌々しい声が既にただの肉袋と化した筈の肉体から聞こえてきた。そしてそれはゆっくりと立ち上がる。その顔面からは何故か無数のゼンマイやネジが転がり落ち、千切られた、色とりどりの配線コードの Pasta が鋼鉄の皮膚から突き出していた。

「アンタ、やっぱり化物やったか…!」

「ハ…ハハ…ハ…！」それを聞いたミシエルは突如、笑いだした。「そうだ、そうだとも、マイケル！俺は真正正銘、化物だ」

腹を抱えて笑いだした彼をマイケルはまた撃った。シリンドーが空になるまで撃ち続けた。ミシエルの体のあちこちでグレネード弾が炸裂し、彼の本当の意味での化けの皮を剥いでいく。その度に彼の体は大きく吹き飛ばされるが、ことごとく立ち上がる。

ワルサーの銃身から、乾いた、空虚な音がカチリと響いた。弾切れだ。マイケルは舌打ちをすると、素早くローダーで弾を詰め替えた。

「…そのレディ」マイケルは言った。

「…何…？」

「ジョンとやらを助けに行くんやろ？ここは俺に任せ。」

「で…でも…！」戸惑うジャニス。マイケルは優しく彼女の手を取った。

「頼む…俺アどうしてもあの狂ったサイボーグとのケリをつけないねん…行ってくれ…」

その時。

突如、銃声が響いた。

ミシエルのベレッタだ。

「なああああああ？！」銃弾はマイケルの左脇腹に深く突き刺さり、腸を破いた。

不意の激痛に身を振るマイケル。銃創に手を触れ、見てみると、その手は真紅で染まっていた。

「んの…キチガイ野郎が…!!」不意に撃たれたマイケル。ミシエルを睨む顔は苦悶と驚愕と噴き出す汗でグチャグチャだ。「マナ―ちゅうもんがあるやろ…腐れ外道が…!!」

「マナー…か。戦闘中に雑談する手前が悪い」ミシエルはそう言っ
て、また銃口をこちらへ向けてきた。

「早く行け!!」マイケルが吠えると同時にだった。

「らああああああああ!!」先程のノーアイズの群れから絶叫が木霊した。ジョンの声だった。彼はまだ生きている。ジャ
ニスはショットガンを握る手を固め、群れへと駆け出した。

次の瞬間、ミシエルのベレッタが吠えた。とっさにマイケルが乗
り捨てられた隣のトラックの陰に飛び込む。

すると、銃弾は彼の体を皮一枚で掠めていき、最後の一発はトラ
ック記載されたコンテナで跳弾し、地のアスファルトで火花を上げ
た。

トラックの陰のマイケルは一呼吸ついた。撃たれたわき腹が酷く
痛む。小腸がその銃創から外界へ出ようとせめいでいるのがわかる。

クソ…血イ出過ぎや…！まともに動けるのはせいぜい二、三分か…？

「どうした？逃げか？」ミシエルの声が急に無機質なものに聞こえた。「まあ、いいさ…。じきにお前達は皆、死ぬ事になるんだからな…」

ミシエルは不遜に一通り笑うと、一言呟いた。

「フェーズ36、発令。」

マイケルは一瞬、片言隻句のその言葉の意味を思案したが、何も分からなかった。

その混乱を引き裂いたのが、群がるノーアイズ達の絶叫だった。

怪物共が突如として一匹残らず奇声を上げながら地面でのたうち回りだしたのだ。不規則に痙攣を繰り返す体。その姿は末期の精神異常患者を連想させた。

「キサマ何をやったんや！！」

「ただの命令だ。」その声はノーアイズ達の断末魔の叫び声を一方的に斬り裂いて、聞こえてきた。

「コア・ビルっていうのは知っているか？」

ああ、知っているとさ。世界をどん底に突き落とした怪物を生み出した研究施設だろ…?!

痛い程に歯ざしりしたマイケルにミシエルは続けた。「あそこはな、研究施設兼ノーアイズを操作するための電波塔だ。俺はな、それに電波を送る発信機なんだよ。つまり、ノーアイズは俺の思うがままなのさ」

戦慄が走った。じゃあさっき何をしたんや?!

未だ地でもかくノーアイズ。そこから何が起こるか想像がつかない。

どっちを先に始末する?!ノーアイズか、ミシエルか…?

マイケルは迷い無く後者を選んだ。

ノーアイズが電波を受けているのならその電波を乱したらいい。

だが、マイケルの思考はそこで行き詰まる。

どうやってミシエルを殺すんだ…?!

いくら考えても何も思い浮かばない。

鋼鉄の身体。こちらの攻撃は一切合切効かない。

……ああ、畜生……。

儘や！糞っ垂れ！！

マイケルはトラックの陰から飛び出した。その瞬間、ベレッタが火を噴いたが、奇跡的に弾丸は当たることにはなかった。その間に飛び出した勢いでスライディングをしながら、ワルサーを撃つ。放たれた二発のグレネード弾。一発目はミシエルの胸部、二発目は眉間へ、吸い込まれるようにして飛んでいった。

直後、二つの炸裂花火が轟音を立ててミシエルの身体を吹き払った。

四、五メートル吹っ飛び、地を転がった後、うつ伏せで止まる。が、すぐに顔を上げてきた。

その顔面にも一発。爆炎はミシエルの頭部を丸ごと包み込む。

「ミシエル！！」マイケルは叫んだ。「お前は手前の仲間を殺したんや！！マックスもロバートも！！お前は糞みたいな野郎や！！」

そして、マイケルは倒れたミシエルに向かって走り出した。「地獄で肥溜めの中にも頭突っ込んでけ！！」

マイケルは止めに入った。

この銃弾で死ぬかどうかは分からないが、仮にまた起き上がってきたとしても、その時は頭を無理矢理引き千切ってやる。

威勢よく言ったものの、威勢よく行ったものの、かなり分が悪い賭けだという事はマイケルは自負していた。しかもかなり分の悪い賭けだ。だがその逆を返せば、どんなに分が悪くとも、こちらにも機はあるという事だ。マイケルはワルサーのグリップを、手汗で滑らないようにがちりと握った。

死ぬのは怖い。しかし彼の中では、ミシェルへの怒りの方に天秤が傾いている。

マイケルは今、激怒している。

12月27日午前2時6分。

ロバートの死の直後の事だ。

ミシエルが号泣しながら包丁を床に叩きつけた。

まさかー！

マックスはロバートの顔を覗いた。

ロバートの顔からは生氣が失われており、瞼は深々と閉じられていた。

「あ……」震える指でロバートの首筋に触れる。

脈がない。冷たくなったロバートの身体がマックスに全てを悟らせた。

死んだー

ミシエルが出目金のように大きく目玉をひんむいて普段の冷静な様子からは想像がつかないような大絶叫を上げた。

「あああああああ！！！！また俺が殺したんだ！！！！また俺が殺したんだあああああ！！！！」そう連呼するミシエルは、駄々をこねる子供の如く、床の上をのたうち回る。

異様な光景に後ずさるマックス。しかしその時、マイケルは恐怖に支配された頭の隅で

おかしい。

と疑問を抱いていた。

なぜ止血帯法をしたのに血が止まらなかった？あまりにもあつさり過ぎんか？！まさか……？！

思ったときには既にマックスは殺されていた。床に臭い脳髓をぶちまけて。ベレッタの弾丸が彼の額を一貫したのだ。

「やれやれ、小指を持って行かれたのは不覚でしたね……。」「ミシエルは独り言をぶつくさ呟きながら、無くなった小指の痕を見た。しかし、そこから出る筈の血は噴き出すどころか滴りもしない。

マイケルはとっさにロバートの腐敗した右腕を見た。腕はズタズタに引き裂かれており、上腕の方は肉が抉り出されている。筋肉の束が血の滴を垂らし、静かに二の腕からぶら下がっていた。

「なあ、ミシエル。これがアンタが言う『治療』か……？！……殺したな！！」

「まあ、そうですね。彼はもう用済みでしたので。」彼の微笑みから異様な冷たさが感じられた。まるで人間ではないような……

そうだ。悪魔だ。

「地獄に墜ちいや！！」マイケルは懷からワルサーを抜いた。

だがその前に、腹に二発撃ち込まれた。ベレッタの轟声が連続して二度響いた。

崩れ落ち、悶え狂うマイケル。血の海は徐々に広がり、それに伴って意識も次第に遠ざかっていく。汗を垂らし、歯を食いしばって耐える。唇の隙間から嗚咽の音を漏らす。

「まあ、その銃創ではもって8分ですかね」悶えるマイケルを見下すミシエル。落ちたワルサーを、マイケルが拾わないように蹴って壁に寄せる。「そこでもがいていれば直、天使が迎えに来ることでしょう。」

ミシエルは微笑むと、マイケルを背にし、部屋のドアノブに手を掛けた。

「この度は私を匿って下さって本当に有り難う御座いました。今からレジスタンスを……いや、世界を滅ぼしてきます。では、さようなら。」

ミシエルが部屋から退場した。

静寂が部屋を包む。

本棚の横にはロバートの死体。

部屋の中央の黄色いカーペットの上にはマックスの死体。

その近くで横たわっている瀕死のマイケル。

静寂の中、マイケルの苦悶の呻き声が木霊する……

アイツは仲間に手を掛けやがった。今度はこつちが殺す番や！

マイケルはミシエルの後頭部に1発撃った。爆発音の後、彼の脳髓が灼け焦げた匂いがした。

立て続けに2発目、3発目、4発目。撃つ度に、ミシエルの身体が不気味に痙攣する。爆炎が街路樹に燃え移り、乾いた音を立てて燃えだした。

無人のニューヨークの暗闇に光る灯火は復讐の炎だった。

炎は他の街路樹を浸食し、一気に勢いを増す。冬の北風により、炎中から舞い上がった火の粉が縦横無尽に吹き荒れる。

6発目を撃つと弾切れになった。カチリカチリと情けない音が響く。だが、マイケルの腰には愛銃ワルサーの予備ローダーが山ほどぶら下がっている。彼は冷静にその中のひとつを抜くと、瞬時にシリンドーを換え、また撃った。

ミシエルの頭を抉りまくるワルサーの弾。爆風と共に彼の部品達が弾け飛んでいく。

マイケルは嗤った。不意に腹の底から失望と憤怒が何か訳の分らぬ物に変換され、喉仏からせり上がって来たのだ。

「おら、鉄くず野郎！！死ねや！！死ねや！！」

声が震えた。心の臓腑に蓄積していた憎悪がミシエルの頭蓋に突き刺さり、爆ぜる。

業炎はすっかり二人を包み込み、彼らの傍観者として激しく揺れ動く。

黒煙が肺を焼く。煉獄の炎が肌身を焦がす。

「死ねや！！死ねや！！死ねや！！死ねや！！」マイケルの叫び声も、燃え盛る炎の轟音で掻き消される。

弾が尽きる。装填。撃つ。撃つ。撃つ。

ミシエルはもう動かない。

が、この時、炎の中で蠢く者が。

ノーアイズだ。

自身に纏わりつく炎を掻いて、ワルサーを撃ち続けるマイケルの肩に掴み掛かった。

ついに目覚めやがった。

糞ったれ！！

マイケルは自身を後方に引つ張ろうとするノーアイズの腕を強引に振り払い、振り向き様に一発撃った。

弾丸はノーアイズの額に直撃し、爆音と共にその肉を削ぎ落とした。

筈だった。

腐った脳髓を撒き散らし、漆黒の血飛沫を上げて地に伏す筈のそのノーアイズには傷一つ付いていない爆発の榴弾痕も一切見当たらない。

そう、全くの無傷。

よろけた様子も、たじろぐ様子も全くない。
それどころか、左肩に何やら痛みを感じる。
見る。

何ということだ。

肩から先が無いじゃないか。

濁流のように流れ落ちる大量の血を目の当たりにすると、意識が遠のいた。

だが歯を食い縛り、これを耐えた。

まだや。まだ俺は死ねへん！！

マイケルは千鳥足で後退し、追撃を試みるそのノーアイズの額目掛けて、ワルサーの引き金を引いた

第六章「瞑想」

次の瞬間、マイケルの鳩尾で爆発音が轟いた。

理解不能だった。

「あああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！！！！！」

不意に前を見た。

そして今気付いた。

何処へ行った。

分かつた。

「カハツ、カハツ、カハハツ、カハハハハハハハ。。。」不
気味に響く笑い声が聞こえた。

「惜しかった。実に惜しかった。あと何千発か撃ち込んだらお前は勝っていた。惜しかった。」マイケルの目の前に体中から軋みを上げる化物が近づく。

「俺を一撃で葬りたいならば次は88m^{アハトアハト}を用意してこい。今のノーマイズもだ。俺達はもうウージーを何千発撃たれようが、拳銃を何万発撃たれようが決して死なない。過ぎる程に頑丈なのだ。今まで俺は電波圏外に居たから思うように力を出せなかったが、ニューヨークに足を踏み入れた今、街中のノーマイズ全てが私の思うが儘になったのだ。行動、進化、繁殖等、あらゆる行為を操作し、俺の私兵、軍隊とする事が出来る。やろうと思えば銃を持たせ、陣列を組ませ、マーチする事も出来る。………今まで眼球をむさぼり喰らう事しか頭に無かった化物共が突如、殺戮機械^{キリング・マシーン}へと変貌する………面白いだろっ？」

しかし、ミシエルの語りを聞く者は誰も居なかった。

ミシエルは熱処理という名の溜息を一つつくと、マイケルの死体を後にし、炎の壁の中へ身を投じた。

当然、火中何も感じるものはない。ただ、少し内部熱が上昇しただけだ。大した事はない。

炎の壁を抜けるとそこには何十体かのノーアイズがわらわらと群を成していた。

ミシエルはまた溜息をつくと、念じた。

（退け、お前達）

すると、群を成していたノーアイズは忽ち廃ビルの中へと姿を消した。

その群れに置き去りにされたのは二つ。

ジョンとジャニスの死体だ。

それらは道路の固いアスファルトの上に重なり合うように横たわり、大きな血溜まりを作っている。

面白いものを見つけた。ジョンの上に被さっているジャニスの頭骸が不自然にひしゃげていた。喰われ死んだジョンの後を追ったという寸法か？彼女の得物はショットガンだったから頭が歪に歪んでいても何等おかしくない。

……ここでミシエルにダークネスからの通信が来た。

微かなノイズがつんざいた後、声が聞こえた。

――06号。応答を願います。

その声はダークネス、ミシエル・ドラクロアのものだった。ダークネスは自身と同じ体駆のマシンを作り出し、街の偵察に当たっていたのだ。その内の一機、06号機は任務中に故障（発狂）し、通信網の届かない圏外へ姿を消してしまったのだった。それが今、帰ってきたのだ。

（はい、こちら06号機です。どうぞ。）

――帰還おめでとう御座います。さて、どうやら反乱分子がいたようですが、そちらの方は如何なさいましたか？

反乱分子。ああ、私が帰還を遂げるために使ったあの畜生共の事か。

（下衆共は全員排除してやりましたよ。今そこで転がってます。）

06号はジョンとジャニスの死体を一瞥した。

しかし、

そこにある筈のジョンの死体が消えていた。

第六章「瞑想」 43

……まあせいぜい、ノーアイズにでもなったのだろう。後で処理をしておこうか……。

――そうですか。では引き続き任務を遂行して下さい。貴方には失踪した25日間分のツケがあるのですから……。

（わかりました。通信をせ……）

――どうしました？

それはあまりに突然過ぎる、最後の復讐劇の幕開けだった。

（……ぎゃああああああああああああああああああ……！！）

――応答を！！6号機、応答を願います！！

しかしその一瞬後、強制的に通信が切断された。五月蠅いノイズがつんざいた。

「……糞。」ミシエルは通信機を静かに目の前の長机に置いた。

コア・ビル122階、自室。自室と言っても、ただっ広い空間にただ一つの長机のあるだけの部屋だが、その異様な光景からは何故かどこから荘厳な匂いが感じられる。その部屋に、ダークネス、ミシエル・ドラクロアは世界を見降ろし一人佇んでいた。

「……最近だ。最近になってから特異個体が増えてきている……」
ミシエルは長机の椅子に腰かけた。「何故だ……、私は何を間違えた？ノーアイズの何処を間違えた？」

まあいい……。

ミシエルは口元を僅かに歪ませた。

その瞬間、部屋の南の壁を覆い尽くす無数の巨大なガラス窓が響いた。

その響きが、ミシエルの耳に微かながらだが伝わった。

最終兵器「Bigger」の咆哮。

その咆哮を聞き届けた瞬間、彼の胸が歓喜と狂喜で満ち満ちた。

「今から特異個体の駆逐を始めようか。決して私の計画の邪魔はさせん。」

第七章「煉獄」 1

腐敗したタイムズスクエアのと真ん中で、ジョンは立っていた。足元にはミシエルの残骸が散らばっており、その頭部はごろりと転がっていた。

どうやら自分がミシエルの頭を引き抜いたらしい。

そう自覚したのは彼が自分の身体の惨状を目の当たりにしてからだった。

何故だ、何故俺の腕が白くなっている？まるでノーアイズの……いや、ノーアイズそのものだ。

俺は死んだのか？

いや、生きている。ちゃんと自我の意識が判るし、手足が動く感覚もある。それに胸が鼓動を打っている。俺は生きている。

じゃあ何故生きている？急に強くなったノーアイズに左目を抉り抜かれた事は覚えている。だが記憶はそこまでしかない……。

成る程、俺は今ノーアイズとなって生きている、という事は分かった。

だがそれだけでは他は何の理解も得られない。

他のノーアイズ達も俺と同様に意識があるのか？

レイは俺と同類だったのか？

そうしてその他の疑問が延々と幾重にも積み重なり、様々な思考が絡み合っていくと、結局ただ一つの疑問が胸の懷に大きく塞がる事となった。

ノーアイズとは一体何？

第七章「煉獄」 2

ノーアイズとは何？

この問いには一応は答える事が出来る。

哺乳類の眼球を貪り喰らい、それで繁殖を行う、進化する化け物

……。

しかし、その奥の事はなんちゃ分らない。

自分が持っている知識はほんの一握りではないのか？

……。行こう。

俺はまだ生きている。この事実は何も変わらない。

ならばダークネスを倒す。この身が怪物になり果ててもだ。

それに……。

ジャニスが死んでしまった。俺との心中という形でだ。

すまない。俺はまだ生きている。

この闘いが終わったらすぐお前の元へ行く。待ってる。

第七章「煉獄」 3

ジョンは五百メートル先にそびえ立つコア・ビルを見上げた。淀んだ闇に立ち誇るダークタワー。俺はもうガンスリンガーじゃなくなったが、行つてやる。ダークネスを絶対殺してみせる。

ジョンは煮えるほどの怒りに唇を噛みしめると、コア・ビルに向かって走り出した。

体が軽い。一度地を蹴ると、一気に体が風のように舞う。

体中に力がみなぎっている。試しに車に正拳突きを入れると、固めた拳がフレームを貫通してしまった。

これがノーアイズの力か……！別に賛美しているわけじゃないが俺は驚愕した。

そのまま走っていると、やがて何体かのノーアイズがこちらに牙を向けて並走し始めた。どうやら自分を敵視しているようだ。身はノーアイズとなっても立場は変わらないらしい。

俺は止まった。すると並走していたノーアイズ達も止まり、次の瞬間それらは俺に向かって一斉に飛びかかってきた。

第七章「煉獄」 4

糞、やっぱり来やがったか！

これを横に飛んで避ける。しかし、地面を蹴った力が強すぎて予想以上に大きく飛んでしまった。ノーアイズ達からどんどん遠ざかり、気が付くと、奴等から数十メートル離れたところで止まった。

マジかよ……！

ジョンは驚愕の鳴咽を漏らした。自分の力を巧く制御出来ない。そうしている間にノーアイズ達は最早ジョンに追いついてきた。

このままじゃ埒が開かない。何かしら手を出してみるか……？！

再び襲いかかってきたノーアイズ。その数四体。黒の唾液を滴らせ、醜惡な牙を光らせた。

その向かってきたノーアイズの最寄りの一体の頭を、ジョンは右腕で払った。

すると、そのノーアイズの頭はいとも簡単に、西瓜のように割れてしまった。大量の血液がアスファルトを染めた。溢れだした脳髓がそこに重なって蜷局を巻く。

第七章「煉獄」 5

続いて来たノーアイズの顔面に右ストレート。今度は首ごと擦じ切れた。

三体目。今度は蹴った。蹴った足がノーアイズのはらわたを貫通し、それは喀血して息絶えた。が、その死体が足先から抜けなくなった。足の甲が脊髄に引っかかってしまった。

その内に最後の四体目が、ジョンの顔面を掴んだ。そして彼の首を強引に擦じ切ろうとし、力を込めた。

しかし、その首は微々たりとも動かない。ジョンの首はまるで溶接された鋼鉄の様に頭部を支えていた。

ジョンは一心不乱にその腕を肩から？ぎ取ると、そのノーアイズの横腹を思い切り薙いだ。胃やら腸やらといった艶めかしい臓物達が花火のように弾け飛んだ。

その様を見て終えたジョンは半ば強引に足を死体から引き抜いた。

一瞬だった。ノーアイズ四体が一瞬で肉塊と化した。

何だこれは？何だこの力は……？

ジョンは血に塗れた己の拳を眺めた。少し叩いただけでいとも簡単に死んでいく。やろうと思えば爆殺できた。恐ろしい力を持ってしまった……。

ジョンは懷中電灯を持っていなかった事に気がついた。それと同時に自分は惨烈なほ程に夜目が利くようになってしまった事を悟った。

本当に怪物となつてしまった……。

空を仰視して叫んだ。だが、狂ってしまった喉仏の所為でその叫びは猛々しい咆哮に変わってしまった。

第七章「煉獄」 6

声が空で反響する。

……いや、だがそれでいい。

人間のままの俺の力ではダークネスには到底届かなかっただろう……。銃器でも死ななくなったノーアイズをどうやって返り討つんだ？

ジョンは神を恨めしく、有り難く思った。

血糊で粘ついた拳を固める。ダークネスへの憤怒と憎悪を込めて。

ボブ。お前は良い奴だった。お前の吐く糞ジョークは最高さ。

ロバート、アッシュ。お前等、好き勝手暴れやがって。本当世話に苦労したよ。

マックス。お前は頼りになった。調子者なのが玉に傷だったがな。レイ。助けてやらなくてすまなかった……。許せとは言わない。そして、ジャニス……。……。ありがとう。

……。また雪が降ってきた。追悼の白雪だ。

ーダークネス……。今すぐお前を殺してやる！！

コア・ビルに向かい、ジョンはありったけの力を脚に込めて突っ走っていった。

第0章「衰弱」 1

世界を闇で覆い尽くさんとする、ダークネス。
それに抗う反ノーアイズ組織、レジスタンス。

そして、もうひとつの反ノーアイズ組織、レコンキスタ。

貴方は覚えているだろうか。

あの老人たちのことを。

RPGを片手にジョン率いるレジスタンスから食糧を奪おうとした、あの輩である。

あの集団は、元々各人がレコンキスタの一員であった。

しかしある時の交戦中、彼らはその頭領に足手まといとみなされて捨てられた。

その様を、レコンキスタの一員、ウィル・トンプソンは啞然として見ていた。

「お前等、邪魔だ。」

レコンキスタの頭領サムは冷酷な人間であつた。仲間の死を厭わない男であつた。危機に陥つたときには部下を捨て駒の様に扱つた。特に足手まといの人間を捨てる時には決まってその言葉を吐く。今回の犠牲者は十数人の老人達だつた。

「な…何ですと…?!」老人達はその一言で自分達がどういう危機に瀕しているのか分かつた。

「歩くのは遅い、銃もロクに撃てない。そんな人間がこのレコンキスタに要るか？」サムの体格は筋骨隆々といった感じで、その胸板と彼の冷徹な眼差しで老人達は一瞬、たじろいだ。

だが、すぐに反抗した。彼らにとっては死刑宣告のようなものだからだ。廃都と化した化け物の町、ボストン。撤回させないと確実にこの地で骨を埋めることになってしまう。化け物だらけの町でたつた十数人の老人が一週間も生きられようか、いや生きられまい。彼らは生きたかつた。

「…私達一同は皆一生懸命に戦いますので、どうか今一度、捨てるなんて…」

「黙れ。」老人達のかすれた声の群の中、サムの冷酷な声がひとつ響いた。

と思うと、サムから最寄りの一人の老人が血飛沫を撒き散らして崩れ落ちた。

第0章「衰弱」 3

サムの持っていたRPGが煙を上げていた。

「俺の命令は絶対だ。背く奴は神の冒瀆とみなし即座に撃つ。貴様らはどうする？今すぐここで俺に撃ち殺されるか、億千分の一の奇跡を信じて助けを待つか」彼はそう言って老人達に問うた。

老人達は皆歯ぎしりし、拳を震わせ、眉間に血管を浮き上がらせて彼を睨んだ。が、逆らう事は決してできない。

サムはキリスト教の神父だからだ。

つまりこの老人達を含め、レコンキスタの隊員は全員彼の信者なのだ。

よって、皆、彼に逆らえない。

「これでは埒が開かない。三つ数えるうちに散れ。さもなくば全員撃ち殺す。」サムはまだ微かに煙を立ち昇らせているBARを構えた。その銃口はしっかりと老人達の方を向いている。人差し指の先を引き金に掛けると、彼の喉仏は動いた。「ひとつ。」

老人達は判っていた。彼が味方を容赦なく撃つ残忍な男だという事を。

彼らはサムの言葉を聞くと、皆散り散りになって逃げ出した。無言の悲鳴を上げながら。逃げ去っていく彼らの背中が悲哀と憎悪の念を語っていた。

第0章「衰弱」 4

老人達が暗闇の中に消えていくと、サムは馬鹿みたいに嘲笑した。「はははははは！！やはりクズは逃げる事しか出来んのだな！！」しかし、彼の取り巻き30弱からは誰一人として彼につられて笑う者は居なかった。

新米信者、スミス・トンブソンもその一人だ。その様子を呆然と見ながら、臓腑の底で怒りを沸かしていた。「この糞神父、死んでしまえ！！」と、心の中で叫んだ。だが、殺してやるとは言えなかった。他力本願の死の願いだ。彼はあくまでも、一応、神父だ。殺せば天罰が下る。スミスは神父の死を願っていた。出来るだけ、ごく自然な死。戦死。誰かが殺してくれまいかとさえ思った。

「さあ行くぞ、愚図共」

そして彼を殺せない理由がもう一つ。

サムが鬼神の如き強い力を持っているという事だ。

第0章「衰弱」 5

銃撃においても、格闘においても、彼は他を寄せ付けけない圧倒的な強さを誇っていた。

ただ一人でノーアイズの群れに突っ込んで生きて帰ってこれるだろう。

彼の強さを目の当たりにした信者は、誰も彼もが寄生虫のように彼についていくようになった。

そうしてレコンキスタは作られたのだ。

だが、彼は頭の方は腐っていた。

自身の強さの余り、殺しに悦を感じるようになってしまったのだ。レコンキスタ。結成当時は相当に統率が取れていた部隊だったが、日を連ねる毎に段々と頭領サムの凶悪な人間本能が目覚めていき、部隊がただの烏合の衆へと変わっていったのだった。

彼から離れよう、そう皆が考えた時にはもう遅かった。その時既に彼は冷酷な殺人鬼と化してしまっていたのだった。

「さあ、行くか。せいぜい死なんようについてこい」サムは正面に向き直ると、沈黙の中、骸を踏み越えながら歩き出した。

「ああ、糞。」スミスは誰にも聞こえぬような小さな声で呟いた。そして集団が動き出すのに合わせて歩を進めた。「これじゃあどっちも地獄と変わらない」

「そうだな。」

スミスがぎよつとして振り向くと、友、バースがそこにいた。誰にも聞こえないように言っただつたのに、こいつは本当に耳がいい。

「ノーアイズと神父……今ではどちらも化け物と同義さ」バースがおどけた調子でそう囁くと、手に持っていたある物をスミスに投げ寄越した。

あまりに急な出来事に少々たじろいだスミスだったが、辛うじて投げ寄越されたそれを掴む事ができた。

「何だこれ……。」「バースから貰ったもの……。それは少し大きめの紅い飴玉だった。」

第0章「衰退」 7

「俺達は昔っからの親友だ。ほら、餓鬼の時よく一緒に店から盗んでたじゃないか。その飴玉を。」

頬張ると林檎の甘い芳香が舌を包む優しい味わい。子供の頃、ミスとバースはその飴玉が大好きだった。だが、二人ともかなり貧窮していた。貧乏な母の手一つで育てられたため好きな物など何一つ買って貰えなかった。自分の好きな物は盗みでしか手に入れられなかったのだ。そして、何の因果か、この二人は出会ったのだ。スパーの菓子売場の前で。

「あの頃はよかった。お前と一緒に口の中で飴玉転がして川なんかで遊んでさ……」

「ああ……。あの頃は楽しかったな……。今は地獄だ。」過去を懐かしむミス。あの時の夢は今やどこか遠くの世界に飛んで行ってしまった……。

「それ、あったんだ。怪物パーティが始まる前日にな。あの店で余りに懐かしくなったもので買ってみたんだ。まあ、それは記念みたいなものだ。取っておいてくれ。」バースは一瞬肩をすくめると「まあ、もう俺達の口には合わないみたいだがな」と、苦笑した。

レコンキスタは南へと往く。目的地はニューヨーク、コア・ビルだ。

歩いていくと、冷たい風がスミスの頬を撫でた。

そう言えばもうすぐクリスマスだな……。

雪が降ってきた。皆が空を見上げる。混沌の闇の空に似合わない、綺麗な雪だった。時々立ち止まりそれを見ては、一年前に戻りたい、と誰しもが思った。唯一人、サムを除いては。

「……何過去を懐かしんでいるんだ？過去より今だ。今。グズグズしてると撃ち殺すぞのろま共。」

背筋が凍るような虫酸が走った。が、皆、物一つ、一切何も言わない。ただ、前を向き直り、歩き始める。その中には喉から出そうになった「死ね」という言葉を必死に押し込む者も居た。

「そう……それでいいんだ。愚図は愚図らしく俺の言う事を聞いていればいいんだ」雪の降る中、何も感じることなくサムは歩いた。そして、止まった。

「死に損ないか来るぞ。構えろ、ボンクラ共」

車の群れの陰で蠢く影を見て、サムは止まったのだった。そこで彼が浮かべた笑みは猟奇的な、狂った笑みだった。死体の断片で作った衣服に身を包んだエド・ゲインを彷彿とさせた。

「ああ、死体がこちらへやって来る。俺たちを地獄へ誘いにやって来るぞ……」サムが頬肉を不自然に歪めると、蠢いていた影の内の一つが車の陰から姿を現した。

醜く歪んだ肢体と、重油を思わせるどす黒い唾液を滴らせる紫の舌をぶら下げて、ブルがのそりのそりと鈍重な足取りでこちらに近づいて来た。

「見てみる、愚図共。あの哀れな犬を。」皆がその言葉を聞いて接近してくるブルに注目を始めると、サムは続けた。「あれは、犬として死ぬ刹那、こう願っただろう。ああ早く神の元へ、と。だがその祈りは今や誰にも叶わない夢となってしまう」サムの独り語りの最中、ブルの頭が穴だらけの肉塊と化していく。それが完全に力を失い、地に崩れ落ちるとサムはまた続けた。

「だから、死に損ないを見つけたら速やかにぶち殺せ。それが道理だ。」

血溜まりでひくつくブルの死骸。それを横目に新たなブルが一体、また一体と次々と暗闇から姿を現した。大きく口を開き、腐った歯茎を見せながら、それらは吠えた。鼓膜をつんざく耳障りな音が辺り一帯に響いた。

「何をしているんだ、愚図共。早くあの狂犬達を撃ち殺せ。」

サムの令が聞こえたが、誰もすぐには撃たなかった。ブルを殺すか、サム神父を殺すかと葛藤したのだった。だが、すんでの処で思いとどまり、ブルの方に銃口を向けた。

「おい、早くしろ、殺すぞ」

サムが瞳孔を開き、大きく息を吸い込んだ所で、集中砲火が始まった。たちまち大きな硝煙が立ち昇り、その弾幕は現れた来たブル達に一齐に襲いかかった。

響き渡る銃声に、肉体を肉片に変える湿潤な音が絡みついてくる。硝煙の霞にブルの四肢や頭部が千切れて飛んで行くのが幾つも見えた。ぶち撒かれていく臓器が陰惨な悪臭を生んでいく。

静寂。ブルが全滅した。レコンキスタは僅か数秒の内に何十匹という数のブルを1匹残らず駆逐したのだった。未だ銃声が微かに夜空で木霊していた。

「……多分まだ来るぞ、用心しろよ……バース……」

「OK……、分かった」静寂の中、サムに聞こえぬように囁き合う、スミスとバースの二人。手に持ったBARをぐつと握り締める。その数秒後、スミスの予想通り、石造りの高級ホテルの割れた自動ドアからノーアイズが次々と這い出てきた。灰暗い闇の底から現れたノーアイズ。眼窪から黒い涙を滴らせ、口元からは鼻が曲がるような腐臭を吐き出す。それらはおぼつかない足取りで粘着質な足音を鳴らしながらこちらへ向かってきた。

皆、それらの頭部を狙ってBARを構えた。

と、その瞬間……

「撃つな!!」と、サム。「撃つたら殺す!!こいつらには俺の玩具になって貰う……貴様等愚図共はそこで見ている」

サムはそう言い放つと、肩を切って歩いていった。皆、固唾を呑んでそれに見入る。

ノーアイズとの距離が狭まってきた。徐々にノーアイズの攻撃範囲へと足を踏み入れていくサム。不敵な笑みを浮かべながら、両手にBARを2挺携えている。

「愚図共、よく見ておけ。これが本当のBARの使い方だ。」盛り上がった筋肉が目立つ太い腕を持ち上げると、2挺のBARの銃口が2体のノーアイズの額を捉えた。

すると突如、BARが火を噴いた。凄まじい轟音を上げて、ノーアイズの頭を粉微塵にしていく。それが終わると、別のノーアイズを撃ち、次に疎らに撃つ。かなりの弾を消費しているだろうが、未だに弾切れは起こらない。

サムが撃っているBAR、マガジンの長さが80センチもある。装弾数120発。それが2挺だから2倍で240発。これを扱うサムはまさしく化け物だ。

そしてサムはノーアイズを粗方薙ぎ倒すと、何故か銃身の熱くなつたBARを2挺ともかなぐり捨てた。

銃がオーバーヒートしてしまったのだろうか？また何か新しい武器が出てくるのか？

その意味不明な行動を初めて見た者は皆、そうやって首を傾げるだろう。だが、それを幾度となく見ている団員達は、それから後に起こる残酷な私刑と狂騒を見まいとただ目を瞑るのみであった。

奴は不都合で銃を捨てたんじゃない、

悦しむが為に捨てたのだ、と。

怪物の群に只独り往く者の笑みは異形のそれであった。

丸太の様な太い腕を振りかざし、薙ぐ。

すると、その軌道の途中のノーアイズが叫んだ。頭部が半分抉れていた。脳汁が勢い良く飛び散り、脳髓が頭蓋から爛れてきそうなのをサムは驚掴みにし、一気に引き抜いた。そのノーアイズはびくんと一回大きく痙攣すると息絶えた。即死だった。

そう、サムはノーアイズとの肉弾戦を悦んでいるのだ。

サムの腕に触れるノーアイズが檻褸雑巾のように千切れていく。

右フック。右にいたノーアイズの首が一瞬でもぎ取られた。

左ストレート。正面にいたのが、そこら一辺に血を撒き散らして死んだ。

後ろから襲ってくるのを受け流すと、すかさずその顔面にエルボーを喰らわせ、そいつが悶えている隙に、左から来たノーアイズに鳩尾を蹴って引き離す。と同時にエルボーを喰らわせノーアイズに止めを刺す。その首を持ち上げ、一気に地面へ叩き付けた。サムの掌に首の骨が景気良く折れる感触が伝わってきた。

鳩尾を蹴られたノーアイズが再び襲い来る。それを上段後ろ回し蹴りで強引に地面へ倒すと、サムはその鳩尾を踏みつけて、そのノーアイズが起き上がってくるのを制止した。

ノーアイズがもがけばもがくほど、サムは踏み付ける脚の力を強くしていく。ノーアイズが無意味に動かす手足。サムはその中の一本、左腕を握ると、思い切りそれを肩からぶち抜いた。

割れ響く大絶叫を上げてのたうつノーアイズ。噴き出した血のまどろみで悶え狂う。次は左足を引き千切る。絶叫が一層大きくなった。不規則に痙攣する、右腕と右脚。腐臭を放つ口から血の泡が次々と湧き出ていく。

そしてついに四肢全てが千切り取られた。血塗れの達磨になってしまった瀕死のノーアイズはぐったりと横たえ、意味もなく、微かに唇を震わせる。

見守っていた団員達は凍り付いた。彼らはこういう私刑を今までに何度も何度も見てきたが、今もこれからも決して慣れることはないと確信していた。

闇空を仰ぎ、胸震いしながら笑い狂うサム神父。その笑い声は天まで届いてそのまま返ってきそうな程だった。

「……ここまでイカれてる奴は地球ではもう居ないだろうよ。」
呆然と立ち尽くすバース。その瞳は死んでいた。「本当に俺達はコイツについて行って大丈夫なのか……？」

すると、「何を今更」とスミスが返した。

「俺達があんな狂った神父を選ばざるをえなくなった程にこの世の中が狂いやがったんだよ」

「そうかい。」バースは自分の腕時計を除いた。午前2時半。「だけど俺はそうだとは思わないね」

「どうしてだ？」

「元々狂ってたさ、世の中。それがちょっと違う方向に行っただけさ」

「……そうだな。」スミスはそうとだけ答えると、BARのマガジンを換え始めた。慣れた手付きだった。

バースはそれを見ると、一つ生欠伸をして言った。「まあ、今は我慢さ。何だかんだ言ったって、あの狂人についていけば俺達は助かる……そうだろう？」

「……まるで狂ったスーパーマンだな」

しかし、バースの言い分のようににはならなかった。

サム神父は今からたった24時間後、死ぬのだから。

第0章「衰退」 16（後書き）

高校の期末テストがあるんで四日くらいお休みします。

7月1日 記

第0章「衰退」 17（前書き）

久しぶりです、ハイ。

第0章「衰退」 17

クリスマス・イヴ。12月24日。

ニューヨークでレコンキスタの一同は孤立無援の中、迫り来るノ
ーアイズの猛攻に耐えていた。

大挙居た部員は半分以上に減らされていた。

死んでいった者は皆、各人生き残る術を持っていたが、死んだ。

狂人が殺していったのだ。

狂人の為に皆死に、狂人に皆殺された。

残ったのは、スミスとバースと他十名。

午前五時四十二分。

絶望の惨禍の中、

魔女の釜底の中、サム達は地獄の彼方へまっしぐらに突っ込んで
いた。

死神の賛歌の中

「畜生！！畜生！！」

「糞おお！！」

「殺してくれえええ！！」

味方の唾鼻叫喚を片目にも入れず、サムは独り、殺戮を悦しんでいた。

「何をやってる、愚図共」

とただ繰り返すばかりであった。

ニューヨークのノーアイズの量は尋常ではなかった。隙間という隙間から、全包围から押し寄せてくるのだ。

全く余裕のサムに対し、限界の部員達。あつと言う間に一人欠け、二人欠け、瞬く間に数を減らしていく。

何体殺しただろうか。何人殺されただろうか。何体出てきただろうか。何発撃っただろうか。最早皆目検討つかない。無限に広がる地獄に精神が狂わされていく。

ノーアイズの壁に囲まれて、皆が応戦し始めた頃、その中の一人が突然発狂した。

「ははひははふaふひひははhははふひははhaはひひひはah！！」聞くに堪え難い奇声だった。

海老反りになって五月蠅いサイレンを響かせる。

宥め、正気を取り戻させようと皆必死になった。しかし、遅かった。

次の瞬間にサムの弾丸に頭を挟まれて死んでしまったのだ。

「喚くな、愚図。」サムの瞳は狂気に満ち満ちていた。「目の前の敵に集中しろ、糞馬鹿め。」

そう言つと、再び押し寄せて来るノーアイズを撃ち始めた。まるで、ただ一人が戦っているように。ただ一人で闘っているように。仲間の事に振り返りもせず、黙々と殺し続けている。

団員の事はどうでもいいように。

……この時、皆は確信した。

――我らの指揮者、サム神父は目的を見失っている。そして、死んでいる。彼は死んでいる、と。彼の頭はもはや血で埋められ、殺戮の事のみしか考えられないようになってしまっている、と。人間として死んでいる、と。人であるが人ではない、人非人である、と。全てを悟ってしまったのだ。

第0章「黄昏」

夜が明けた。

サムは辺り一面に広がる死屍累々の山の前に佇んでいた。憔悴した狂気を漂わせ、独り愉悅の笑みを零す。ビル陰から出てきた陰惨な太陽に照らされる。

足元には仲間の死体も転がっていた。眼窪から飛び出した光の無い眼球がサムの背徳の眼球を空しく睨んでいた。

アスファルトにばり付いた肉塊達が腐臭を運ぶ風に揺れる。四散した臓物が艶やかに煌めき始める。

良い夜だった、とサムは呟く。

目の前に広がる紅い花畑。その花達は今、夜明けと共に咲き誇ろうとしていた。

空を仰視する。白み掛かった夜空。光が夜闇を浸食していく。

サムの腹に穴が開いた。紅い血が噴き出し、飛沫が花に降り懸かる。

振り返ると、団員達が銃を撃っていた。皆、銃口を自分に向けて撃ってきている。

「貴様等が主に反逆する気かああああ!？」

サムもウーギーで反撃をする。しかしその時既に、彼の両腕が弾丸の雨に千切られていた。

やがてその雨に、全身が埋もれていく……。

第七章「煉獄」 7

コア・ビル122階。

ミシエル・ドラクローが机上の紅茶を一口含む。部屋の巨大な窓から、滅んだ世界を見降ろしていた。

――最早世界は私の物だ……。

勝利を確信し、ほくそ笑む。

ミシエルの瞳孔が街で暴れ回る巨軀…… B i g g e r を捉えた。辺りビルをなぎ倒しながら、足元で逃げ惑うノーアイズ達を喰らっている様がよく見えた。

B i g g e r はノーアイズを喰らう、ミシエルによって作り出された、化け物の上を行く化け物だ。反乱分子をより確実に駆逐する為に、ミシエルのノートパソコンによる操作で直接操られている。

雪解け水が、粘りついた雪の間を縫って窓を伝う。静寂に包まれていく世界。曇天から白雪が酷く舞い込んでいた。

その時、ふと音がした。打撲音と同時に大量の液体が噴き出す音。何やら廊下が騒がしい。

第七章「煉獄」 8

――反乱分子共か……！？

ミシエルがそう思い、席を立った瞬間、部屋の大扉が開いた。するとその先に血塗れのノーアイズが一体、佇んでいた。

かと思うと、そのノーアイズが飛び、一気にミシエルを押し倒した。

「がはっつ……！！」痛みにミシエルが苦悶の声を上げる。腰のベレッタを抜く暇さえ無かった。全くの無防備で押し倒されたのだ。鈍い痛みが後頭部で響く。

――特異体か……！！

特異体。意志の働かない通常のノーアイズと違い、人間的な意志を持って生まれる極めて稀なノーアイズの事である。言うならば、半ノーアイズ……。

「糞！！」ミシエルは素早く立ち上がり、机上にあるノートパソコンへ向かった。

このノーアイズを殺す為に……。

第七章「煉獄」 9

006号の信号によってノーアイズが強化された。ならばその信号を打ち消せば、力は通常に戻る。

通常に戻った力のこのノーアイズの頭を撃ち抜けば、終わりだ。パソコンに辿り着いた。キーボードを打つ。

だが、すぐに引き離された。壁に打ち付けられる。吐血した。

「かはあ……！！」悶絶する。視界が混濁する。

一瞬で距離を詰めたノーアイズがよろめくミシエルの顔面に拳をねじ込む……。

それを間一髪でかいくぐり、再び向かう。

その刹那、左肩が挟られた。同時に血で真紅に染まった左腕が意味無き振り子運動を始めた。

再度、パソコンに辿り着いた。マウスを苛り、左クリック。

左腕がついにもぎ取られた。血の滝が傷口から流れ出した。

その時、部屋に銃声が響いた。硝煙の匂いと弾核の落ちた響きは後からやって来た。

ノーアイズがよろめきながら後退した。ミシエルに鳩尾を撃ち抜かれたのだ。どてっ腹から溢れる黒い血が、床で斑点を描く。

そう、ミシエルは左腕をもがれる刹那、シグナル解除に成功したのだ。

よって、ノーアイズの体は通常通りの肉質、速度に戻った。

低い唸り声が轟いた。断末魔だろうか。

同時にミシエルも叫んだ。

――私が作った物に殺されてたまるか！！

ノーアイズの体にありつただけの弾丸がぶち込まれていく。

脇腹が抉れ、腕の筋肉が千切られ、太股の肉が破碎され、肺を貫かれた。

漆黒の血の霧が飛散し、ノーアイズの体躯がミシエルの前に崩れ落ちた。銃創から流れ出た腸が血の海の中に沈んでいった。

銃声の響きが止んだ後、聞こえたのはノーアイズの虫の息、虚空に酸素をせがむ音だ。

「ク……ソ、早く……地下で治療を……！」千鳥足で部屋の扉へ向かうミシエル。彼は左腕を失った事による大量出血で意識が朦朧としていた。目が霞む、耳が遠のく。体が、自分でも解る程に冷たくなっていく。

倒れたノーアイズに一瞥する。全く、ピクリとも動かなかった。向き直り、また歩く。

地下にはミシエルが指揮する研究員達の研究室がある。そこに行けば、治療が受けられる……。

次の瞬間。

二体目のノーアイズが部屋の扉を破り、ミシエルの両の眼窩を喰い千切った。

「ぎゃあああああああ！！」

ミシエルが大きいたじろぎ、痛みに悶える。顔面から鮮血が止めどなく溢れる。眼球を奪われた彼の視界は、一瞬で闇に閉ざされた。悶えていると、今度は首筋の方に酷い痛みが走った。大絶叫した。触ると、首の半分が抉り取られていた。今、直に指先で己の脊椎に触った事に彼は戦慄した。

首が意図せずとも、段々と横に傾げていく。頬と肩に伝わる粘った感覚で、ノーアイズが自分の首をへし曲げようとしているのが容易に推測できた。

第七章「煉獄」 12

そうした直後、ミシエルの意識がぷつりと途絶えた。脊椎が折れる、鈍い音と共に。

一瞬の沈黙。

やがてミシエルの頭蓋を持ったノーアイズが、一言呟き、沈黙を破った。

——レイ……。

床に転がった、銃殺されたノーアイズに、跪いて手を触れる。

——ありがとう……。そして……。すまなかった……。

振り向くと、ダークネス、ミシエル・ドラクロアの斬首死体が無残に転がっていた。そこに、彼の頭蓋を放り投げる。宙で放物線を描いた頭蓋は、床でしばらく不規則な軌道で転がった後、止まった。そこに、小さな血溜まりが出来た。

赤い血。

正真正銘、人間の血だった。

第七章「煉獄」 13

ダークネスが、今、死んだ。
レジスタンスは遂に悲願を成し遂げたのだ。

そう、今立っているノーアイズは、レジスタンスのリーダー、ジョン。

床に転がり、血達磨になって死んでいるノーアイズは、レイ。

ジョンは、深く息をついた。

二か月に渡るノーアイズとの闘争への終止符。
ようやく終わりを告げた、戦争。

窓から見える夜空を仰視する。

空が赤みを帯びていた。

弱弱しい夜明け前の月が、ビル蔭の向こうへ落ちていく。

耳を澄ますと何処からともなく雑踏が聞こえてきた。

次の瞬間、ジョンは死んだ。

背後から無数の弾丸が彼の身体を貫いたのだ。
合計57発の銃弾を受けた彼は、何の間も無くして事切れた。

「スミス団長、バース副団長！！中のノーアイズを仕留めました
！！」

「そうか、じゃあ全員、中に入ろうか。」
「サー！！」

団長スミスの号令で部屋に入るレコンキスタの一同。サムが死に、スミスが跡を継ぐと団内の秩序は回復し、かつての姿を取り戻した。中には、一人の人間と二体のノーアイズが血のまどろみに横たわっていた。部下の報告によると、人間とノーアイズの一体は元から死んでいたらしい。

すると、人間……この男がダークネス……！
部下の一人が部屋中央のデスクに向かう。デスクのパソコンで制

御されているノーマイズとBiggerを駆逐するためだ。

「終わった……な」スミスの横にいたバーズが呟いた。

「ああ、……だが、無様だな……ダークネス……」

「そうだな、自分の作ったモノに殺されるなんてな……神様の罰が当たったんだろうよ」

「はは、まあ、何にせよ、良かった」

「ああ………おっと、そうだ、せっかく仕事が終わったんだ、何か記念になる事を……」

「……と、言っと？」

「飴玉だよ」

「……そうだったな」

二人はそれぞれ、ポケットの中の紅く大きい飴玉を手を取った。

「……じゃあ、この腐り果てた世の中に……」

「目一杯の皮肉の意を込め……」

〓〓 乾杯。

口の中に放った飴玉は、何故か酷く苦かった。

後書

えー、読者の皆さま。

こんな物に付き合ってくれて有難う御座いました。

ぶっちゃけて、これ、かなりアドリブで書き連ねていました。

んで、作者をも裏切る予想外の展開に……。

すみません。計画性ゼロです。

結果かなり物語上に矛盾点が出てきましたが……

今後、気が向いたらちまちまと修正する予定です。

さて、この「EYES」。ほんととは？まで出す予定だったんですが、引き続いてのの主人公ジョンさんが死んじゃったので叶わなくなっていました。ご冥福をお祈りいたします。

さらに、毎日更新予定とほざいていたのに、後半一カ月間も休むなどの体たらく。

ホントにすみません。自分の勝手な怠惰です。

最後に一言。皆さんどうも、有難う御座いました、そして、済みませんでした。

追記：次回作は嫉妬に歪む中世貴族の物語を書く予定です。タイトルは「Dirty Rose」（仮）。今度はちゃんと計画して書きます！！

それではまだ、ごきげんよう！..！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6322p/>

EYES

2011年11月11日11時24分発行